



月の光を
纏う者

4



月の光を
纏う者

4

第34話 月の夢

雲ひとつ無い、澄んだ夜空。

真っ黒に塗られた飛空艇が、山肌をなぞるように駆け抜けた。

飛空艇と言ってもグライダーを金属で覆ったような、とても小さな船である。

「この山を越えた所で、レオニール軍の分隊がキャンプを張ってる筈だ。

用意はいいな？」

飛空艇の操縦者が、後ろのシートに座る相棒へ話しかける。

操縦桿を握るのは、肩まで伸びた金髪を首の後ろで纏めた青年だった。線の細い体つきで、まるで事務仕事をするかのような服装で操縦桿を握っている。しかし服装とは裏腹に、その目つきや口調のせいで"何処の町にでも居るような不良"という粗野な印象が先立っていた。

激しく震える操縦桿を握りながら、男はもう一度呼びかける。

「おい、聞いてんのか ザード！？」

後ろのシートから返事が無く、男は相棒の名を呼ぶ。

「ああ。聞いている」

操縦席の後ろに座る男は、紅い抜き身の剣に暗い視線を落とし、短く答える。

印象的な姿の男だった。

華奢な体を紺色のローブで包み、端正で白い顔をした男。そして鈍く光る銀の髪が、肩から腰へ流れていた。

年の頃は操縦桿を握る男より若く、僅かだが少年のあどけなさも感じる。銀の髪の男が、容姿の割りにやや低い声で問いかける。

「それよりもゲイル。今回は船の機関銃や爆撃の援護は要らないよ」

「あ。そりゃ構わないが・・・大丈夫なのか？」

「銃器もまともに支給されてない弱小部隊だろ？ 弾だってタダじゃない。

それに、今日は調子がいいんだ」

「あっそ・・・。まあ経費が浮いて助かるけどよ。

と、着いたぞ。この丘を昇りきった所だ。用意しろ」

ザードは腰に下げたライフルとリボルバーを手探りで確認し、左手の紅い剣を握り直した。

「いつでも」



どんっ！！

レオニール軍のキャンプを突風が吹き抜けた。

見回りの兵士を何人かを吹き飛ばし、幾つかのテントがひっくり返った。

「何事だ！？」

「空を、何かが飛んで行ったぞ！！」

巻き上がる砂埃と闇夜で視界が殆ど無くなる。丘の上の兵隊達は、事態が飲み込めずに騒然とした。

「敵の爆撃か！？」

「それにしちゃ、爆風以外は何も・・・」

動揺を誤魔化すように、憶測を口にし合う兵士達の後ろで。

バガンッ！

彼らが背にしていた装甲車が大きく揺れた。振り向いた先では装甲車が真っ二つに割れ、綺麗な断面を見せながら浮かび上がっていた。

ボガアッ！

兵士達は何が起きたのか理解する事も出来ぬまま、爆発した装甲車の炎に巻かれた。

その爆発を皮切りに、所々に停まっている軍用車両が次々と爆発、又は真っ二つにされてゆく。相変わらず相手の姿は確認出来ず、兵士達は砂埃と黒煙が立ちこめるキャンプを駆け回る。

「火を消せ！！」

6番隊は倉庫から火薬を運び出せ！！」

右往左往する兵士達へ怒鳴りつけるように命令する男に、一陣の紅い風が吹きつけた。

彼の目の前に舞っていた砂埃と黒煙は一瞬で吹き飛び、そこから姿を現したのは、上下に真っ二つに切り裂かれたテントや、木立。そして上半身が下半身から崩れ落ちようとしている部下達の姿。まるで見えない巨大な刃が、森や夜の空気を切り裂きながら迫ってくるような、非現実的な光景。そして、気付いた時には彼の体も腰の辺りで二つに分かれていた。

全てが二つに断たれた空間の先に、剣を携えた男が一人、立っていた。

この混乱の場に似つかわしくない静けさを持った青年は、月明かりを背に戸惑う兵士達を見下ろした。

その青年を見た兵士達は、ここ最近まことしやかに囁かれる一つの噂を思い出し、凍りつく。

突然戦場に現れ、たった一人で幾千もの人間を切り捨てる殺戮者。

銀の髪を舞わせ戦うその姿は、

まるで月の光りを纏っているかのようだった。

月の光を照り返し、男の鈍く輝く銀の髪が揺れた。

「つ・・・月の光を纏う者・・・！？」

ざばあっ

呟いた兵士と、その周りに居た者や在った物がまとめて紅い風に吹き飛ばされ、バラバラになった。

"月の光を纏う者"、ザード = ウオルサムの手にする剣が、紅い魔力の光を輝かせていた。たった一振り、遥か間合いの外の空間を見境無く裂いてしまう。この紅く薄い刀身の魔法剣と、彼が蔵する膨大な魔力の成す技の一つだ。

「"月の光を纏う者"だ！！

討ち取って名を挙げろ！！！」

一人の兵士が大剣を振りかざし、ガードの背後へ飛び掛った。ガードは表情を動かさず事無く、振り向きざまに襲い掛かる男を大剣ごと斬り裂いた。男の声と同時に、兵士達は武器を手に、ガードへ向い殺到した。流石に紅い風の"かまいたち"を放つ余裕が無く、ガードは次々と襲い来る兵士達を淡々と一本の剣で切り崩してゆく。

殺到する兵士達の間から長いバレルを持つ銃口が現れ、ガードへ向け突きつけられた。

ポッ！

ガードは剣を持つ手とは逆の手で銃のバレルを掴み、銃口を他所へ向けた。発射された散弾はガードの後ろにいた兵士数人を撃ち倒す。掴んだバレルを引き寄せてガードに倒れ込んできた兵士を斬り伏せ、散弾銃を奪う。一人ずつ斬り倒すのが面倒になったガードは、散弾銃で密集する兵士達を次々と撃ち倒す。

最初に襲い掛かってきた兵士を斬り倒してから、その間わずか1分。ガードの足元には文字通り死体の山が積み上がっていた。ガードの常識を逸した強さをようやく理解した兵士達は慌てて後退し、ガードを遠巻きに囲む。

ガードは弾の切れた散弾銃を投げ捨て、紅い剣に魔力を集める。そして、距離を取ってしまった兵士達へ向かい、再び紅い風を叩き付けた。

見えない風の刃で、次々と斬り飛ばされる兵士達。攻撃をかいくぐり間近まで迫ってきた兵士は、ガードの持つリボルバーにより胸を打ちぬかれた。

一方的な戦い。

殺戮だった。



ピピッ

ザードの腕に巻かれた時計から電子音が響いた。

すると突然ザードは駆け出して、怯えて逃げ出す兵士達の脇をすり抜け崖から飛び降りてしまった。

「・・・！？」

怯える兵士達がザードの飛び降りた方角を見ると、黒いグライダーのような飛空艇が、轟音と共に飛び去っていった。一人の兵士の目は、その飛空艇の翼にザード＝ウォルサムが捕まっている姿を写した。飛空艇はそのまま、空の彼方へ飛び去ってしまった。

「助かった・・・のか？」

兵士の一人が声を震わせて呟いた。

「みたい・・・だな・・・」

でも、これじゃ作戦は続けられない・・・これからどうすればいい・・・？」

生き残った兵士達が座り込み途方に暮れていると、遠くから機械の駆動音が響いてきた。

「何だ・・・ベクタの・・・援軍か？」

「援軍の到着は明日だ、いくらなんでも早すぎ」

最後まで言えぬまま、その兵士は森から飛来した弾幕に撃ち倒された。

森の奥には、各国の本隊が衝突する前線へ向い進軍を続ける、エベネゼル軍がいた。



「あれだけ叩けば、貧弱なエベネゼルの部隊でもあの丘を通過出来るだろう。

お疲れさん」

操縦席の後ろに座ったザードへ、ゲイルは労いの言葉をかける。息ひとつ乱していないザードは短い溜息を吐いた。

「気に入らないな。エベネゼル絡みの仕事は。

まるで奴等のお芝居の裏方をやらされている気分だ」

その言い草を聞いたゲイルは鼻で短く笑う。

「違いねえ。

宗教国家というお国柄強大な軍事力を抱える訳にもいかないし、だからといって大国である以上負ける訳にも行かないしな。

それで出来た構図が、名前が面に出ない同盟国や俺達傭兵に戦わせて、自分達は最後の仕上げと戦いの後の後始末・・・。

まるでお遊戯だな」

「そんな下らない体裁繕いに加担してるってのが、馬鹿馬鹿しくて気に入らない」

ザードの愚痴に、ゲイルは声を上げて笑った。

「何を今更、

この戦争に関わること自体、馬鹿けた行為だ」

ひとしきり笑い、皮肉を込めた本心を呟き、

「まあ。金にはなるがな」

と、付け足す。

ザードは苦笑し、目を閉じた。

雲ひとつ無い、澄んだ夜空。

真っ黒に塗られた飛空艇が、山肌をなぞるように駆け抜け、飛び去った。

第35話 依頼書

「ミルフィスト軍からの依頼で、レオニール侵攻の先陣を率いて欲しい・・・
依頼料は300万」

「ここから遠い。断る」

ザードの即答に、ゲイルは次の依頼書をめくる。

「・・・ルゴワールからの依頼で、某国の要人暗殺。依頼料150万」

「安い。却下。なめてんのか？」

ゲイルは口元をひん曲げ、次の依頼書をめくる。

「・・・オーランド軍からの依頼で、国境付近に駐留するベクタ軍を潰して欲しい。駐留して
る敵の数は8千」

「8千を俺一人で片付けろって事か？ 買い被り過ぎだろ・・・

無理だ。俺が一度に相手出来るのは一千が限界だ」

ソレも常識外れだろうと思いつつ、ゲイルは次の依頼書をめくる。

「・・・オルガニア軍の正式な筋からの依頼で、隣国との国境警備に力を貸して欲しい・・・
依頼料は一日あたり50万出すそうだ。

危険も少なそうだし、依頼料も破格だ。こいつを逃すテは・・・」

「退屈そうだな。守る仕事は性に合わない」

「じゃあどんな仕事がいいんだよっ！！」

依頼書を放り投げ、ゲイルが怒鳴った。

どこの戦場からも離れた、比較的平和な街の宿にザードとゲイルは宿泊していた。二人は拠点
を持たず、流れの傭兵として各地を飛空艇で飛び回っていた。傭兵として戦うのはザード、ザ
ードへ仕事を運んでくるのがゲイルの仕事であった。

「次の仕事欲しいって言うから、依頼集めてきてやったのによ・・・

お前、最近調子乗ってるだろ。最初はどんな仕事でも引き受けてたクセによ。

お前のワガママに合わせて仕事取って来るのも大変なんだからな？」

そう言ってゲイルは冷えた酒瓶をあおった。

「じゃあ、一緒に仕事するの辞めるか？」

あっさりドライな事を言い放ち、ザードは床に散らばった依頼書を拾い始めた。その言葉に
、やさぐれていたゲイルの表情が、少しだけ真面目な顔つきに変わる。

「いいや。お前のような金ヅルは、なかなか居ないからな。手放すつもりはねーぜ」

指を立て、悪そうに、にやりと笑うゲイルに、ザードも同じような笑みを返す。

傭兵の仕事とは言っても、彼等のしている事は普通の傭兵業と違っていた。

何せザードは戦場の伝説にもなりつつある、"月の光を纏う者"である。

突然戦場に現れ、人間業とは思えぬ力を振るいたった一人で敵軍を壊滅に追い込む謎の剣士。

何処かの勢力に意図的に肩入れする事は無く、その行動基準は全て依頼料によって決まる。昨日雇われていた国に、今日は敵として剣を振るう事だってある。世間ではまだ噂の域を出ない存在だったが、軍の上層部や裏の世界を詳しく知る者にとっては、"月の光を纏う者"は確かに存在する人物と認識されていた。

"月の光を纏う者"は、戦場以外に一切姿を現す事は無い為、彼へコンタクトを取る唯一の方法は、とある情報屋を経由するしか無いと言われている。そしてその情報屋、ゲイルの手元には、独自の情報網から"月の光を纏う者"の力を必要としている者達の依頼が舞い込むようになっていた。

こうしてみるとゲイルはザードを上手く利用し、自分は戦わず楽をして儲けているようにも見えるが、彼もザード以上に危険な橋を渡りながら旅をしている。

なにせ、"月の光を纏う者"の力を欲する者や、また恨みを持つ者は星の数ほど居るのだ。それら全ての意識をゲイルは一人で受け止め、あるいは回避し、必要と判断した接触のみをザードに繋げているのだ。こうして街の安宿に何食わぬ顔をして宿泊しているのも、今も血眼になってザードを追っている者達の目を眩ませ、掻い潜ってきたからこそできる事だ。

数日に一度、数百という人間を相手に戦うザードに対して、ゲイルは毎日情報戦という形で何千、何万という人間の意識と戦っているのだ。

こうして互いを補い合う形で、ザードとゲイルは数年前から一緒に戦場を渡り歩いていた。

「大体、ザードは俺に対して感謝の気持ちが無さ過ぎる。

お前の腕に見合った仕事なんて、俺くらいの情報網を持つ情報屋じゃないと、こんなに集められないぞ。

お前に恨みを持つ奴が、お前の居場所を見つける事が出来ないのも俺の流してる偽情報のお陰なんだからな？」

腕を組み偉ぶったゲイルの主張に対して、

「感謝してるよ。ありがとう、ゲイル」

ザードは愛用の銃の手入れをしながら上の空で答えた。ゲイルはわざとらしく舌打ちをすると、呆れた様子で自分の部屋へと戻って行ってしまった。ザードは、"何が気に入らないのだろう?"と言った様子で、首を傾げる。



一通り自分の得物の手入れを終え背伸びをしたザードは、足元に広がった紙片を拾い上げる。ゲイルが放り出した依頼書だ。

一枚ずつ拾い上げ何の気なしに眺めていると、確かに先程ゲイルが読み上げた依頼以外は条件や場所が今ひとつで、ザードも引き受ける気になれないものばかりであった。

その依頼書の一枚にザードの目が止まった。

報酬や仕事内容は、ゲイルに無視されても仕方の無いような依頼内容である。しかし、ザードはその依頼の報酬に目を奪われた。

暫く考え込むように依頼書を睨んでいたザードだったが、意を決したように立ち上がりゲイルの部屋のドアを叩いた。ドアからふてくされた顔を覗かせたゲイルに、ザードは依頼書を見せながら一方的に言い放った。

「ゲイル、この依頼、受けるぞ」

ほんの偶然だった。

普段、依頼書の選別はゲイルに任せきりで、ザードがそれに目を通す事など殆ど無い。

ほんの偶然、気まぐれで見た依頼書の束。

ほんの偶然、目に止まった一枚の依頼書が。

全ての、始まりだった。



「絶対怪しい。絶対担がれてるよお前・・・」

「かもな。だけど、こんな報酬を書かれちゃ、無視は出来ないさ」

数日後、ザードとゲイルは、宗教国家・エベネゼルの城下町を歩いていた。

ゲイルの慚然とした表情の理由は、ザードが受けると言い出した依頼が、あまりににも胡散臭い仕事だからである。

依頼内容は、"エベネゼルの王宮に傭兵として雇われ、とある護衛の仕事を引き受ける事"。

依頼主が何の為にザードをエベネゼルに送り込もうとしているのか。全く依頼の意図が読めない仕事である。無論雇われる身である以上、雇い主の意図が雇われる側が詮索する事はルール違反なのかもしれない。普段の彼等ならば、雇い主の意図が読めないような怪しい仕事は鼻から引き受けない。しかし、ザードは依頼書に書かれた依頼者の肩書きと、その報酬を見て、この依頼に興味を持った。

「あのエルカカ民族の伝説に残るような、魔法剣が報酬だぞ。

それに、依頼主はエルカカの長なんだろ？」

「ああ、俺の調べた限り、依頼主の素性はそれで間違いなさそうだ。俺が心配してるのは、その剣のお宝がマジで存在してるのか、あとそいつの価値はそれなりのモノなのかって事だ」

「もし報酬が本物なら、この依頼を無視する事は出来ない。それに、俺を担いだらどうなるかなんて、俺を知る奴なら分かってるだろ？」

そう言って、凄みの効いた笑みを見せるザード。

「おお、怖い。

で、そのお宝ってのはどんなモンなんだ？」

俺は魔導に関する知識が無いからピンと来ないんだけどよ」

ザードは視線を少し上げて、記憶を探りながら話す。

「"ノア"と呼ばれる魔法剣。俗な呼び方じゃ、マインドブレイカーとも呼ばれている。

相手の体を傷つける事無く、精神のみを破壊する剣だ。言い方を変えれば、殺す事無く相手を倒す事の出来る剣、だな。

今より魔導文明が栄えていた古代に量産されていた剣だという話だが、現存しているものは少ないらしい。俺が知る限り、もう何十年も世間に姿を見せたという情報は無いな。それと・・・」

"ノア"という魔法剣について知りうる限りの知識をゲイルに伝える。しかし彼の耳は、"魔導文明が栄えていた古代に～"の辺りから、完全に聞き流していた。ゲイルは手をひらひらと振って、
「ああ、もういいよ。

ま、お前が興味を持つ依頼なんて稀だしな。たまにはこんな仕事もいいだろ」

「悪いな、我俣言って」

「んな事より、その剣はちゃんと高値でさばけるんだらうな？」

「売らないよ。殺す事無く相手を倒せる剣だぞ。こんな便利な物は無い。

相手を殺さずに済むのなら、それに越した事はないしな」

ザードのその一言に、ゲイルは驚いた。

金に変える気が無いという点ではなく、相手を殺さずに済むなら、という点に対してだ。

「幾千もの人間を斬り倒してきたお前に、そんな思いがあったなんて驚きだな・・・。

俺はてっきり、殺しを楽しんでるのかと思ってたぞ」

ザードは一瞬、むっと顔をしかめるが、

「・・・どうだろうな。自分でも良く分からない」

「じゃあ聞くけどよ、お前、何の為にこんな事してるんだ？

金のためか？ ただ暴れたいだけなのか？」

ゲイルの問いにザードは暫く空を見上げ、

「分からない。

最初は生きる為に戦ってただけだったのに・・・。

いつの間にこんな風になっちまったのかな」

自分の在り方に疑問を感じているような台詞だが、ザードはそれをまるで他人事のような口調で呟いた。

「さてと、じゃあ行って来るよ」

ザードはエベネゼル城の城門前で、ゲイルと別れる。彼の手には、依頼主が送ってくれた、エベネゼルへの紹介状が握られていた。本物かどうかは分からないが、この紹介状を見せればエベネゼルの傭兵としての試験を受ける事が出来るらしい。もちろん、今回はザードの素性はエベネゼルには秘密である。

「一応言っておくが・・・やりすぎるなよ」

「ああ」

ゲイルの忠告に手を上げて答え、ザードは城門の奥へと消えた。

その1時間後。傭兵としての紹介状を衛兵隊長に見せたザードは実技試験としてエベネゼルの兵士と手合わせをした。

ザードは、対戦相手に"女のような奴だ"とからかわれた事に腹を立て、相手を徹底的に叩きのめした。ついでに、仲間の仇といわんばかりに襲い掛かる兵隊達も全員薙ぎ倒し、乱闘を止めに入った者までも薙ぎ倒し、ザードは必要以上に圧倒的な強さを誇示してしまった。

結果その強さを買われ、晴れてザードはエベネゼルお抱えの傭兵としてかなりの依頼料で雇われる事となった。

"月の光を纏う者"としての依頼料と比べれば、微々たるものではあったが。

仕事道具の詰まった鞆を枕代わりにして、ザードは荷台の隅で寝そべっていた。どごん、とトラックが揺れて、荷台の幌から、ホコリか何かが顔に落ちる。苛立つようにそれを払い除け、ザードは舌打ちをした。

ザードは今、エベネゼルの傭兵として要人護衛の仕事を請け負い、その人物が住む村へ向かう為軍のトラックに揺られていた。

もう3日も窮屈な車内に押し込まれたままなので、ザードの退屈も極地へ達している。トラックの荷台にはザードの他にも多くの傭兵達が乗っていたが、ザードには見知らぬ相手と世間話をするだけの社交性も無く、これといった暇つぶしのネタも無いザードは、ひたすら目的地への到着を待つ事しか出来なかった。

(ゲイルの飛空艇なら一瞬で行けるのにな)

因みにゲイルはエベネゼルの城下町で待機である。世界的にも高い生活水準を持つ国である。滞在している宿もさぞかし快適なことだろう。

それに比べザードの宿は、軍の持ってきた巨大テントで、むさ苦しい男供と雑魚寝である。そのような環境で落ち着いて眠る事の出来ないザードは、テントから少し離れた場所で一人野営をしていた。しかし、この季節は朝になると朝露が落ち服が濡れてしまう為、目覚めは良いものではない。それでも見知らぬ野郎と雑魚寝をするよりマシだと割り切り、我慢をしていた。

(こんなストレスの溜まる仕事させやがって・・・これなら、最前線で一人で戦ってる方がまだマシだ・・・)

そう思い、ザードは顔も名前も知らぬ依頼人を呪う。最も、報酬に釣られて依頼を引き受けてしまったのは自分自身なのだが。そんな事を考えていると、窓際に座る傭兵達が遠くの景色を眺めながら騒ぎ出した。

どうやら目的の村へ着いたようである。



そこは何の変哲も無い、街道沿いにある小さな村だった。

ザード達はトラックから降ろされ、何やら偉そうな兵士にここで待機するよう命じられた。トラックに乗せられて来た傭兵と兵士達は、トラックの座席に戻ったり、地面に腰を下ろし談笑を始める。

ザードは背伸びをしながら長閑な農村風景を見回す。なだらかな丘がどこまでも続く静かな村である。物々しい雰囲気醸し出す自分達の存在がとても不釣り合いに見えた。この場に居ても居心地が悪いだけなので、ザードは少しの間、村を見て回る事にした。

とはいえ、どこを歩いても同じような造りの家や、似たような稜線を描く丘ばかりでザード

は早々に飽きてしまった。目前にこの周りで一番高い丘の天辺が見えていたので、とりあえずそこまで歩いてから隊へ戻ろうと考える。

「・・・へえ」

ふと、ザードが振り返ると、今登っている丘から、村全体を高い視点から見渡す事ができた。手前にはここまで歩いてきた緩やかに曲がる小道と、同じ建築様式の家々が並び、その周りは何も無く、ただひたすら何処までも広がる緑の丘陵地帯。絶景と呼べるかどうかは分からないが、これだけ開けた風景は心地の良いものだった。暫くその景色を眺めた後、丘の反対側の景色も気になり、ザードは再び丘を登り始めた。

歩みを数歩進めた所で、不意にザードの足が止まった。

歌が、聞こえる。

女の声。とても綺麗な声だと、ザードは感じた。目の前の丘には一本だけ大きな木が立っているのだが、歌声の主はその反対側に居るようだ。別に行く先に誰が居ようが構う事は無い、と思いつつも、ザードは何となく足音を忍ばせて坂を上る。

大きな木の反対側に居たのは、ザードより少し年下、16、7歳くらいの少女であった。ザードが歌声から連想した姿より、ずっと幼い姿をしていた。芝の上に腰を下ろし、目の前に広がる丘陵を眺めながら歌を歌っている。

つい、少女の歌声に聞き入ってしまったザードは、段々と覗き見をしているような気分になってくる。ここで立ち去るのも声をかけるのも不自然だと思ったザードは、代わりにわざとらしく、くすん、と鼻を鳴らした。

びく、と肩を震わせ、少女がザードに振り向いた。

ザードと少女の視線がぶつかる。歌っていた所を見られたのが恥ずかしかったのか、少女が顔を赤らめた。



「・・・悪い、邪魔したな。

気にせず続けてくれ」

ザードが頭を掻き、そっぽを向くと、

「そう言われても、改めて知らない人の前で歌うなんて恥ずかしいですよ」

少女は困ったような顔で笑った。

見知らぬ人間に向ける表情にしては、屈託のない笑顔だった。

「こんにちは。旅の人ですか？」

少女が長いスカートを払いながら立ち上がった。

「まあ、そんなところだ」

「何も無くて退屈な村でしょう？」

「ああ。いや、でも、この景色を見たら、そうでも無いって気になったよ」

ザードは少女が眺めていた草原を見渡す。予想通り何も無く、どこまでも、どこまでも続く丘。空気が澄んでいて、遠くの稜線まではっきりと見えた。

「そうですか。私も、ここからの眺めが大好きなんです」

自分と同じ思いの相手である事が嬉しかったのか、少女は軽く身を揺らして喜んだ。しかし、その表情はすぐに寂しげに曇る。

「・・・私、今日から暫く村から離れるんです。だから、この大好きな景色を最後に見ておこうと思って・・・」

その言葉にザードは、おや？と首を傾げた。まさかとは思いつつ少女に尋ねる。

「ひょっとして、この村からエベネゼルまで護衛つきで招待される客人って・・・」

少女も、ザードと同じように驚きの表情を浮かべた。自分の予想が当たっていた事を確認する

とザードは親指で村を指し、

「エベネゼルの護衛隊は、とっくに村に着いているぞ。肝心のアンタがこんな所に居ていいのか？」

「も、もうそんな時間ですか・・・！？」

サードの呆れた声に、少女は足元に置いたバスケットを開け、その中にある懐中時計で時間を確かめた。少女の顔が強張る。

「ごめんなさい、私、もう行きますね！」

一方的にそう言うと、少女は丘を駆け下り始めた。そして一度足を止めて振り返り、

「私、レナ＝アシュフォードと言います！ よかったらお名前を教えて貰えますか？」

少女、レナの問いかけに、ザードは呆れた表情で肩をすくめて言った。

「あんたの護衛その1だ」

きょとん、と、レナの表情が呆けた。

「エベネゼルには、何の用事で行くんだ？」

村に戻る道すがら、ザードはそれとなくレナに聞いた。雇われの身である以上そのような情報は耳に入ってこないの、自分の置かれた状況を確認することの出来るチャンスだと思った。

エベネゼルではない、あの依頼書を送ってきたザードの本当の依頼主は、恐らくザードにこの仕事をさせる為、ゲイルに依頼を持ちかけたのだろう。依頼内容は、"エベネゼルに雇われ、護衛の仕事を受ける"というものであったが、直接的な依頼内容は、"この少女を守れ"という事で間違い無い筈だ。

では何故？

何故、このような回りくどい依頼をするのか？

ザードは依頼主から"護衛の仕事を受ける"と指示を受けただけで、何故その必要があるのか、ザードがこの仕事を受ける事によって、依頼主にはどのようなメリットがあるのか、全く知らされていない。

護衛の仕事をごなす上で必要な情報では無いのかもしれないが、この少女に自分を始めとする十数人もの護衛が必要な理由に、ザードは興味があった。

「詳しい事はお話出来ないのですが・・・

エベネゼルの方々から、わたしのオリジナルの術を解析したいという申し入れがあったのです」

「それは・・・鬱陶しい話だな」

個人の魔導士がオリジナルで作り上げ、魔導式として成立している術には、どんなものでもそこその価値を持つ。それをわざわざ他人に教えるという事は、自分の手の内を晒してしまう事であり、当の魔導士にとっては面白い話では無い筈だ。

「私は村で魔法医をやっているのですが、私が村を出ている間もエベネゼルからの魔法医を派遣してくれるという事でしたし、術の解析に協力すれば、村への配給や駐留する兵隊さん達の数も増やしてくれるという事だったので」

レナの言葉に、ザードは気の無い相槌を打つ。レナは話を続ける。

「村から5日ほど歩いた国境では、隣国の侵攻が激しくなっていると聞きました。村でも食べ物にも困り始めているんです。

ですから、私がエベネゼルへ協力する事で、少しでも村が豊かになるのなら、その労力は惜しみません。

それに、私の術で、もっとたくさんの人を助ける事が出来るなら、その機会を与えてくれるエベネゼルには感謝をしたいくらいです」

「ふうん。立派な事で」

ザードの素っ気無い返事に、むっとした表情を浮かべるレナ。

「正直、理解できないな。

どんな術かは知らないが、自分で技法を本にしたり、技術を独占すれば金になる話だっなのに。せっかくの儲けの種を他人の為に不意にするなんて、勿体無い話だ」

「村のみんなは私の家族も同然です。他人なんかじゃありませんよ」

ザードは眉間にしわを寄せる。家族、という言葉に思う所があったのだ。

「あなたは、家族へ水や食べ物を分け与えるのを、勿体ないなんて思うんですか？」

レナの言葉に、反射的に悪態をつこうとしたものの、ザードはその言葉を飲み込み、溜息を吐く。

「・・・良く分からない。ずっと、一人だったからな」

今のザードには家族と呼べるものはいない。いた事もあったが、それは昔の話だ。仲間という関係は幾つか持っていたが、その関係は"利害"で結ばれているものが殆どで、家族のような結び付きとはまた違っているように思われた。ザード自身、普通の間人が当たり前に持つ感情の幾つかを持ち合わせていないという自覚はあった。

レナは少し視線を落とし、謝る。

「すみません・・・悪い事を聞いてしまいましたね」

「別に、そんな事はないよ」

二人は暫く小道を歩き、頃合を見計らい、ザードは一番肝心の疑問に触れた。

「そのオリジナルの術って、どんな魔導なんだ？」

「それは、教えられません」

レナは困り顔をしながらも、きっぱりと答えた。

レナが村を抜け出していた事で村では少々の混乱はあったが、予定通りにザード達のトラックは村を出発する事が出来た。

村で唯一の魔法医であったレナは村人達からの人望も厚いようで、予定では一月少々で帰ってくると分かっているのに、村人達はまるで今生の別れと言わんばかりにレナを見送った。彼女は困ったように手を振っている。

「よっぽど村人達から好かれてるんだな・・・」

ザードはトラックの窓からその様子を眺め、何と無しに呟いた。

「家族・・・ね。」

不意に、レナと視線が合った。

彼女はガードに向い軽く頭を下げる。無視するわけにもいかず渋々と手を振り返し、トラックの奥へ引っ込んだ。

「さてと、これから何が起こるのか・・・楽しみだな」

ガードは枕代わりにしていた鞆の中の仕事道具を確認をする。

依頼主がどういうつもりかは知らないが、ガードをこの護衛団に紛れ込ませたという事は、依頼主はかなりの確立で護衛団への襲撃がある事を確信しているのだろう。

ガードの仕事はここからが本番である。

そしてシスター・レナを迎え入れた護衛団はエベネゼルへ向けて来た道を引き返し始める。

しかし彼女が故郷に帰って来る事は無かった。

その後、彼等の中で後再びこの地を訪れる事が出来たのは、ガード=ウォルサムただ一人のみだった。

第37話 オブスキュア

「今夜はここでキャンプを張る！

各自グループの者とテントを張り、交代で見張りに着くように！」

山奥の木々が少し開けた場所で、護衛隊の指揮をしているエベネゼル兵がそう言い放った。

「おいおい・・・」

周りの傭兵達が、黙って寝床の用意を始める中、ザードは自分の耳を疑っていた。彼は命令を下したエベネゼル兵の腕を捕まえる。

「正気か？」

こんな山奥でキャンプを張るなんて、敵に襲ってくれと言ってるようなものだ」

兵士はザードを鬱陶しそうに一瞥する。

「我々は3日以内にエベネゼルまで戻らなければならない。その為には今日中にこの山を半分は超えていないといけない。

それに、これは上から指示されたスケジュールでもある。

例え襲撃があったとしたら、その時は君たちの出番だ。その為に雇っているのだからな」

「・・・そうかい」

何も考えていない兵士の言葉に呆れ、ザードは抗議を諦めた。

（まあ、いいか。

いつあるか分からない襲撃を警戒するよりは、襲撃しやすい状況に誘い込んだ方が、早くカタが着きそうだ）

シスター・レナを護衛する為に雇われた傭兵は15人。その者は皆、一番大きなトラックに全員押し込まれて移動している。各自が持つ武器の他に、一丁ずつ銃も支給されていた。そしてエベネゼル正規兵5人とシスター・レナの乗る車、物資の運搬トレーラーが1台と、20人程の人数で3台の車で移動していた。

兵士達がキャンプ地に選んだ広場を3台の車で囲み、その囲みの中に4張りほどのテントと、幾つかのかがり火が立っていた。

傭兵とエベネゼル兵は交代で見張りをしているものの、緊張感は今ひとつである。襲撃などある筈は無い。あったとしても銃が支給されているこの護衛隊ならば恐るるに足りないと言えど誰かがタカを括っていた。

ザードは眠る事を諦め、レナが眠っているトラックの周りで、徹夜で見張り続ける事にした。かがり火を背にし、剣とライフルを抱えるように座る。

「あの、・・・」

遠慮がちに掛けられた声に振り向くと、シヨールを羽織ったレナが立っていた。

「なに外に出てきてるんだよ。車の中に戻ってろ。」

せっかく俺達が徹夜の護衛をしても、あんたがそれじゃ意味が無いだろ」

そう言うザードに、レナはコーヒーの入ったカップを差し出した。

「どうぞ。私の乗る車に、いっぱいありますから」

「・・・どうも」

ザードは素直にカップを受け取る。砂糖が少ないと不満を感じながらコーヒーをすすった。

「それにしても、大した護衛団だな。

エベネゼルの指揮官は能無しのようなのだが、たった一人の魔法医の護衛にしては大仰だ」

ザードはちらりとレナの顔を見て、

「そんなに凄い魔導なのか？ あんたのオリジナルの術って」

レナは大袈裟に両手と首を振ってみせる。顔をしかめ困ったように沈黙していたが、やがて言葉を選ぶように話し始めた。

「・・・傭兵さんは、魔導の知識はありますか？」

なぜか寂しそうな声で、そうザードへ問いかけた。

「ああ。魔導は使えないが、並以上の知識は持ってるつもりだ」

それだけを訊くと、レナは少し硬い表情で、話し出す。

「人の"魂"は、何の事を指すと思いますか？」

唐突な話題に、ザードは眉を寄せて、

「さあな。心臓か、脳ミソか・・・

俺は哲学者じゃないから、そんな事考えた事も無い。

って、何の話だ、そりゃ？」

レナはぎこちなく言葉を紡ぐ。

「私のオリジナルの魔導は、人の魂に作用するものなんです。

ですが、私達人間は、"魂"が何なのか、未だに掴みかねています。

もちろん、私自身も」

レナの話にザードの胸がざわめいた。

「そんな私に、人の魂を操る資格があるのかな、って・・・

いえ、私の構築した魔導は、人が扱ってはいけない物ではないか、って感じているんです」

二人の間に沈黙が降りた。ザードの胸のざわつきは収まらない。まるで、踏み込んではいけない一歩手前に立たされている気分だった。

しかしザードは躊躇わない。躊躇無く踏み込んではいけない一線を越える。

「魂を操るってのは、人の生き死にを操るって事か？」

あんたは死んだ人間を生き返らせる事が出来るとでも？」

命を操る魔導など、眉唾物の神話やおとぎ話ならいざ知らず、史上に存在していた記録は無い

。

もし命を操る術があるのなら、それを欲する者は幾らでもいるだろう。

しかし、そんな事が出来る筈が無い。冗談や、ザード早合点であってほしい。そう思いつつレ

ナに問いかけたガードだが、返って来たのは伏せられた視線と沈黙だった。

(・・・マジかよ)

それが本当なら、彼女はとんでもない争いの種である。一日に人が幾千と死んでゆくこの時代、彼女の技術を欲しがらない国は無いだろう。

何故、自分程の使い手が、このような護衛隊に紛れ込まされたのかようやく理解して、ガードは思わず苦笑いを浮かべてしまった。

ゴグワッ！！

耳をつんざく爆音と、オレンジ色の炎の熱気が二人を襲ったのはその直後だった。遠くで男の悲鳴が響いた。

傭兵達のテントに爆弾か魔導が打ち込まれたのだ。

レナとの話に気を取られ完全に不意を突かれたガードは、立ち尽くす彼女の手を引き正規兵達が移動に使っていた車に彼女を押し込む。

「この車は防弾仕様だったな？」

「ここから動くんじゃないぞ」

レナは表情を無くし、防弾ガラス越しにガードの顔を見ている。ガードが親指を下に向け、"頭をひっこめろ"と言うと、レナは慌てて身を沈めた。

「さてと。どこのどいつだ」

ガードの居る場所からは見えないが、爆破された傭兵達のテントからは悲鳴と怒号、銃声が続いている。襲撃者と護衛兵達が戦っているようだ。しかし、ガードは加勢には行かない。ガードの仕事は彼女を守る事である。他の傭兵達がどうなろうが知った事では無かった。

茂みの中から、焼け付く殺気がガードの身に突き刺さった。

パギン！

ガードが目の前で振るった剣が、虚空で火花を撒き散らす。剣で銃弾を弾き飛ばしたのだ。

自分に向けられた殺意を鋭敏に感じ取る事の出来るガードは、自分に襲い来る殺意を視て取る事が出来た。暗闇の中、亜音速で飛来する銃弾ですら例外ではない。

それは魔導とは違う、ガードの持つ"能力"だった。しかし彼が見えているのは"殺気"であり銃弾ではないので、万能の能力という訳でもない。もし今の銃弾にガードを殺そうという意志が込められていなかったら、銃弾を剣で弾くなどといった芸当は出来なかった筈だ。

ガードを撃った茂みの奥に潜む気配が動揺の色を見せた。そして、その動揺は共に身を隠していた他の気配にも伝染する。

数は、6人。

相手の姿が見えなくても、ガードにはそれが分かる。

そしてその気配が、人を殺し慣れた人間の物だという事も。

ガードは剣を持つ左手に魔力を集中させると、魔力剣に刻まれた魔導式が起動し彼の魔力を無

節操に吸い上げ始めた。剣に刻まれた魔導式が赤く光を放つ。

「来いよ。その人数でたった一人が怖いかな？」

ザードの挑発に、目前の6つの気配は一拍置いてから拡散し、人間離れした跳躍力でザードの頭上から襲い掛かった。

ザードは飛びかかる刺客へ向かい、紅く光る剣を振るう。

ヴンッ、と、刺客には羽虫の群れが通り過ぎたような音が聞こえた。彼はザードの間合いの遙か外に居たのにも関わらず、目に見えない衝撃に体を打たれ、自分の下半身が回転しながら宙を舞っているのを見た。

これが、もう一つのザードが持つ常識外の力。敵を斬り倒す意思を具現化し、不可視の刃に変える魔法剣。ザードはこれを"オブスキュア"と呼んでいた。尋常では無い魔力を食い潰す魔法剣であり、ザードのように、エルフの魔力を持つ者でもなければ扱いきれない剣である。

残りの刺客がザードに襲い掛かる。刺客達は揃いのマントを着込み、揃いの槍を持っていた。

ザードは襲い来る切っ先を紙一重で交わし、素手で槍を掴んで先端の穂を地面へ突き立てた。勢いを殺された刺客はたたらを踏み、その隙を突いてザードは剣を刺客の腹部へ突き立てる。マントの下に鎧を着ていたのか、やや硬い手ごたえが伝わる。しかし、魔導式を起動させた"オブスキュア"は、鋼でも易々と斬り裂いてしまうため、相手が鎧を着込もうが関係無かった。

一瞬で二人の刺客を倒された事で、残りの刺客達は攻撃を中断する。それを好機と見て、ザードはまだ動揺を見せている一人の刺客へ飛び掛り、剣を振るう。刺客は槍でザードの剣を受け止めようとしたが、ザードの剣は槍ごと刺客を切り裂いた。

「へっ、余裕ッ！」

そう吠えるとザードは身をひるがえし背後に迫る刺客を迎え撃った。

これが、"月の光を纏う者"の戦い方。

自分に向けられた殺意が見える"能力"と、使い手の魔力次第で圧倒的な破壊力を発揮する"オブスキュア"。そして、ザード自身の人間離れした反射神経と瞬発力。これを武器に、たった一人でザードは幾千もの人間を斬り倒してきたのだ。

ザード個人は普段通りの戦果を上げていたが、こちらの傭兵達が次々と敵に倒されてゆくのをザードは横目で見ていた。傭兵達が弱いのではない。刺客達は統率を持った動きを取り、戦闘技術もかなり高い。ザードはレナの隠れる車を守りながら戦っているのに、傭兵達のサポートまで手が回らなかった。

(まずいな・・・)

銃を抜いた刺客をライフルで撃ち倒してからザードは思う。味方の傭兵達は、もう殆ど残っていないようで、ザードを囲む刺客の数が増え始めた。敵を全滅させるのは簡単だが、これだけの数の刺客を相手取りながらレナを守るとするのは難しい。戦いの後に生かしておいた敵から、背後関係を喋らせるつもりでいたが、どうも刺客達の戦い方はプロのそれである。尋問したとしても、素直に喋らせる事は難しいかもしれない。

ならば、ここで刺客と遊ぶ意味は無い。

ザードはレナの乗る車の周りに居た刺客達へ向け、"オブスキュア"で放った紅い風を叩きつける。刺客が吹き飛ばされた隙を突き、車の運転席を空けた。

「逃げるぞ」

後部座席で毛布を被って隠れていたレナが、ザードを見た。

刺客の数人が運転席のドアをこじ開けようと、武器を突き立ててきた。ザードは助手席に立てかけてあった散弾銃を手に取り、防弾ガラスに銃口を押し付ける。

バシャアァァンッ！！

防弾ガラスといえど散弾の零距离射撃には耐え切れず、ガラスは粉々に吹き飛び散弾と共に刺客たちを襲った。

ザードは腰に仕込んだ小さなナイフを取り出し、ハンドル脇のキーボックスに突き刺して強引に回す。呆れるほど簡単にエンジンがかかった。すぐさまザードは車を発進させ、数人の刺客を撥ねながらその場から逃げ去った。



「やれやれ・・・何とか撒いたか」

シートに深く身を沈めながらもアクセルは緩めず、ザードの運転する車は猛スピードで山を駆け下る。

「エベネゼルの兵士や、傭兵の人達は！？」

レナが身を乗り出して訊く。

「さあな。あの調子じゃ全滅だろ。

あれほど使えない奴等だとは思わなかったな」

他人事のように言うザードへ、レナは声を荒らげる。

「戻ってください！！ まだ助けられる人がいるかもしれません！！」

「俺の仕事はあんたの護衛。あいつらのお守りまでは料金外だ」

「見捨てるんですか！！？」

ザードは舌打ちをする。

「じゃあ正直に言ってやるよ。俺達が逃げる時には、ほぼ全滅だった」

レナは息を詰まらせ、黙り込む。

「悪いが、俺もあんたを守りながらあの数を相手にする自信は無い。だからこうして逃げ出したんだ。あいつらを助けに行って、あんたが刺客にやられたら元も子も無い」

少しでも柔らかい口調で、レナを説得しようとするザード。自分がどうすれば良いのか分からず、レナは俯き唇を噛んだ。

「・・・あの人達の狙いは、私、なんですか？」

ざわっ

ザードの全身が泡立った。背中に冷たい汗が浮かぶ。

「ああ・・・どうやら、あんたで間違い無さそうだ」

ガードの口調が変わっていた。その声色にレナは眉を寄せる。

「追って来やがった」

猛スピードで車を走らせているのにも関わらず、殺気の塊がどんどん車に近づいている。車に取り付けられたバックミラーを覗いても、車の後ろには黒々とした闇しか見て取れない。

こんな嫌な殺気を浴びせられたのは久しぶりだった。

「車の運転・・・出来ないよな？」

ああ、このペダル踏んで。で、真っ直ぐ走るようにハンドル持っててくれればいい」

ぽかんとしているレナに、とてつもなく簡単な運転のレクチャーをしたガードは、運転席の窓から身を乗り出し散弾銃を構える。車が蛇行を始めたのでレナは慌ててハンドルを掴み、必死で車を真っ直ぐ走らせた。

ガードは流れる景色を吸い込んでゆく車の後ろの闇を凝視する。何も見えないが、すぐ近くに猛烈な殺気を放つ何かが居て、ガード達の車と同じスピードで追いかけて来ている。暗闇からいつ何が現れても不思議ではない雰囲気である。



「ホラー映画かよ」

チープなシチュエーションを鼻で笑い、ガードは散弾銃を暗闇に向かい乱射した。瞬間、ザゴンッ！

暗闇から何かが飛び出し、車の屋根に突き刺さった。レナの驚きの悲鳴が聞こえる。自分に向けられた攻撃では無かった為、ガードは"能力"でこの攻撃を感知する事が出来なかった。

車に突き立った物は、まるで死神が持っているような、異様に巨大で不気味な装飾の施された鎌だった。鎌の柄には鎖が繋がっており、その先は黒々とした闇へと繋がっていた。ザードは舌打ちをして、

「悪趣味ッ！！」

オブスキュアで車に食い込んだ鎌を切り飛ばした。つもりだった。

しかし、破壊するつもりで斬り付けたにも関わらず、大鎌には傷一つ付ける事も出来なかった。"オブスキュア"と同じ、強力な魔力を持つ魔導具のようだ。

ジャギッ、と音を立て鎌に繋がる鎖が引っ張られた。同時に、がくんと車のスピードが落ちる。暗闇に身を隠す誰かが、車に突き刺さった鎌を引き寄せているのだ。さすがにゾッとするザード。

ザードは剣を振るい、鎌の突き刺さった車の屋根部分をまるごと斬り飛ばした。大鎌は車の天井と共に跳ねて、暗闇の中へと消えていった。

「傭兵さんっ！！！」

レナの声に前方へ振り向くと、先には道が無く夜空と遠くの山並みが見えていた。道が大きく曲がっているのだ。

「ちっ・・・！！」

運転席へ戻ったザードは、慌ててハンドルを切り、ブレーキを踏みつける。しかし、間に合わない。

車は崖から飛び出し、崖の下へ広がる森へと落ちていった。

第38話 在らざる者

ぼやけた視界へ最初に写ったのは、土と岩の天井だった。

何処かの洞窟のようだ。

「・・・くそ。しくじったな」

ザードは仰向けのまま、朦朧とする頭を抑え何が起こったのかを思い出す。

ふたりの乗る車が、崖から森へ落ちた時。

ザードはレナを抱えて車の外へ飛び出したのだ。良く覚えていないが、森に落ちる瞬間に、周りの木々をでたらめに掴み、落下の衝撃を和らげようと足掻いてみた記憶がある。その後、まともにも動かなくなった自分の体と、気を失ったレナを引きずり、なんとか洞窟に身を隠したのだ。

べりっ

血で、背中に服が張り付いている。良く見ると、ザードの体のあちこちに血がへばり付いていた。記憶が曖昧だが、崖から落ちた時に、左足と左肩を派手に壊した覚えがある。しかし、傷口は何処にも無い。

「あいつか・・・」

ザードは左肩をさすりながら呟く。レナが魔導で怪我を治してくれたとしか考えられない。という事は、今まで気を失っていたザードよりは、レナは軽傷だったという事か。しかし今、ザードの周りにレナの姿は無かった。

ザードが横になっていたのは、浅い洞窟の奥だった。ザードの居る場所からでも、外の日の光が見える。腰の懐中時計を見ると、時刻は正午だった。

「寝坊だな」

ザードが慌てて身を起すと、途端に立ち眩みに襲われる。怪我は治っているようだが、相当の出血をしたようだ。ザードは自分に掛けられていたレナのショールと、傍らに置かれていた"オブスキュア"を手に取り、洞窟から外に出た。

ザードはレナの姿を求め、洞窟の周りを探した。少し離れた場所で、ザード達が乗ってきた車がグシャグシャに潰れていたが、レナの姿は無い。さらに森の奥では小川が流れていたが、その周りでもレナを見つけられなかった。ザードは早々に探す宛を失い、崖の上の山道を見上げる。

断崖絶壁、という崖では無い。少し気を付けてさえいれば人の足でも登れる程度の崖である。最後の心当たりの場所として、ザードは昨晚襲撃のあったキャンプ地まで戻る事にした。

「くそっ・・・」

崖を登り切り、昨晚護衛車で走り抜けた山道を駆け足で戻るザードだったが、急激に血液を失ったせいか少し体を動かすだけで脈が上がり、意識が朦朧とし始めた。このような状態で敵に襲われたら流石のザードも対処し切れないであろうが、今のザードはそのような簡単な判断すら出来ない状態だった。

そして襲撃のあったキャンプ地に戻り、ザードは不可思議な光景を見る事になる。

昨晚まで何も無かったキャンプ地が、墓地になっていたのだ。

墓標の一つ一つは太い木の枝を十字に組んだだけの簡単な物であったが、それが墓地と呼べるだけの数が集まり、広まった山道の片隅に並んでいる。

ザードは場所を間違えたのか、参っている体が幻でも見せているのかと疑ったが、ここは間違いなく昨晚のキャンプ地で、頭を振り目を擦ってみても、目の前にある光景は変わらなかった。

「何だ・・・これは」

ザードが墓標の間を縫うように歩いていると、進む先の木立の影から人の足が見えた。剣を抜いてゆっくり歩み寄ると、そこには木立に身を預け、眠っているレナの姿があった。

ひとまず安堵の溜息をつき、ザードはレナを起そうとする。レナの肩を揺する前に、ザードの目がレナの指先に止まった。

土に汚れて、血が滲んでいる。爪も、割れている。着ているローブも、土やススのようなもので随分汚れていた。そして、目元には涙の跡。

はっと、ザードは息を呑む。

「まさか・・・この墓、こいつが作ったのか・・・？」

思わず背後の墓標の群れに振り返ると、

「わたしのせいで・・・この方たちは死んでしまったのですから・・・」

目を覚ましたレナが、ゆっくりと、まるでうわ言のような口調で言った。

「私の術なら、何人かは助ける事が出来ると思って、ここまで戻ってきたのに・・・

全ての遺体が、焼かれていたんです」

レナの表情は虚ろだった。ザードは掛ける言葉を見つけられず、黙ってレナの言葉に耳を傾ける。

「私の構築した魔導は、死んでしまった人でも、魔導で怪我をちゃんと治療してあれば、生き返らせる事が出来るんです。でも、体の全てを焼かれてしまったら、私の術でも、助ける事は出来ない・・・！」

それ以上言葉を紡ぐ事が出来ず、レナは顔を抑え、声を殺して泣き出した。

「だからといって・・・お前が、こんな事をする必要は無いだろう・・・」

何か声を掛けなくては、と言葉を捜していたザードだったが、結局そんな事しか言えなかった

。

レナは顔を抑えたまま被りを振る。

「私には、この程度の事しか出来ませんから・・・」

この程度？

レナの言葉に、ザードはそう聞き返しそうになった。こいつは、たった一人で20を越える人間の墓穴を掘る事を、この程度などと言うのか。しかも彼女は、護衛兵達を自分のせいで死なせてしまったと感じている。そのような気持ちで相手を弔うのは、一体どれ程の重圧なのだろう。

よく見ると、墓標の数は護衛団の総人数よりも多い。という事は、彼女は敵の遺体までも埋葬

したという事か。

ザードは人の気持ちを進んで理解しようとするタイプではない。だから、今のレナの気持ちはザードには理解出来ないし、したいとも思わない。

しかし、レナの気持ちは分からなくても、墓標の下で眠る護衛兵達の気持ちなら分かるような気がした。

だから、それが分からないレナにザードは彼らの言葉を代弁する。

「連中は、お前が思っているようなモノは求めていないさ。

これで、十分だ。連中にとっては、これ以上無い事だろうよ」

その言葉に泣いていたレナは面を上げ、ザードを見た。

励ますように、柄にも無く出来る限り優しい声でザードはレナに言葉をかける。それで少し落ち着いたのか、レナは涙を拭き目の前の墓標を見た。

「なんで、ここまで酷い事を・・・」

「あんたの魔導の素性を知ってる奴が、口封じ目的でしたんだろう・・・。

でなければ、わざわざ死体を焼くなんてマネはしないだろうよ」

未だにレナが死者を蘇らせる術が使えるという事を信じ切れていないザードだったが、敵が彼女の術でも蘇生が出来ないように護衛団や返り討ちにあった刺客達の遺体を焼いた事を考えると、それはレナが死者の蘇生が可能だという敵からの証言とも取れる。

そこまで考えてから、ザードは今はそんな事を考えている時では無いと気付き、レナに手を差し伸べる。

「歩けるか？ ここは危険だ。とりあえず、どこかに身を隠そう」

「・・・はい」

レナは涙を拭き、ザードの手を取って立ち上がった。そしてザードを見て、何かを思い出したかのように固まった

「どうした？」

「・・・そういえば、傭兵さんのお名前、まだ聞いていませんでしたね」

礼を言おうとして、レナはまだザードの名を知らない事に気付いた。

彼は少し言い淀んでから、

「・・・ザード＝ウォルサム。

"月の光を纏う者"って言った方が、通りが良いかもな」



キャンプ地に残された物全てが焼かれており、"使える車が残っているかも"というザードの望みはあっさり断ち切られた。それでもしつこく焼けた荷物を調べていたら、トラックに積まれていた食料や生活用品、幾つかの銃火器が辛うじて焼け残っていた。それらを回収し、ザードとレナは崖の下の洞窟へ戻った。

レナは、ザードのふたつ名を知っていた。殺戮者としての悪名を持つザードに対し、レナは怯

えや恐れも見せず普通に接してくれた。

そして、ザードはレナへ自分が知っている事、エベネゼルとは別の雇い主からレナを守るようにとの依頼を受けていた事を明かした。

最も、ザード自身何故自分が彼女の護衛をしているのか分かっていないので、話した所で意味の無い事であるばかりか、依頼人に操られるがままの自分の間抜けさ加減を晒してしまうだけだった。レイチェル自身も、ザードの依頼主に心当たりは無いという。

洞窟に差し込む光が橙色に変わる。ザードの懐中時計も夕刻を指していた。

ザードとレナは、トラックから持ち出した食料と、川から汲んだ水で食事を取った。レナは食欲が無かったのか、少ししか手を付けなかった。対してザードは、レナを差し置き3個目の缶詰へ手を付けていた。

「すごい食欲ですね・・・」

レナはやや圧倒されたような表情を見せる。ザードは不本意そうな表情を見せてから、「随分と血を失ったからな。こればかりは、メシ食って自分の体で直すしかない。

少し無理してでも食べておかないとな。

そいえば、怪我を治してもらった礼がまだだったな。ありがとう、助かった」

「いえ、お礼を言うのはこちらです。ザードさんの怪我も、わたしをかばって負ったものなのですから」

「そう言えば・・・俺、どのくらいの怪我を負ってた？ 実は、記憶が曖昧で覚えていないんだ」

ザードの質問に、レナは考えるように視線を漂わせる。

「聞かない・・・方が良くもかもしれません・・・」

「・・・そうか」

言いづらそうに答えるレナに、ザードも追求はしなかった。

暫く洞窟にはザードのフォークが缶詰と触れ合う音だけが続く。

「これから・・・どうしましょう」

レナが、消え入りそうな声で問いかけた。

「悪いが、明日の朝までは動くつもりは無い。大量に血を無くした今の俺の体じゃ、まともに戦う事も出来なさそうだからな。今日のうちにメシを食って、一晩眠れば何とか戦えるくらいには体調を戻せるだろう」

そこでザードはわざとらしく言葉を切る。

「お前は、どうしたい？」

とりあえず、村に戻る事は進めない。昨日の襲撃の二の舞になりかねないからな」

素っ気無く言ったザードの言葉に、レナの表情が凍る。

「予定通りエベネゼルに向っても良いが、敵の目的が分からない限りそれも正しいかどうかは分からない。今の俺達には、判断要素が少なすぎる」

朗々と考えを述べた割には、結局ザードもどうすれば良いのか分からずにいた。ザードは空になった缶詰を洞窟の隅へ放り投げた。

「俺もあんたに聞きたい事が幾つかあるが・・・あんたもかなり疲れているだろ。今日は何も考えずに休んだ方がいい。そんな時に捻り出した案を採用しても、ロクな結果を生まんからな」

ザードは荷物から毛布を引っ張り出すと、それに包まって横になった。ちらりと横目でレナを見ると、相も変わらず塞ぎ込んだ表情をしていた。

「心配するな。俺の噂は知っているんだろ？」

雇われている以上、あんたの身の安全は保障してやる」

ザードはレナを安心させるため、余裕を見せた口調で話す。それに対し、やはりレナは消え入りそうな声で、

「また襲撃があったら、ザードさんは戦うんですね」

「それは・・・当然だろう」

レナの質問の意図が読めず、一拍置いた後にザードは返事をした。

「もう敵であろうと、人が死ぬ所は、見たくありません・・・」

レナの呟きに、ザードは思わず黙り込んだ。

「ならば、奴等に大人しく連れて行かれればいい。

そうすれば、あいつらも俺も、殺し合わなくて済むぞ」

その提案に、レナはハッとした表情で顔を上げる。

ザードにはレナが、その手があったか、などと考えているように見えた。

「・・・冗談だからな。こんな手荒な真似をする奴等だ。

連れて行かれりゃロクな目に遭わないぞ」

「じゃあ、どうすれば・・・」

「戦うんだよ。これ以上、あんたの巻き添えで死ぬ奴が出ないようにな」

レナは割り切れない、といった表情でザードから視線を外す。

ザードは困った顔で頭を掻き、これで話はお終いと言うように毛布を被って横になってしまった。

(優し過ぎるな・・・こいつは・・・)



突然生まれた気配でザードは目を覚ました。

気配はどんどん増えてゆく。洞窟を囲むように。しかし、どういう訳か殺気は感じられなかった。

「起きろ。この場所から離れるぞ」

ザードに腕を捕まれ、座ったまま眠っていたレナは飛び起きた。

「また・・・あの人達ですか・・・？」

「さあな。もう洞窟を取り囲まれている。気配を消して忍び寄ってきやがった」

ここまで近づかれるまでザードは敵の気配に気づく事が出来なかった。相手は気配を隠す事が出来る程の手練れだと予想できた。

ガードは荷物を鞆に押し込み肩に掛ける。洞窟の入り口まで行き、月の照らす森を見渡してみるも、敵の姿は見えない。正確な気配の数は把握できないが、少なくとも10人以上。しかし、ガード達の洞窟を取り囲むだけで、襲い来る気配が無かった。

「こっちから仕掛けて・・・車を奪うか」

腰に散弾銃を吊るし、オブスキュアを握る左手に力を込めた。柄を握る力の入り具合に違和感を感じ、まだ本調子ではない自分の体を確認する。神経を研ぎ澄ませ、容易に突破できそうな場所を敵の気配から探っていると。

「ガード、さん」

レナが不意に声を掛ける。突破口を探るのに集中しているガードは返事をしない。

「うしろ、」

レナの張り付いたような声色に、ガードは弾かれたように後ろを振り返る。

ガードの背筋が凍る。

ガード達が眠っていた洞窟の奥に、いつの間にか人が立っていたのだ。真っ黒でボロボロのマントを幾重にも羽織った若い男。緩くねじれた黒髪は肩まで伸ばされ、端正で青白い顔をしていた。そして肩には死神が持つような、巨大な鎌。その姿を確認した途端、強烈な殺気がガードを射抜いた。

(昨日の奴だ・・・！)

「いつからそこに居た・・・？」

そう問いかけて、ガードは自分の声色に驚いていた。動揺しているのか、自分の声が上ずっていたからだ。

ガードとレナは洞窟の一番奥で眠っており、洞窟の外の気配に気づき、洞窟の入り口まで移動した。どう考えても、この大鎌の男がガード達の背後に回れる筈は無い。しかし実際、男は全く気配を感じさせる事無く、幽霊のように洞窟の一番奥に立っている。

男は深々と一礼し、腰を屈めたままガードを見据えた。

「昨晚は失礼したね。こうやって直接僕が出向けば早い話だったんだが、表向きは部下達の仕事にしないとイケないからね」

男の声は物静かだが、どこか軽薄な印象を与える口調だった。

「でも、あの"ガード=ウォルサム"相手じゃ、流石に人間どもの手には余ったか」

「・・・何を、言っているんだ？」

ガードは男の独り言に動揺する。既にガードの名前を知っている事、そして自分の部下を"人間ども"と表現する奇妙な口振り。男はガードの質問を無視し、

「僕の名前はデミル。君を殺す前に、教えておくよ」

ぞがあっ！！

デミルの振るった大鎌が、洞窟の壁をごっそりと抉り取った。

自己紹介と同時に向けられた殺気を感知し、大鎌の一撃をかわしたザードは、レナを抱え洞窟の外へ駆け出していた。

「良いカンしてるねえ。まるで先が見えているようだ！」

背後からデミルの声が聞こえたと思ったら、吹き付ける殺気は、瞬時にザードの頭上へ移動していた。

(速すぎる・・・！！)

まるで瞬間異動だ。ザードはレナを突き飛ばし、上を見上げる間も惜しむように剣を頭上へ振るった。

がぎん！

大鎌の一撃を何とか受け止めたザードだったが、異様に重いその一撃を支えきれない。

「ぐっ！！」

斬撃を受け流し切れず、デミルの大鎌がザードの左腕を斬り裂いた。ザードの利き腕である。ザードは怪我に構う事無く、すぐ後ろに居る筈のデミルを斬りつける。が、剣は虚しく空を斬るのみだった。

(どうなってる！！?)

デミルの身の動きは尋常ではなかった。パワーも、とても人間のそれとは思えない。再び振り返った先には、酷薄な笑みを張り付かせ大鎌を振りかぶるデミルの姿があった。ザードに、迎え撃つ暇は無かった。

振り下ろされたデミルの大鎌が、慣性法則を無視したかのように、ぴたりと止まった。

レナの額の、ま正面で。

レナが、ザードとデミルの間に割って入ったのだ。大鎌は彼女の額のほんの数センチ手前で止まっていた。デミルの手先があと数ミリ狂っていたら、額どころか彼女の体は断ち割られていただろう。

3人の時間が、暫しの間止まる。

「・・・お前は殺さない。どけ」

「嫌です！」

自分を見下ろすデミルに、レナは両手を広げ毅然とした表情で立ち塞がる。

「ばか・・・！ 邪魔だ、退いてろ！！！」

ザードがようやく硬直から抜け出し、そう叫んだ時。



森の奥で、爆発音が響いた。

銃声と男の悲鳴が幾つも上がり、それが広がってゆく。ザードとデミルが眉をひそめる。

「人間どもめ・・・何を遊んでいる？」

洞窟を囲んでいたデミルの部下達が、何者かと戦っているのだ。予想外の出来事に、デミルは森の奥へ注意を向ける。デミルがレナに突きつけた大鎌を下ろすと、

ガンッ

「ぐッ！！」

突然、森の奥から飛来した光弾がデミルの頭に当たり、砕けた。仰け反りたたらを踏むデミル

。

状況は理解出来なかったが、ザードは剣に指を滑らせ、短い呪文を口ずさむ。魔法剣"オブスキュア"に込められた魔導式が起動し、刀身が紅黒い光を放った。

「！？」

ザードの剣の変質に気付いたデミルは、"それ"の正体に気づき、戦慄する。

「くたばれ化け物！！」

ザードはレナの背後から、突き上げるようにデミルの脇腹と肺を斜めに貫いた。

「うぐおおおあああああああっ！！！！」

苦痛に顔を歪めるデミルの姿が、一瞬霞んで見えた。それが何だったのか考えるより先に、ザードはデミルに突き立てた剣を、胸を突き破るように、薙いだ。

大きく開いた傷口からは、赤い血の代わりに、黒い霧のような気体が噴き出した。

「ぐお・・・あ、"オブスキュア"、だと・・・！？」

憎悪に満ちた眼差しで、デミルはザードの持つ剣を睨みつける。その姿が砂嵐のように乱れる

。

「何、だ、これは！！？」

追い討ちをかけるのも忘れ、己の目を疑うザードとレナ。今、デミルの姿は幻が消えるかのように霞み、ザードに斬られた傷から血の代わりに黒い霧を撒き散らしている。

「こいつ・・・本当にバケモノかよ・・・！？」

レナもザードの後ろで、この世に在らざる光景を呆然と見ていた。

「ザード、ウォルサム・・・！！」

壊れた蓄音機のような音で、デミルがザードの名を呼ぶ。

「次に会う時は、必ず殺す！！！」

顔が判別出来ないほど霞み、歪んだデミルの姿は、ザードを指差しながら消えていった。

「何・・・だったんだ・・・あの野郎は・・・」

デミルの消えた場所を見つめながら、ザードはその場で腰を下ろした。レナは、硬直したまま立ち尽くしている。

流石のザードも、あのような非常識な存在と戦ったのは初めてだった。何が起こったのか考えてみても、全く理解が及ばない。

あの男は、デミルは人間では無かった。

その時、葉ずれの音と共に、森の奥から人の気配が生まれる。

「あれは、人間に肩入れしている魔族の一人だ」

突然背後から声を掛けられ、いったん腰を下ろしたザードは、立ち上がり再び剣を構えた。

森の奥から現れたのは、20代後半の旅装束を着た短髪の男だった。その男に続き、同じような服装をした者達が4、5人現れた。若い女もいれば、壮年の男もいる。森の中で、洞窟を囲んでいたデミルの部下達と戦っていたのは彼らだろう。

「大丈夫、我々は君たちの味方だ。

ザード＝ウォルサム君に、レナ＝アシュフォードさんだね」

ザードとレナは互いに顔を見合わせる。二人の知り合いでは無かった。

「ザード君にとっては、私は雇い主になるのかな？」

その一言で、ザードは理解した。男はザードとレナを交互に見た後、挨拶をした。

「初めまして。

私はシャノン＝エルナース。エルカカという村で長を務めている」

ザードの左腕へ淡い光と共に、暖かな感覚が伝わる。

魔族・デミルに斬り裂かれた傷口はたちまち塞がったが、レナは暫く難しい顔をしながら、ザードの腕に魔力を送り続けた。

「ザードさん、最近大きな怪我をした事がありますか？」

レナに向かい合うザードは、レナから視線を外したまま答える。

「ああ、こんな仕事だからな。怪我をしては、こうやって魔法医の世話になってるよ」

闇医者だがな、と小さく付け加えた。

ザードの返事を聞いた途端、レナは治療の魔導を中断する。ザードの腕にはまだ痛みが残っている。

「確かに治療魔法は傷口を塞ぎ、折れた骨も繋げる事が出来ます。でもそれは一時凌ぎでしか無いんです」

妙に大人びた口調で、レナが言った。ザードはレナが怒っているように見えてドキリとする。

「たとえば左腕ですが、崖から落ちた時の治療がまだ完璧にザードさんの体に定着していない為、あの魔族に斬られた傷は今の段階で完全に治す事が出来ません。

左腕だけじゃなく、今のザードさんには治療魔法で完全に治せない所が幾つもあります。見た目や感覚的に傷が治っていても、その部位を酷使すれば塞いだ傷が突然開いてしまう事だってあり得るんです」

確かに魔導で治してもらった怪我は、戦いの最中に痛みや違和感を感じる事があった。怪我を魔導で治したとしても、本当の意味で傷が癒えたという意味では無いと言う事か。

「どうすれば良い？」

「休んで下さい。本来の体の治癒能力が、魔導で行った治療に追いつけば、問題はありません」

「休んで……って。あのな、俺はお前の護衛なんだぞ？」

「あ……」

レナは自分の可笑しい発言を恥ずかしがるような、ザードの怪我を心配しているような、複雑な表情をする。それを見てザードはクスリと笑い、腰掛けたベッドに倒れ込んだ。

左手を握りこむ。まだ痛い。ザードはわざとらしくない様に、気楽な声色で言う。

「ま、なんとかするさ」



洞窟での襲撃から、突然見知らぬ旅人達に助けられたザードとレナは、その旅人達の乗って来た飛空艇に乗っていた。旅人達のリーダーは、ゲイルを通しザードにレナを守るように依頼をしたエルカカの族長。二人は彼らの村へ向けて、明け方の空を飛んでいた。

飛空艇は魔導で強化された木と布で作られたシロモノで、目立って使われている金属は、機体のメインフレームと硝子の嵌め込まれた窓枠程度であった。船体は小さく、定員は10人程度で

重い荷物もそんなに載せられないと言う。この童話に出てくるような飛空艇にザードは驚いたが、彼らにしてみれば機械技術だけで空を飛んでいる飛空艇の方がよっぽど奇異に見えるらしい。船体の頼りない作りに、床を踏み抜いたり、空中でバラバラになったりしないかと酷く心配したが、意外にもゲイルのグライダーよりも振動が少なく、気流に揺さぶられる事も無く静かに空を飛んでいた。動力も気流の制御も、全て風の魔導を増幅して行っているらしい。魔導を操る素質が無いザードにとっては、良く分からない理屈だった。

そしてザードとレナは今、2段ベッドが5つほど押し込まれた船室にいた。船員達の寝床だろう。船員達は各々の持ち場に居るのか、この部屋にはザードとレナの二人しか居ない。

不意にドアがノックされ、エルカカの族長、シャノンがやって来た。

ギリギリで「おじさん」と呼ばれてしまうような、まだ若さの残る顔立ちをした男である。しかしその落ち着いた物腰から、見た目以上に年を取っているようにも感じられる。黒髪を無造作に短く切った、人の良さそうな人物である。

「怪我の具合はどうだい？」

「悪いみたいだな」

「そうかい」

軽く訊くシャノンに、軽く答えるザード。挨拶代わりに言葉のつもりか大して心配している様子も無い。彼は怪我の具合を詳しく聞く事も無く言葉を続ける。

「もうそろそろアルベノンの街に着く。鉄道が通っているから、1日もあればエベネゼルへ戻る事ができる筈だよ」

シャノンの言葉にザードは目を細める。

「アルベノン？ この船はエルカカに向かっているんじゃないのか？」

そう言うザードに、シャノンは一本の剣を投げて寄こした。ザードはその剣を受け取り、剣から感じた異質の魔力に驚く。

「報酬の魔法剣、"ノア"だ。

彼女を彼らの手から守ってくれてありがとう。

君の仕事は、ここまでで大丈夫だ」

ザードの視界の端で、レナの顔に驚きと戸惑いの表情が広がった。

「・・・俺の仕事はこれで終わりか？」

「君には、こうして我々が到着するまで、シスター・レナを守って貰えればよかった。本当に感謝している」

「連中は何故彼女を狙う？ 説明して欲しいな」

「あのような遠回しな依頼をしたのは、君をこの件に巻き込まないようにする為だ。

事情を聞いてしまえば、君も彼らに追われ続けるぞ？」

「あの化物や、兵隊どもにか？」

シャノンは重々しく頷く。

ザードはレナを見ると、その顔には見放されるのを恐れているような色を感じた。自意識過剰

の見た錯覚とも思ったが、それよりもザードにはこの件を無視出来ない理由があった。ザードは受け取った魔法剣に少しだけ未練を感じながらも、剣をシャノンへ投げ返した。

「仕事はまだだ。あいつらを潰すまではやらせる」

「！！・・・ザードさん！」

驚くレナとシャノン。シャノンは苦笑いを見せながら、

「君が思っているより、ずっとヤバい山だと思うよ？ それでも付き合ってくれるのかい？」

「ここでアンタ等と別れても、どの道あのネクラ野郎に付け狙われそうな気がするしな。

アレには借りも出来た。このまま黙って引き下がるか」

ザードは痛む左腕をさすりながら、忌々しそうに吐き捨てる。

無論、ザードの言うネクラとはデミルの事である。

「これ以上、君に払える報酬は無いんだけどね・・・」

ザードに突き返された剣を弄びつつ、シャノンは頬を搔く。

ちゃっかりしてやがる、と思いながらもザードは報酬に関する言葉を飲み込む。

「いらねえよ。奴等に礼をするなら、アンタ等と一緒に居た方が手っ取り早いだと思っただけだ」

ザードの言い草を聞き、シャノンはひとしきり笑った。ザードがギロリと睨みつける。

「いや、ごめん。

まさか、あの"ザード=ウォルサム"が、こんなにいい性格をしているとは思わなかったからね

。

君の事は、好きになれそうだよ」

「・・・そうかい。俺はアンタの事を好きになれそうも無いがね」

無然とするザードに、シャノンは笑いかける。全く嫌味のない、清々しいまでの笑顔である。本心からザードの事を気に入ったと言っているのだろう。ここでシャノンは一度、表情を引き締めてから、

「それじゃあ、引き続きシスターを守って貰いたい。君にお願いしたいのはそれだけだ」

軽く頭を下げ、改めてザードにレナの護衛を依頼する。

ザードとレナは、何と無く互いの顔を見合わせた。ザードは気だるそうに手を振って見せた。改めてよろしくな、と言ったつもりだった。そしてレナは、安心したように微笑み、俯いた。

「エルカカまでは、あと半日もあれば到着する。こちらの事情は村に着いてから話させて貰うよ。それまでゆっくり休んでいてくれ」

そう言い残し、シャノンは船室から出て行ってしまった。

ザードが大きく溜息をつく。

「ごめんなさい、私のせいで、こんな事に巻き込んでしまって・・・」

「いや、俺が好きでやってる事だ。あんたのせいじゃない」

ザードは掛け値無しにそう思っていた。事の行く末を見届けぬまま、レナと別れる事に躊躇いがあった、という理由も僅かにあるが、何よりもザードが気になった事が、"魔族"の存在である。

おとぎ話にしか現れないような非現実の存在。今まで眉唾ものの話として聞いていたが、まさか本当に存在しているとは思ってもみなかった。

尋常ではない腕力に瞬間移動をしているような動き。常識を逸脱したあの存在に、ザードは非常に興味があった。

二人は暫し考えるように黙り込んでいたが、ザードはやおら明るい声色で言った。「まあ、色々問題はああるけど、奴に言われた通り暫く休ませてもらおう。いい加減、限界・・・っ！！」

ゆっくりと、レナがザードにもたれ掛かってきた。ザードは驚き逃げるように身を反らせたが、レナが倒れ込みそうになった所で慌てて肩を支えた。すう、と言う静かな寝息が聞こえる。眠っているようだ。

昨晚の襲撃で崖から落ち、自分とザードの怪我を治し、たった一人で護衛兵達の墓を建てたレナ。ザード以上に疲れていたのかもしれない。

ザードはレナの寝顔から目を逸らし、ゆっくりと腰掛けていたベッドに寝かせ、毛布をかける。乱れて頬にかかった髪を、指先でそっと払っておいた。

(礼を言わないといけないのは、俺の方かもしれないな・・・)

ザードはレナから一番離れたベッドに腰掛け、剣を抱えながら眠りに就いた。



エルカカの村は人里離れた深い森の奥にあった。村から少し離れた岩山に、船のドッグが隠されている。ドッグと言われると、飛空艇の格納庫兼整備工場といった機械文明の粋を集めた施設を連想するが、ここは岩山を切り開き、丸太作りの倉庫と簡単な屋根が取り付けられた非常に簡素なものだった。空から見た限り村の周りに広い道は無く、車で来る事も困難な僻地だ。シャノンに連れられ、ザードとレナはエルカカの村へ入った。

シャノンによると、村には電気や水道といった設備は無く、近代の生活水準よりは劣っていると言う。村からは民族独自の建築様式や文化を感じ、ザードは時代を遡ってしまったような気分になった。

村に戻ったシャノン達は村人に出迎えられ、村人達は一緒にやって来たザードとレナに好奇の視線を向けた。特に彼等はザードの銀の髪を珍しそうに見ていた。

見世物じゃないぞ、と言いたげに村人達を睨むザードと、訳も分からず頭をさげて回るレナは、シャノンの住む村で一番大きな屋敷へ入っていった。

金髪の少女が、紅茶を淹れてテーブルにつくザード達の元へやって来た。

「どうぞ・・・」

12、3歳位だろうか。恐る恐ると言った様子で、少女はザードの前にティーカップを置いた。

少女のおどおどした態度が気になり、ザードは少女を見る。ザードと視線が合った途端、少女

はびくり、と驚き、盆を抱え家の奥へ引っ込んでしまった。



「ガードさん！！」

「え・・・？」

レナに少女に対する態度を咎められ、悪気があった訳では無いガードは戸惑い顔を見せる。
シャノンはクスクスと笑い、

「娘のレイチェルだ。

村に余所者が来るのは稀だし、元々人見知りをする子でね。あまり気にしないでくれ。

美人だろう？ 髪の色も目の色も母親譲りでね。優しい子で、勉強熱心で、魔導の素質もとびきりなんだ」

妙に嬉しそうな顔で、シャノンは娘自慢を始めた。椅子に斜めに座ったガードは、白けた視線で部屋の隅を眺めている。シャノンに向かい合うように座ったレナも、曖昧な笑みで相槌をうつ。

「あはは・・・あ、えっと、奥様は・・・？」

何か喋らなくては、と思い、適当に口にした言葉であろう。

「うん。妻には5年ほど前に先立たれてね」

はっ、と口元を抑え、レナは頭を下げた謝った。

「いいんだよ。・・・と、すまないね。話が逸れてしまったか。

それじゃ、我々の話を聞いて貰おうかな」

シャノンは居住まいを正し、レナに向き直った。

「まず、我々の目的から言わせて貰いたい。

我々の目的は、世界に散らばる、とある物を集めて回る事なんだ。

"レッド・エデン"のおとぎ話は知っているかな？」

突然飛躍した話に、ザードはシャノンを目で見た。

レッドエデンのおとぎ話は、子供でも知っている昔話だ。

エレクトラという名前の魔導士が、この世に跋扈する魔物達を魔法の杖で異世界に閉じ込めたという昔話だ。そして、その杖に付いていた石は7つに割れて世界中へ飛び散ってしまった。この世界とレッドエデンの繋がりを完全に断ち切るには、7つの石を集めなくてはならず、エレクトラという魔導士は石を集めるための旅に出た。

ここまでは誰もが知っている話で、この先の話は地方や時代により様々な結末が語り継がれており、ザードもその幾つかは知っている。しかし、250年前まで魔物が存在が実在した事は信じているザードだったが、その全てが一人の魔導士によって異世界へ追いやられた、という下りは眉唾物の話として認識していた。

おとぎ話への理解は、ザードもレナも似たようなものであった。

「あのおとぎ話、結構本当の部分が多くてね。

エレクトラが7つの石を探しに、旅に出た、という所は知っているね？」

「ああ・・・」

胡散臭げに、ザードは頷く。

「おとぎ話では全ての石を集めて世界は本当の平和を手に入れました、っていうオチが定着してるんだけど、現実には厳しくてね。

エレクトラは全ての石を探し出すことが出来ず、年老いて死んでしまったんだ。

でもその意思是、彼の子供達へ引き継がれ、石探しはそれからもずーっと続けられた。

そのエレクトラの子供達が、我々のご先祖にあたるんだ」

レナの口は驚くような形を見せる。ザードは相変わらず白けた声で

「アンタらのご先祖は、レッドエデンの昔話に出てくるエレクトラだったのか？」

「そう。そして私と、娘のレイチェルはエレクトラの直系の子孫にあたるんだ」

「・・・そりゃあ・・・凄いな」

「うん、そうだね。

でも、信じていないよね？ザード君？」

「その話だけでは、な」

「まあ、無理も無い話か」

シャノンは苦笑いを見せる。

「ま、別に信じて貰わなくても結構だ。これからの話には関係の無いことだからね。

とにかく、私達はエレクトラの意味を受け継ぎ、7つに別れた石"ヘヴンガレット"を探し、世界中を旅しているんだ」

「ヘヴンガレット？」

その言葉にザードは反応する。

「・・・聞き覚えがあるのかな？」

「確か、5年ほど前に噂になった言葉だ。何処からか、無限の魔力増幅器とも呼べる鉱石が発見されて、ソレの争奪戦に色んな国が関わってたって話だ。

その後どうなったかは聞かなかったから、結局デマか何かだったのかと判断していたが・・・」

「君の情報網は凄いね」

シャノンが感嘆の声を上げ、同時に油断のならない相手を見る目つきに変わった。ザードはゲイルから話を聞いただけなのだが、シャノンには黙っておく事にした。

そう言えば、エベネゼルで待機しているゲイルは今頃何をしているのだろうか？

「私達はヘヴンガレットを探す為に、飛び抜けた魔導技術の噂を探し、しらみ潰しに当たっている。

そして、一月ほど前に死者の魂を呼び戻す魔導を構築した君の噂を聞いたんだ」

レナは緊張した面持ちでシャノンを見ている。シャノンは言葉を続ける。

「君がその術を使う時、何らかの魔力を増幅する道具を使っていないかい？」

レナは小さく息を呑み、自分のショールを首元で留めている飾り石に手を当てる。握り拳よりやや小さな、赤黒く丸い石がはめ込まれたブローチ。レナはその姿勢のまま、どう答えれば良いのか迷っている様子だ。

「・・・見せて貰っていいかな？」

シャノンの言葉を聞き、レナは何故かザードを見た。

「・・・お前の問題だろ。自分で決めろ」

レナは躊躇いながらショールを留めるブローチを胸元から外す。服の上からでは分からなかったが、ブローチはショールの下で丈夫そうなチェーンでレナの首に掛かっていた。

「どうぞ・・・」

ブローチを受け取ったシャノンは、赤黒く丸い石を覗き込む。石に何を感じたのか、シャノンは苦笑いを見せて溜息をついた。

「良く見ていてくれ」

そう言うとシャノンは呪文を口ずさみ、指先をレナのブローチに当てる。するとシャノンの指は、まるで水の中に沈み込むように、石の中へ潜り込んだ。そして

「ーーッ！！！」

目の前で溢れ出した強烈な魔力の奔流に、ザードは飛び上がった。

周りの様子は何も変わらない。しかし、魔導を操る者や、そうで無くともザードのように潜在的な魔力も持つ者なら、誰でもこの異常な魔力を感じる事が出来るだろう。

シャノンはレナのブローチの中から、真っ赤なルビーにも似た石を引きずり出していた。

それは、ただそこに在るだけであった。

ただそれだけで、大気に含まれる僅かな魔力を吸い上げ、増幅し、むせ返るような猛烈な魔力に変えてそれを撒き散らしている。

レナもザードと同じように、驚愕の眼差しでシャノンの指先を見ている。

彼女はこの時、今まで自分が持っていた物がどれだけ恐ろしい物だったのかを理解した。

「やれやれ、アタリだったか・・・

君達なら、見ただけでこの存在の異常さは分かるね？」

二人は椅子から腰を浮かせたまま、凍りついた表情でシャノンの指先を見る。シャノン自身も、まさか本物を見つけられるとは思っていなかったのか、もしくは石の発する魔力に圧倒されているのか、僅かに声と指先が震えていた。

そしてシャノンは、ガード達が耳を疑うような言葉を口にした。

「無限の力の源、永久機関へヴンガレット。

今続いているこの戦争は、世間が言うように大国ベクタの侵略が切っ掛けではない。

この石の、奪い合いが切っ掛けなんだ」

第40話 踊る世界

この戦争の始まりは、大国ベクタがアラアスカという国へ攻め込んだ事が切っ掛けだった。

アラアスカは荒れた大地の真ん中に存在する、巨大なオアシスを中心とした小国であった。国の周りは草木一本生えない不毛の大地だというのに、城壁の内側はどの国よりも豊かであったという。

国を囲む広大な砂漠が自然の城塞と化しており、貿易などといった他国との交流は無く、また敵対する国も無い、文字通り世界から孤立した国。

中立国であるアラアスカを侵略したベクタは、世界中から非難された。しかし他国からの声に耳を傾けようとせず、ベクタは更に隣国への侵攻を開始。それを機に火種は拡散し、世界中で戦争が始まったのだ。

そして、それは20年後の現在に至っている。

「アラアスカがどんな国か知っているかい？」

シャノンがザードとレナに尋ねる。

「今じゃ砂漠に飲まれて無くなった国だと聞いたが・・・

ベクタに攻められるまでは、他の国との軋轢もない、豊かで平和な国だったらしい」

「アラアスカのある広大な砂漠は知っているね？」

「何故あのような不毛な大地に、水も、豊かな土地もあったのだと思う？」

「さあな」

ブーツのかかとを鳴らしながら、どうでも良さそうにザードは答える。シャノンのもったいぶるような話し方に、イライラしていた。

「アラアスカには、"石"が・・・"ヘヴンガレット"があったからだ。国の中心に"ヘヴンガレット"で魔力増幅を行うための塔を築き、そこで魔力を様々なエネルギーに変換し、国中へ送っていたのさ。水や、土壌への養分、電力やガスに、国を砂嵐から守る自然結界までね」

途方も無く嘘臭い話に、ザードがシャノンを見る視線に疑惑の色が混じる。シャノンは目の前の"ヘヴンガレット"を指差し、

「これは、魔力増幅器でもあるし、永久機関でもある。使い方次第で、僅かなエネルギーを無限の力へ変えてくれる。その術を知っていた彼らは国を作り、石の存在を隠す為他国との関わりを絶った」

シャノンの話に、レナは興味深そうな表情で、ザードは白けた表情で耳を向ける。

「アラアスカにやって来た他国の人間の中に、疑問を持った者がいたのだろう。何故、このような不毛な大地に、これだけ大きな国が存在できる豊かさがあるのか。

そして、アラアスカで使われていた魔力増幅器の存在を知った」

「それが欲しくて、ベクタはアラアスカに攻め入った、と？」

「そう。しかし、アラアスカは"石"を武力として使う事を考えていなかったらしい。"石"の力を持ちながら、あっさりとベクタに陥とされたそうだ。

そしてベクタは石を手に入れ、それを使い軍事力の強化、兵器開発を進め、世界を力で統一しようとした。今でも、そのつもりなんだろうけどね。」

「ベクタは今も"石"を持っているのか？」

シャノン首を振り、そして何でも無い事のように言う。

「もうベクタは石を持ってはいない。

私たちが5年前、ベクタから石を奪ったからね」

「奪った？」

嘘臭い話の連発で、もうザードはどのような反応を見せれば良いのか分からない。

「言ったろう。世界中に散ったヘヴンガレットを探し、集めるのが我々の仕事・・・いや、使命だからね。

5年前の戦いでは、こっちもかなりの被害を受けたけど、何とか出し抜く事が出来たよ。

でも、ベクタは今も石を取り返そうと我々を探している。そして同時に、世界の何処かにある残りの"石"も手に入れようと動いている。

そして、それはベクタだけの話ではない」

「ベクタ以外にも石を欲しがると居るのか？」

「戦争の初期、アラアスカから石を奪った直後のベクタの侵攻は凄まじかった。ベクタの敵対国の幾つかは、その力はアラアスカから奪ったとある力によるもの・・・つまり、ヘヴンガレットの力だと突き止めた。

そして、世界中に散らばる7つの"石"の昔話は真実だと認識されるようになり、ベクタに対抗する為に多くの国々がヘヴンガレットを手に入れようと躍起になった」

レナはシャノンの話を聞きながら、ずっと自分の"石"を見つめている。

「今、世界中で起こっている戦争はね、ヘヴンガレットを手にした者が勝利すると言っても過言では無い。

今やこの戦争は、ヘヴンガレットの争奪戦になっているんだ」

「・・・世界中が、石とそれを欲しがると人間に踊らされてるって事か」

「もちろん、石の存在を知らず、他国の侵攻から自分達の領土を守っているだけの国や、大戦に乗じて領土拡大や他国の資源を奪おうと普通の戦争をしている国もある。

"石"の存在は、一部の国の一部の人間しか知らない筈さ。

ベクタを始めとする幾つかの国々は、石を奪った上での世界統一を狙っているんだよ」



まるで途方も無い話である。

20年近く続いているこの戦争は、実はおとぎ話に出てくる石ころが原因だと言うのだ。しかも、殆どの者達はその存在すら知らずに戦っている。

いや、踊らされているというのだ。

とても信じられる話では無い。正直、話の中盤からザードがシャノンを見る目は嘘つきを見る目になっていた。

そもそも、世界の国々が血眼になって探しているその"石"が、目の前のテーブルに転がっていると言うのだから益々実感が湧かない。

「ベクタ以外でこの石の存在を知っているのは、何処の国だ」

ザードは恐る恐る、レナのブローチを指でつつきながらシャノンに聞く。今の"石"は、再びレナのブローチの中に封じ込まれており、さっきのように胸の詰まる魔力を撒き散らしてはいない。彼女のブローチは"石"の魔力を遮断するためのものだったようだ。

「それはちょっと教えられないね。

でもま、大体予想は出来ていると思うけど、エベネゼルは知っている筈だよ」

レナはエ驚いて面を上げる。ザードにも、ようやく話が見えてきた。

「エベネゼルも、ヘヴンガレッドを欲しがっている……。

だから、私を王宮に呼んだという事ですね……」

「エベネゼルも、石の力を使って何処かに攻め込むつもりだって言うのか？」

レナとザードの問いかけに、シャノンはどうでも良さそうな口調で、

「さあ、どうかな。

あの国の姿勢なら、石をアラアスカのように良い方向へ使ってくれるかもしれないが……

だとしても、我々はエベネゼルに石を渡すつもりも協力するつもりも無いけどね。我々の目的は石の封印だから」

ここでシャノンは言葉を切り、紅茶を飲んで咳払いをした。

「我々が何で石を探しているのか、って所から、その石を取り巻く情勢まで、とりあえず話せる事はこれで全部なんだけど。少しは信じて貰えるかな？」

「信じられる話じゃないが、本当だったらなかなか面白い話だな」

このような時だけ笑うザードに、レナは非難の目を向ける。不意に、ザードの表情から笑みが消えて、いつもの無表情に戻った。

「あんたの話だけじゃ何とも判断はつけられないな。嘘臭すぎる。

今の話を聞かせたい奴が一人いるんだが、生憎今は・・・」

ザードの呟きを遮り、ドンドン、と激しくドアがノックされ、一人の男が入ってきた。ザード達が乗ってきた飛空艇にも居た男だ。

「族長、ちょっと・・・」

男がシャノンの耳元で小声で用件を伝えると、シャノンは少し驚いた顔を見せた。

「ザード君。村の近くまで君の連れが来ているそうだよ」



ザード達が再び村はずれにある飛空艇の格納庫へ向うと、そこには見慣れた黒塗りのグライダーが止まっていた。そして、そのすぐ横に、エルカカの魔導士達に取り押さえられた、ゲイルの姿があった。ザードがその場に駆け寄る。

「ゲイル！！

・・・何やってんだお前？」

「ごあいさつだな、お前を探してココまで来たってのによ・・・」

シャノンがゲイルを取り押さえる魔導士達に拘束を解くように伝える。自由になったゲイルは、自分を取り押さえていた魔導士達を睨みつけた。

「どうやってここまで来たんだい？」

この村の周りには迷いの結界が張られていて、普通ではここまで辿り着けない筈なんだけどね」

ゲイルは押さえつけられていた肘をコキコキと鳴らしながら、顎でザードを指した。

「そいつに発信機みたいな物を持たせているんだ。

やっぱり何か結界が張られてたか。船の計器が狂い出したから、機械式発信機の方を信じて飛んで来たが・・・正解だったな」

エルカカを覆う結界は、人の方向感覚や魔導式の計器を狂わす事は出来るが、純機械式の発信機に対しては役に立たなかったようだ。いとも簡単に村への侵入を許してしまった事実、シャノンは頭を抱えた。

ザードは自分の身をまさぐりながら、

「発信機って、俺そんな物持ってたか？」

「こっそりとな、随分前からお前の持ち物に仕込んであるんだ。

何に仕込んであるかは教えてやらねえ」

にやりと笑うゲイルに、ザードは眉を寄せて嫌そうな顔をした。



「思い当たるフシは・・・あるな」

シャノンの権限により、ゲイルは常にシャノン達と行動を共にするという条件付きであっさり村へ入る事ができた。そして、シャノンとザードからこれまでの経緯を説明され、5年前のエルカカとベクタの戦いについてそう呟いた。

「5年以上前のベクタ軍の資料は、不自然なまでに散失してしまっているんだ。たった5年前の話なのに、諜報機関の人間ですら把握していない。

分かっているのは、他国に残る、でたらめのような噂話だけでな・・・」

「でたらめって、どんな話だ？」

「魔導の砲を積んだ戦車の大群に攻めてきたり、いくら切っても死なない兵士が攻めてきたり、城のような飛空艇が攻めてきたり・・・そんなだ」

「・・・どれも信じられる話じゃないな」

「でも、石の力を使えば、様々な不可能が可能になってしまう。アラアスカという国が、不毛の大地で栄えていたようにね」

可能性を肯定するシャノン。ザードは何となく、昨日の魔族の事を思い出していた。あのような存在を知ってしまった以上、彼の世界に対する認識は足元から覆されてしまった。そう考えると、死なない兵隊や城のような飛空艇も否定すね事が出来ない。

そう考えているうちに、自分の見た異常な存在を再認識し、一度落ち着いて心の整理をした方がいいかもしれないな、と、やはり他人事のように考えた。

「で、今から5年ほど前・・・丁度、アンタ達がベクタから石を奪ったという時期を境に、ベクタの侵攻は止まった。国の体制も今のものに成り代わり、今では国境で小競り合いをする程度の力しかない。

確かに、ベクタの弱体化と、アンタ達がベクタから石を奪ったと言う時期は一致している。

ベクタは5年前、中枢をゲリラに襲撃されてかなりの損害を出している。

その時に資料の多くが焼失したって聞いているが、残った資料や人の記憶を元に、ある程度の資料の復元はされるべきだ。それが行われていないってのは不自然だとは思ってたが、石の存在を隠す為にそれまでの記録を全て破棄したと言うのなら納得が行く。

やっば、5年前のゲリラは、その"石"を奪いに来たアンタ達なのか？」

「ち、ちょっと待ってくれ・・・！」

スラスラと裏事情を暴露するゲイルに、シャノンは待ったをかける。

「ゲイル君、なんでそんなにベクタの内部情報に詳しいんだい？」

5年前のベクタ本国の戦いは、一般には公表されていない事件の筈だ」

シャノンは、いくらゲイルが情報屋をしているとはいえ、ベクタ本国についての詳しさについては異常だと感じた。

「こいつ、俺と組む前はベクタの諜報員をしていたんだよ」

ザードが何も考えずにゲイルの素性をバラしてしまった。ゲイルはそれに怒る事も無く「まあ、今はベクタに追われる身なんだけどね」と付け加えた。

単純明快な回答に呆気に取られる。偶然にしてはとてつもなく有益な人材を味方につける事が出来た事を喜ぶべきか。あるいは、あまりにも出来すぎた偶然に疑念を抱くべきか。シャノンは暫く悩む事になった。

ザードは溜息をついて、長過ぎる前髪を掻き上げる。

「随分と面倒な話になってきたが・・・とりあえず、俺はレナの護衛として雇われているつもりだ。

アンタの嘘臭い話を信じる気も無いし、石の争奪戦に関わるのはつもりは無いって事でいいな？」

本当に必要な所だけをかいつまんだ雑な解釈で、シャノンに確認するザード。

彼にはシャノンの言う事が本当なのか嘘なのか判断する事は出来ないし、もし本当だったとしても、そのような争い事に関わろうという気は無い。

今のザードにとって気になる事は、レナをさらに来た魔族と、この事件の顛末である。ならば、レナに付いていれば自ずと敵と結果は転がり込んで来る。

「酷い言い草だね・・・まあ、それで構わないんだけど」

ザードの認識は、シャノンにとっても十分なものであった。

「それで、こちらからの要望だが、レナちゃん」

「は、はい!？」

「この石を、我々に譲って欲しいんだ」

これまでの話から、当然の流れである。しかし、レナはどうすれば良いのか分からず戸惑った表情でザードを見た。

「・・・だから俺を見るなよ。

俺はお前を護るだけで何も口出しはしないぞ」

にべもなく言われたレナは、人に頼りっ放しの自分に活を入れるかのように両の頬をぱしんと叩く。そして、真剣な面持ちでシャノンに向かい合った。

「シャノンさん達は、これからこの石をどうするのですか？」

シャノンは少しだけ声のトーンを落とし、真摯な面持ちでレナの質問に答える。

「ここからずっと離れた場所に、これまで集められた石を封印してある神殿がある。

神殿の場所は、この村の中でも私を含めごく僅かの者しか知らない。石を狙う者には絶対に知られてはいけない場所だからね。

目立つ飛空艇は使わず、歩きで向う。片道1月ほどの道のり、とだけ言っておこうか」

「そのほこらまで、私も同行させて貰う事は？」

「流石にそれは無理だね」

シャノンにハッキリと言われ、視線を落とすレナ。彼等にも譲れない一線があるのだろう。

暫くの沈黙が続いた後、シャノンは困った顔のレナを見かね提案する。

「答えはすぐに出さなくても良いよ。こちら石をほこらへ運ぶ旅の準備が必要だからね。

今日会ったばかりの我々の話をこの場で信用してくれというのも、無理な話だろうしね。

とりあえず、君たち3人は村の空いてる屋敷に暫く留まってもらうつもりだ。その間に、答えを出してくれればいい」

「えっ？」

レナは驚きの声を上げ、自分の両脇に座るザードとゲイルを交互に見る。

彼らと同じ家で寝泊りしろというのか。

それは少し恥ずかしいな・・・と思いつつ、非常事態とも言えるこの状況の中不満は言えないと考え、レナは口をつぐむ。

シャノンの提案を聞くと、ザードは伸びをして立ち上がった。

「なら長話はこのくらいで勘弁してくれ。

屋敷ってのは何処だ。こう見えても体はボロボロなんでな。今日はもう引き上げさせて貰う」

ゲイルもザードと同じく気だるそうな表情で、

「俺も、始めっから金になりそうも無い話には興味無いから。失礼するよ」

シャノンは苦笑いを浮かべながら言う。

「分かった、案内しよう。ザード君もレナちゃんも、まともな食事をしていなかったね。夕食も作らせよう」

「あ、そのくらいでしたら私が・・・何もせずにお世話になる訳にもいきませんし」

「お、嬉しいなあ。こんなかわいい子の料理が食べれるなんて」

「ゲイル。レナを口説くな。斬るぞ」

そんな事を話しながら三人は席を立った。

後になって、ザードは思う。

様々な疑問や問題を抱えてはいたが、エルカカの村にレナと留まっていた数日間は、これまでのザードの生涯の中で最も穏やかで、優しい時間だったと。

大した目的も無く剣を振っていたザードが、初めて得た"戦う理由"。

そして、自分の生き方を変えてしまった、レナの存在。

この時のザードには、まるで想像もつかない事であった。

ザードは"オブスキュア"を逆手に握り、静かに剣を振り始める。

始めはゆっくりと、徐々に剣を切り返すスピードを上げてゆき、自分の動きに怪我だらけだった体が付いて来るか、慎重に確かめる。

ザードは誰よりも剣による戦いに秀でていたが、誰かから剣術を学んだ訳ではない。昔から自分の身に降りかかる火の粉を払う為の道具として、自分で剣の使い方を見つけ出した。

ただ普通の人間と違うのは、相手の殺気が視える"能力"があるという事。この魔導とは違う特別な力と、"オブスキュア"だけで、ザードは幾千もの人間を斬り、己の技を磨いてきた。

ザードの振るう切っ先が常人の目では追いきれなくなるまで加速する。目の前の見えない仮想敵に向い、全力で突きを繰り出す。体は軋む事無く、刃はザードの思い通りの軌跡を描いた。

短く息を吐いて、今度はやや離れた木立に飛び掛かり、オブスキュアを太い幹に叩きつける。

バガアッ

鞘に収めたままの"オブスキュア"が、木の幹をえぐる。鞘が指先の半分程の深さに食い込んだ所で、その衝撃はザードの左腕に跳ね返る。しかし、全力を込めた打ち込みを弾き返されても、ザードの体勢は崩れない。

「・・・よし」

自分の体の完調を把握し、ザードは自分の左腕をさする。

「そういう事は、夜中か人目の無い所でやらないと危ない奴だと思われるぞ」

途中から視線は感じていたが、少し離れた所で、ゲイルとレナが籠や袋を抱えてザードを見ていた。

エルカカの村はずれ、シャノンがザード達三人にあてがった屋敷の庭先での出来事だった。

放っとけ、と毒づきながら、ザードは剣を腰のベルトに挿して二人に歩み寄る。

「もう怪我の方は大丈夫なんですか？」

籠を芝に置いて、レナはザードに駆け寄る。

「お陰さまで、な。最初はお前の言う通り、治してもらった怪我の場所を酷使すると違和感があったが、今では元の調子に戻っているようだ」

ザードはレナに、手のひらを握ったり、広げたりして見せる。

「ちょっと、見せてください」

不意にレナはザードの左手を取り、自分の手のひらをザードの手の甲に合わせ、目をつぶる。

レナはザードの怪我の状態を魔導を使い調べているだけなのだが、はた目から見ると、レナと手を取り合い向かい合っている形なので、ザードを何とも気恥ずかしい気分させる。横目でゲイルが腹立たしいほどのニヤケ顔でザードを見ていた。

「・・・大丈夫みたいですね。私の魔導の治療に、ザードさんの体の治癒力が追いついています。これなら、怪我をした所が痛み出すという事は無い筈です」

レナは、自分の事のように嬉しそうな顔でザードに告げる。ゲイルに突っかかりようとしてい

たガードは毒気を抜かれ、歯切れの悪い間の抜けた返事を返して頭を掻いた。



ガード達がエルカカにやって来て1週間が過ぎようとしていた。

3人はシャノンに案内された屋敷を仮住まいとし、ガードとゲイル、そしてエルカカの魔導士達がレナの護衛に当たっている。

しかし、彼等の方から何らかの行動を起こす事も出来ず、ガードは体の傷を癒すためにほぼ1日中眠り、ゲイルは我関せずといった様子で村を見物したり近くの湖で釣りをしていた。レナは時折ガード達に自分の事や、"石"の事について相談していたが、日が経つにつれて、まるで目の前の問題を忘れようとしているののように屋敷の家事に勤しむようになっていた。

問題を棚上げにしてしまったと言ってもいい。1週間という時間が経っていたが、何の進展も無く3人は怠惰な時間を過していた。

「随分と多い荷物だな。何するつもりだ？」

ガードは屋敷の門をくぐりながら、レナとゲイルの抱える荷物を指して問いかけた。

「あ、その、これは……」

何故かガードの質問に言い淀むレナ。レナの言葉を遮るようにゲイルが口を挟んだ。

「湖で大物釣ってきたんだ。どうせなら、今晚のメシはコイツをメインに豪華にやりたいと思ってな。シスターに頼んで色々みつくりてもらったんだ」

「ふうん」

気の無い返事を返すガード。自分から聞いておきながらどうでもよさそうな態度だった。

「お帰りなさい、お揃いですね」

屋敷の入り口に立っていた魔導士がガード達を迎えた。ガード達の護衛として屋敷と一緒に泊まっているゴードンという魔導士である。30代半ばといった年齢で、魔導士というよりは戦士のような体格をした男だ。三人はゴードンとそれぞれ挨拶をかわし、屋敷の玄関をくぐる。

レナは広々とした玄関を見渡した。普段護衛は2、3人居るのだが、今日はゴードンの姿しか見当たらなかった。

「今日はゴードンさんだけですか？」

「ああ、若い連中は別件に駆り出されてな。今日、明日は来ないよ」

「それなら丁度いい、今日はシスターにご馳走作ってもらおう事になってるんだけど、ゴードンさんも一緒にどうよ？若い連中には内緒にしといてやるぜ？」

ゲイルが自慢するように荷物の食材を見せゴードンを誘うが、彼は苦笑いを浮かべて首を振った。

「誘ってくれるのは嬉しいけど、ちゃんと仕事しないと族長に怒られちゃうからなあ。遠慮しておくよ」

「あっそ、お堅いねえ」

「そうだ。ウチにレンヴォールドのワインがあるから差し入れるよ」

「おおっ、ホントか！！ 悪いな、この村いい酒が手に入らなくて困ってた所なんだ」

酒に目が無いゲイルが小躍りして喜ぶ。

「緊張感の無い奴だな。俺達は遊びに来てるんじゃないぞ。レナの護衛として来てる事を忘れんなよ」

「レナちゃんの護衛に協力はするが、俺はお前やエルカカの連中に雇われてるワケじゃないぞ。

それに、一日中寝てばかりの奴が言える台詞じゃねえよ」

痛い所を突かれ、ザードの視線が真横に泳いだ。

「でもよ、たまにはいいんじゃないか？」

非難口調から一転、軽い口調でそう言うと、ゲイルは自分の持つ紙袋からリンゴを取り出しザードに投げて寄こした。

「狙われてるとはいえ、この村にいる以上は安全みたいだしよ。おまけに護衛付きときてる。これだけ安心して羽を伸ばせたのは・・・随分と久し振りだよ」

「エルカカの護衛はお前の為の護衛じゃねーよ」

ザードは受け取ったリンゴを服の袖で磨きながら文句を言う。

とはいえ、ザードはゲイルの言う事も分かる気がした。エルカカの村を囲む森と、その上空には人の方向感覚と村に対する認識力を狂わせる結界が張られており、普通の人間ではエルカカの村まで辿り着く事が出来ないようになっている。方位磁石など方角を示す道具や魔導も全く役に立たず、外部の人間がこの村に入り込む事はまず無い。

例外的に、ゲイルが村に辿り着けたのは発信機という目印をザードが結界内に持ち込んでしまった為だとシャノンと言った。

結界の効果は村の内部からも同じ事で、ザードは村を囲む森を抜けようと試みたが、散々迷った挙句帰り道すらも分からなくなってしまった。念の為にとゲイルから借りた発信機を頼りに村へ戻る事ができたが、それが無ければ今も森を彷徨い歩いていたかもしれない。

ハーフエルフであるザードは、普通の人間よりもずっと五感が優れている。もちろん、方向感覚も。そのザードが結界の力に飲まれてしまったというのだから、どうせ村の外から敵なんかやって来やしない、とタカを括りたくなるというものである。

ザード自身、折角安全な環境に護られているのだから、たまには襲撃を気にする事無く体を休めたいという欲求があった。

「前から聞きたかったんだけどよ」

ゲイルが煙草を吸いながらザードに話しかけた。

夕刻。レナが夕食の準備をしている間、ザードとゲイルが広い客間で伸びている時の事である。

。「何だ？」

ザードは屋敷の本棚にあった、古い伝記を読みながら上の空で答える。

「お前、この戦争終わったらどうするつもりなんだ？」

「・・・考えた事ねーな」

一拍の間を置き、ザードは本から目を離さず上の空で答えた。

「マジメに答えろよな」

ソファーに浅く腰掛けていたゲイルは座り直して、ザードを睨みつけたが、

「真面目だよ。考えたく無いから、考えた事は無い」

「……………」

真面目に返してきたザードに勢いを殺がれてしまった。

ザードは本を閉じて、腕を額に押し当て天井を仰いだ。

「俺は、戦う事しか出来ない奴だからな。

それ以外、何も無いだろ？」

ゲイルの気のせいか、ザードの声は何処と無く寂しげだ。

「・・・そんな事も・・・無いだろ」

「じゃあ、何がある？」

ゲイルの言葉に期待しているような顔で聞き返してきた。ゲイルは暫く固まった後、

「・・・えーと、だな、

ああ、サーカスとかどうだ。お前の器用さは異常だから何でもこなせるだろ多分？」

「殺すぞお前」

ザードに睨まれ、ゲイルはへらっと笑って見せる。

再びザードは腕で額を覆い、ゲイルに悟ったかのような事を言う。

「心配する事は無いさ。

どうせ、この戦争は終わらない。

ずっと、このままだよ」

ゲイルには、ザードがどういう思い出その言葉を口にしたのか分らなかった。世の中の愚昧さに呆れているのか。現実から目を逸らしているだけなのか。分らなかった。

「・・・良いとは思わなかったか？」

ゲイルが、妙に穏やかな口調で言った。

「何が？」

「この屋敷での生活。

とりあえず、ここにいれば身の危険は無い。村の連中も、俺達を迎えてくれたし、シスターは美味しいメシを作ってくれている。

いつか、本当にこういう日常が来たら良いなって、思わないか？」

ザードはゲイルの問いに答えなかった。

ゲイルの質問を最後に会話が途切れていた客間へ、レナがやって来た。

「料理、できましたよ。ゲイルさん、手伝って貰えますか？」

「おっ、待ってましたっ！」

ゲイルは嬉しそうにソファーから立ち上がり、何事も無かったかのように厨房へ行ってしま

った。

「・・・切り替えの早い奴だな」

一人になったザードは、続きを読む為に一旦閉じた本を開けた。

が、ゲイルの問いかけが引っかかり、目で文字を追っても内容が頭の中へ入って来ない。

「・・・クソが」

本を投げ出し、再びソファへ沈み込むザード。

嫌な訳が無かった。

この数日間は、とても穏やかに時を過ごす事が出来た。ゲイルの言うように、このような日々が続けばどれだけ幸せかと思う。

しかし同時に、戦いの無い世界では自分の存在意義を見出す事が出来ず、ザードは平和な世界という物にある種の恐怖を感じていた。

そして、人を傷つける事にしか存在価値を見出せない自分に、愕然とする。

やはり、自分が居るべき場所は此処では無い。

例え人を傷つける事しか出来ない、害悪しか生まない存在だとしても、ザードは戦争のある世界に、自分の居場所を求めるのだろう。

平和な世界で自分の存在意義を失うなら、それは死んでいるも同然である。

しかし

「いいのかよ・・・それで・・・」

そのような考えに辿り着いた自分に失望し、ザードは大きく溜息をついてソファへ沈んでゆく。

「おーい、メシできたぞー」

廊下の向こうでゲイルの声が響いた。短く息を吐き、いつも以上に気だるい表情を浮かべながらザードは食堂へ向った。客間の2つ隣の部屋が食堂になっており、無駄に広いテーブルでいつも三人一緒に食事をしていた。ザードが食堂の扉を開く。

パン、パパンッ！

ザードが扉を開くと同時に撃ち鳴らされる破裂音。

ゲイルとレナ以外の気配は感じていなかった為、完全に不意を突かれたザードは反射的に身を屈め"オブスキュア"の柄に手を伸ばす。

かさり。

戦闘態勢に入りかけたザードの頭へ、色とりどりの紙テープが引っかかった。

『誕生日おめでとうっ！！』

クラッカーを持ったゲイルと、料理を運んでいるレナが、声をはもらせ豪華に飾られた食堂にザードを招き入れたのだった。



豪華、といっても、いつもと違うのは真っ白なテーブルクロスと、普段は暖炉の上に固めて置いてある蜀台に火が灯っている事。そして、いつもより豪華な食事。ついでに、暖炉の上に、「ハッピー・バースデー ザード」と、ゲイルの汚い文字で殴り書きされたプレートが立て掛けである。

「どうよ？ レナちゃんが提案したんたぜ。

お前へ何かお礼したいって言うから、お前の誕生日が近いって事を教えてあげたんだ」

ゲイルはレナの背中をポンと叩く。

「あ、その、改めてちゃんと御礼がしたくて。

あたしは普通にザードさんの誕生日を祝えたらよかったんですけど、ゲイルさんがびっくりさせようって・・・すみません・・・」

「あっ、俺だけ悪者かよ！

レナちゃんももノリ気だったじゃん！！」

「い、言わないでくださいよー！」

レナとゲイルのやりとりを、ザードは固まったまま聞いていた。

今まで感じた事の無い感情だった。ザードの心の中で、何かが突き動かされる。ザード自身、自分が何を感じたのか良く分からなかったが。

ただ、この2人の仲間が、今の自分にとって何よりも大切な存在なのだと、この瞬間に気付いたのだ。

今まで誰とも組まずに旅をしてきたザードが、唯一行動を共にするようになったゲイル。

最初はゲイルの情報網を利用する為だけに協力関係を結んでいたが、いつの間にか彼と共に居る理由は、それだけでは無くなっていた。

仕事として、護衛をすることになった、シスター・レナ。

自分をかえりみない、優しすぎるその性格に興味を惹かれ、ザードにとって彼女は危なっかし

くて放ってはおけない存在になっていた。

ザードの中で、"仲間"という言葉の意味が、この瞬間に大きく変わった。

これまでその言葉の意味を、軽く捉え過ぎていたようである。

ザードは誰に対しても、道を違えたり、死に別れようとも、何も感じる事は無いと思っていた

。

しかし、そのような日が来た時、この2人に対していつものように無感情でいられるだろうか

。

何も感じる事無く、諦める事が出来るだろうか。

それを思うと、ザードは何故か怖くなった。

「おい・・・ザード。

何ボーッとしてんだ。何か言う事は無いのか？」

ゲイルに顔を覗き込まれ、我に返るザード。自分は今、どのような表情をしているのだろうか

？

そう思うと、2人へ真っ直ぐと顔を向けられなくなってしまった。

(何やってんだ、俺は。子供かよ・・・)

この一瞬で、ザードの中で色々な価値観が変わった。無茶苦茶になった心の整理は後回しにし、2人に言うべき事は言わなければならない。

「あ、ありがとう・・・」

そっぽを向いたまま、消え入りそうな声で礼を言うザード。恥ずかしさのあまり自分の声が上がっている事に気付き、そして死にたくなる。

そんな気の利かないリアクションしか返せないザードに、ゲイルは満足げに「ん」と笑いながら頷き、レナはぱちぱちと拍手を送った。

まるで、ザードの反応を予想していたかのように。

◆

「さ、どうぞ。ゲイルさんが湖で釣ってきたんですよ。シャノンさんも見た事が無い大物だっ
て言っていました。

おいしい料理の仕方を教えて貰って作ってみたんですけど・・・一応、自信作ですよ！」

「ああ、おいしい。凄く」

「ケーキも焼いたので、最後に皆で食べましょうね。」

「・・・ああ、すまん」

「じゃじゃーん！！！」

ゴードンのおっさんに貰ったワインだ！！！」

「げ、ゲイルさん、一応私もザードさんも未成年なんですけど・・・」

「未成年って、20歳以下って意味か？

俺の故郷では酒は16歳からオクケーなんだぜ。まあ、俺はガキの頃から飲んでたけど。

レナちゃんは17歳で、ザードは今日で19歳だろ？

だから、問題ナシっ！」

「わわっ、注ぎ過ぎです、ゲイルさん！」

「待て、ゲイル。俺は酒は・・・」

「飲めん、なんて寒い事言うつもりじゃないだろーな！！」

前々から空気読めない奴だとは思っていたが、コレを断ったら駄目だろう？」

「違うぞ、ゲイル。空気は読むものじゃない。吸うものだ」

「それが空気読めて無いって言ってんだ！！！」

「うぶっ！！」

「げ、ゲイルさんっ！？」



ただ、漠然と物凄く楽しかったという記憶が残ってるだけで、パーティーの中盤から終わりまでの記憶はザードには無かった。

ふと気が付くと、椅子に座ったまま眠っていた。痛む首を曲げて部屋を見渡すと、レナは向かいのテーブルに突っ伏したまま寝息を立てており、ゲイルはザードの足元でうつ伏せになって伸びている。部屋も暖かいので、放っておいても風邪をひく事は無いだろう。

ザードはベッドのある自室に戻らず、そのまま二人と一緒に、この部屋で眠る事にした。

まどろむ意識の中で、ザードは自分の存在意義について、ひとつの答えを見つけていた。

この理不尽な暴力が渦巻く世界から、2人を守る為に戦うこと。

それは、金の為に戦うこれまでと比べ、どれだけ意義のあることか。

ザードはこの戦争でどれだけ戦っても、どれだけ高額な報酬を貰っても、全てが虚しかった。自分も世界も、全てが色あせていた。

それはきっと、ザードは今まで一人だったから。

今まで誰とも心が触れ合った事が無いから。

誰にも心を許した事が無いから。

しかし、今のザードには少なくともこの部屋だけは色づいて見えていた。

守ろうと思った仲間が居る、この部屋だけは。

「痛っ・・・」

割れるように痛む頭を抱え、椅子の上で眠っていたザードが目を覚ます。

自分の置かれた状況がすぐに把握出来なかったが、目の前に転がった酒瓶を見て理解する。自分の誕生日パーティーとして、ゲイルとレナの3人で騒いでいたのだ。アルコールに耐性の無いザードは、ゲイルに無理矢理ワインを飲まされてからの記憶が曖昧であったが。

窓から見える日の高さからすると、時刻は昼少し前くらいだろうか。毎日ほぼ決まった時間に目を覚ますザードだが、アルコールのせいで寝過ごしてしまったようだ。

ザードが立ち上がろうとすると、足元にグニャリとした感触が伝わる。

「痛えじゃねーかコノヤロォ！！」

スイッチが入ったかのように床で眠っていたゲイルが目を覚まし、ザードの足を叩いた。ザードはゲイルの頭を硬いブーツで蹴り返してから、改めて部屋を見回す。

テーブルの向かいで眠っていたレナの姿が無かった。先に目を覚まし、寝過ごすザード達をそのままに部屋を出たのかもしれない。そう考えたザードは、レナの名を呼びながら屋敷を歩いて回った。しかし、彼女の姿は無かった。

「おい、起きろゲイル」

ザードは床で伸びているゲイルの腕を掴み、引き起こす。

「うううう。おい、ザード。お前、さっき俺の頭を蹴飛ばさなかったか？」

「・・・何の話だ？」

「そんな事より、レナの姿が見えない。知っているか？」

「いいや・・・俺も今起きた所だから・・・」

「痛て・・・酷い頭痛だ・・・そんなに飲み過ぎたかな昨日・・・？」

ザードと違い、ゲイルは度を過ぎた酒豪である。これまでもアルコールの強い酒を水のように飲みながら平気な顔をしているゲイルを、ザードは何度も見ている。

ふと気になり、ザードは床に転がるワイン瓶に貼られたラベルを見たが、そこに記されアルコール度数は大した物ではなかった。

「おかしいな、こんな酒で酔いつぶれるなんて・・・俺も年取ったって事かね・・・」

ゲイルもザードと同じように、瓶に視線を落としている。

ザードの胸に、嫌な予感がよぎった。

「このワイン、屋敷の警備の奴から貰った物だったよな」

ザードがゲイルに聞いた。

「ああ、ゴードンとか言うオッサンだ。あいつにシスターの居場所は聞いたのか？」

「さっき見回ったが、今屋敷に居るのは俺達だけだ」

ゲイルの表情が、強張る。

「ザード、お前、何考えている？」

「早計かもしれないが・・・奴に一杯盛られて、レナをさらわれた事を考えている」

「・・・俺もだ」

レナにはゲイルの発信機を一つ持たせていた。しかしその反応は感知出来ず、それは発信機が壊されたか、信号の届かない洞窟等に居るかのどちらかを示していた。発信機の反応を捉えられない程離れた場所に居る、というケースは排除できた。ゲイルの発信機の受信範囲は広く、昨晚から現在までの半日程度の時間では、飛空艇でも使わなければ受信範囲から出る事は出来ないであろう。

「洞窟、ね。心当たりはあるよ」

ザードとゲイルは、族長であるシャノンに事態を説明した。現在、村中でシスター・レナとゴードンを探しているが、見つかったという知らせはまだ無い。ワインにも眠り薬が混ぜられていた事も分かり、このまま予感が的中する可能性が濃厚である。

「村の外の人間には絶対に内緒にして欲しいが・・・」

実は、村の結果内から外に続く地下道がある。村の裏山から、村の外の街道近くまで続くものがね」

「結界の外って・・・かなりの長さの地下道にならないか？」

「そうだね。人の足で歩いて、半日。洞窟内に敷かれたトロッコレールを使えば3時間くらいの長い洞窟だ。

すぐ村の者に調べに行かせよう」

数分後、洞窟を調べに行った者からの報告は、入り口にあるトロッコが一台無くなっているというものであった。ザード達が異変に気付いてから約1時間程が経過していたが、これ以外レナの行方に可能性がある場所は見つからなかった。

「ゲイル、船を出せ。ひょっとしたら洞窟の出口に先回り出来るかもしれん。

族長さん。悪いけど、村側の洞窟の封鎖を頼んでもいいか？」

「手配しよう。少し遅れるかもしれないが、我々も洞窟の出口へ向かう。

全く、とんだヘマをしたね。依頼料は減額させて貰うよ」

「・・・すまない」

ザードは一言だけ謝ると、シャノンは軽くザードの胸を叩いて、他の村人が集まる中央広場へ向った。洞窟出口の座標を控えたザードとゲイルは、走って村はずれの岩山、飛空艇の格納庫へ向う。ゲイルのグライダーを使えば、洞窟の出口まで半時もあれば到着出来る筈だった。



同じ頃。村から続く地下道をトロッコが一台、質素な見た目にそぐわぬ滑らかな滑走音を響かせて走っていた。

トロッコに乗るのは、シスター・レナと、屋敷の警備役をしていたゴードンの二人である。

「う・・・」

小さく呻いて、レナが目を覚ます。時折ガタゴトと揺れる硬い地面に違和感を感じて起き上が

ると、その両腕は縄で縛られトロッコの床板に固定したアンカーに繋がれていた。

「目が覚めましたか・・・？」

すぐ隣で、屋敷の警備をしていたゴードンが座っていた。

レナが慌てて周りを見回すと、小さなランタンで照らされた身の回り以外は真っ暗で、自分達が何かの乗り物に乗っているという事くらいしか分からなかった。

「村の外へ続く地下道をトロッコで走っている所です。

もう数分もすれば、出口です。どうか、大人しくして置いて貰いたい」

ゴードンは落ち着いた様子で、この異常な状況を説明した。しかし、レナは益々混乱するばかりである。

「これは・・・どういう事ですか？

ザードさんや、ゲイルさんは！？」

「昨晚、私の差し入れたワインに眠り薬を盛らせて貰いました。二人には危害は加えていません。

そして、レナさん、貴女は私と一緒に、エベネゼルまで来て貰いたい」

「・・・エベネゼルへ？」

「この村の人間に協力せず、エベネゼルに協力して欲しいのです。

元々エベネゼルへ行くつもりだったのでしょう？

助けられたとはいえ、族長にさらわれてきたも同然じゃないですか」

「それは・・・そうですが・・・。

何故、こんな事をするんですか、あなたは、エルカカの人間なのでしょう？」

ゴードンはレナから視線を外し、俯くように話し始めた。

「心情としては、私はエルカカの民として"石"と貴女の力を安全な方向へ導きたいと思っています

ですが、私は村の外、エベネゼルの都に家族を持っていますね。

その家族を・・・人質にとられているのです」

レナが目を見開く。

「"石"を、ヘヴンガレットの力を操る貴女の身柄を確保して、何としてでもエベネゼルへお連れするようにと。

それが私に命じられたことです。

彼等は貴女の力がどうしても欲しいようですね」

エベネゼルは、この世界大戦の中でも中立を保っている。戦地へ医師団を派遣したり、戦災の復興を牽引したりと誰からも世界に有益な働きをしていると認められている国である。そのような国が、人質という手段を使い石の奪取に関わってきた事にレナは動揺を覚える。そして、怒りも。

「・・・エベネゼルでもエルカカでも、私の力が人の為になるのなら誰にでも協力はします。

ですが、あなたの家族を人質に取り、エルカカを裏切るように仕向けたエベネゼルのやり方は、許せません。

私はエベネゼルに協力する事は、できません」

ゴードンは自嘲めいた笑みを浮かべる。

「はは・・・君の怒りの矛先は僕ではなくてエベネゼルに向くのか。

納得出来ない気持ちは私も同じだ。でも、私はこうするしか無いんだ。分かって欲しい」

元々レナはエベネゼルに協力するつもりで村を出たのだから、この状況に身を任せていても問題は無いのかもしれない。

しかし人質を使って、ゴードンにエルカカを裏切らせたエベネゼルのやり口は、如何なる理由であれ納得できなかった。そう思うと、このまま自分の身柄がエベネゼルに渡る事に抵抗を感じる。

彼女がエベネゼルに対する気持ちは大きく変わっていた。

しかし、両手を縛られた非力な自分に出来る事は無く、レナは複雑な思いでゴードンの襟元を睨みつけることしか出来なかった。



村の岩山から飛び立ったグライダーは、最大速度でシャノンに教えられた洞窟の出口へ向かう。

いつものように操縦席にゲイルが、後部座席にザードが"オブスキュア"に手を掛けて座る。しかし、ザードにはいつもの落ち着きが無い。

「ソワソワするな。10分もしないうちに着くから」

ゲイルは激しく振動する操縦桿を抑え付けながら言う。船の外壁も、ギシギシと軋みを立てている。軽く柔軟な素材で作られたゲイルのグライダーは、速度を求めるあまり、エンジン出力の

割りに船体の強度は極端に弱かった。最大出力で飛んだら、船体の制御は利かない。そのギリギリの速度で、ゲイルはエンジンを回し続けた。

「少しだけ、俺の思っている事を聞いて欲しいんだが・・・」

「何だよ、藪から棒に・・・気持ち悪いな」

普段と違うザードの声色に、ゲイルは眉を寄せる。ザードは咳払いを一つしてから、

「昨日の夜、お前らに誕生日を祝ってもらった事だが・・・」

「ああ」

「これまで生きていて、一番嬉しかった」

はっきりとした口調で言った。ザードが自分の気持ちを、これほど明確に言葉にした所を、ゲイルは見た事が無かった。

「今までで一番、楽しい時間だった。」

あんな気持ちになったのは、生まれて初めてだ」

やや面食らいつつも、ゲイルはザードの気持ちを受け取る。

「・・・そうか。」

悪くないだろ。他人とつるむのもよ」

「まあな」

一瞬会話が途切れた後、やや口調を硬くしたザードが再び話し始める。

「生まれて初めて、仕事や金を抜きにして、守りたいモノが出来たんだ。」

ゲイルやレナを失う事が怖いと思った。

昨日の夜をお前らとすごして、そう思った」

「な、何だよ。ははっ、マジで気持ち悪いぞお前？」

あまりにも真っ直ぐなザードの言葉に、ゲイルはムズ痒くなってくる。ザードは続く言葉を、今度は俯きながら言った。

「そう思った矢先に、この様、だ」

血を吐くようなザードの言葉。ゲイルの顔からも笑みが消えた。

「ゲイル、ここから先は仕事抜きでやらせて貰う。」

俺は、レナを連れ戻したい。

どんな手を使っても、だ。

エルカカと衝突する事になっても、俺はレナの味方に付く」

ゲイルは苦笑いを浮かべ、頷く。

「オッケー。」

それじゃ、俺も今からオフだ。仕事は抜き！

その上で、レナちゃんを連れ戻しに行く」

そう言い、ゲイルはお気に入りのワインレッドのネクタイを緩めた。

「すまん。今回は俺の勝手ばかりだな」

「構わねーよ。」

俺は、お前がそういう風に思ってくれた事が嬉しいし、お前の考えにも賛成だ」

「俺も、こんな思いで行動するのは初めてだ。自分でも良く分からない」

ザードは考えるように天井を仰ぎ、

「・・・やっぱり俺、恥ずかしい事言ってるよな？」

我に返ったように、そう言った。しかしゲイルは笑わず茶化さず、真面目に答える。

「自分の思いを素直に相手に伝える事の何処が悪い。まあ、普通の人間は、なかなか言えないもんだけどな」

「それ、俺が普通じゃ無いって言ってるのか？」

「だから、悪い事じゃ無いって。

レナちゃんにも、今の言葉を伝えてやれよ。きっと喜ぶぜ？」

「？ そ、そうか」

ザードには、ゲイルの言う意味が良く分からない。が、たまには素直にゲイルのアドバイスに従ってみようと思った。

「・・・さーて・・・。

見てみるザード。面白いモンが見えてきたぞ」

そう言われ、ザードはグライダーの操縦席前方を覗き込んだ。

晴れ渡った空の下、一面に広がる樹海。その先の空に、巨大な船影が見える。

それをグライダーに積まれた望遠カメラで写すと、白い大型の飛空艇が浮んでいる。

「エベネゼルの船だ・・・」

船に奢られた、十字架と羽と蛇のエンブレム。

それはレナの力を欲しているもう一つの勢力、エベネゼルのものだった。

森の中に何人もの男達が居た。

彼らの殆どは、白と青の神官服を模した軍服を着る30人程の兵士達。全員が大振りの長剣を帯びており、数人がライフルを持っていた。その兵士達の列から離れるように、彼らとは違う雰囲気を持つ2人の男が居た。

一人は兵士達と同じ軍服にコートを羽織った、太った中年の男。軍服には高い地位を示すバッジがこれみよがしに輝いている。

もう一人は20代半ばのスーツを着込んだ若者。狡猾そうなその顔には、丸い眼鏡がかけられていた。

そして彼らの頭上には、魔導機関を動力とするエベネゼルの飛空艇が音も無く宙に浮いている。

彼らから少し離れた茂みで、葉の擦れた音がした。兵士の一人が剣を構え、スーツの男がそれを制する。

「時間通りですね、ゴードンさん」

茂みから現れたのは、エルカカから続く地下通路を抜けてやって来たゴードンと、両手を縛られたレナの二人だった。

「その少女が例のシスター、レナかね」

太った軍人が偉ぶった口調で尋ねる。ゴードンは彼らを警戒するように距離を置いて、頷いた。

「肝心の"石"を見せてもらおうか」

「・・・見せたところで、これが本物かどうか判断できるのですか？」

「それは船の中で待つ魔導士と学者に判断してもらおう」

ゴードンの問いに、スーツの男が答えた。

「・・・シスターを渡す前に、私の家族の安全を確認させて欲しい」

「残念だが、今証明できるものは無い。」

なに。君もこの船で我々やシスターと共にエベネゼルまで来てくれればいい。

家族と共にエベネゼルに移住すればいいだろう。君の市民権も仕事も用意する。協力して貰った礼だと思ってくれ」

スーツの男の提案に、ゴードンは口をつぐんで考える。

「すまないね、レナさん。私と一緒にエベネゼルへ来て欲しい」

苦虫を噛むような顔で、ゴードンはレナにそう言った。

レナは、未だ自身の身の振り方に答えを出せずにいた。レナが軍服の男とスーツの男に問いかけた。

「あなた方は、エベネゼルの方々ですか？」

私を・・・連れ戻しに来たのですか？」

軍服の男が、両手を広げ、嬉しそうに答える。

「そうだ。君をさらったテロリスト共の一人・・・ゴードン君に協力を依頼してね。

お陰で穩便に君を助け出す事が出来たよ」

にこやかに言う軍服の男の態度に、普段滅多に怒らないレナの頭に血が登った。

「ゴードンさんの家族を人質に取って、無理矢理協力させたんじゃないですか!？」

「・・・。」

レナが見せた鋭い視線に、軍服の男は苦い表情で黙り込む。スーツの男は、その反応を鼻で笑った。

「ところで、この飛空艇・・・軍艦は何だ？

ただの足にしては大仰じゃないか・・・」

頭上に浮ぶ巨大な船を見上げて言うゴードンに、軍服の男が、

「我々は、このままテロリスト共の集落を攻撃するつもりだ」

事も無げに言い放たれた言葉に、レナとゴードンは耳を疑った。

「な・・・!？」

なんだそれは!! そんな話、聞いていないぞ!!」

「君たちの部族は、シスター・レナが持つような強力な魔力増幅器を世界中で集め回っているそうではないか。そのような危険な力を持つ者達を、放っておけると思うか？」

「ふざけるな!!」

我々は自分達の利の為に"石"を集めている訳じゃない!!

貴様等のような奴等から守る為に・・・ッ」

軍服の男に向い、激昂するゴードン。しかし、全ては自分が撒いた種である事に気付き、言葉は後に続かなかった。

僅かな沈黙の合間にスーツの男が割り込む。

「もう良いではないか。君の居るべき場所は、エベネゼルの家族の元なのだろう。

今まで君を掟や規則で縛り付けてきた故郷に、未練はあるのか？」

ゴードンはうなだれるように俯いている。

レナは俯くゴードンと目が合った。その時レナにしか聞こえない小さな声で、ゴードンは言った。

「すまない、私が間違っていたようだ・・・」

その眩きとともに、ゴードンは小声で呪文の詠唱を始めた。

「少佐!!」

船です!! 小型の飛空艇が近づいて来ます!!」

頭上の飛空艇から連絡を受けた兵士が声を上げた。それと同時に、空気を震わせながら騒々しいエンジン音が近づいてくる。

兵士達が空を見上げた時、滞空する彼らの戦艦の下に、もう一隻の小さな飛空艇が滑り込んで来た。その船は樹海の木々の高さギリギリを滑空しており、彼等の船のレーダーでは見つける事

が出来なかったのだ。現れた船は一気に急降下し、森の中で僅かに広がった草原、レナやゴードン達の居る場所に突っ込んできた。蜘蛛の子を散らすように、兵士達がその場から逃げ出す。

小型飛空艇は、逆噴射で盛大に砂と木の葉を舞い散らし、ほんの僅かな滑走で着陸した。黒塗りの小型のグライダー。レナも見覚えのあるそれが完全に停止するより早く、ばがんと飛空艇のハッチが跳ね上がった。

「レナ！！」

飛空艇の副座からザードが立ち上がり、その名を呼んだ。そして、すぐ近くで草むらで尻餅をついてこちらを見上げる彼女と、その腕を縛った縄を掴むゴードンの姿を見つけた。

「きさまっ！！」

ザードは騒然とする兵士達に目もくれず、飛空艇の上からゴードンに飛びかかった。左手には、抜き放たれた"オブスキュア"が握られている。

「まって、ザードさん！！」

「！！」

両手を縛られたままのレナが、ザードとゴードンの前に立ちはだかる。ザードは空中で身をよじり、レナのやや手前に着地する。ゴードンにとっても、レナの行動は予想外である。

ザードは周りの兵士達が剣と銃を構え、にじり寄ってくる姿を横目で捉えながら、

「状況を聞きたい所だが、悠長にしている暇は無いようだな。

そいつ・・・ゴードンは、俺達の敵じゃないんだな？」

「はい。ゴードンさんは、何も悪い事はしていません」

はっきりとレナはそう断言する。ゴードンは驚いて彼女を見た。

「じゃあ、この・・・エベネゼルの兵隊達は？」

「この人達は、これからエルカカの村に攻撃を仕掛けるって・・・エルカカの人達の事を、テロリストだって・・・」

「ああ？」

それを聞いたザードは驚き、周りの兵士達を見下ろし鼻で笑った。

「はっ。止めといた方がいいぜ。

あの村の連中はどいつもこいつもケタ違いだ。お前らみたいなボンクラじゃ返り討ちに遭うのがオチだ」

「何だと貴様！！」

馬鹿にした口調のザードに、軍服を着た男が激昂する。

「君が、ザード君だね？」

名を呼ばれ、ザードは憤慨する軍服の男には目もくれずスーツ姿の男を見据えた。その眼差しや落ち着いた口調から、この男は周りの腰の引けた兵士達とは違うように見えた。

「何故俺の名前を？」

「君の事はデミルから聞いているよ」

ザードはその名が、一瞬誰の事が分からなかった。

そして、ザードを追い詰めた、この世に在らざる力を持つ魔族の姿と、夜の森での襲撃の事を

思い出した。エベネゼルの人間が、あの魔族の仲間。

「貴様等か・・・！！

レナの護衛隊に襲撃を仕掛けたのは！！？」

「え・・・！？

でも、どうして・・・」

あの晩の襲撃がエベネゼルからの刺客によるものだとしたら、エベネゼルが同士討ちをした事になる。レナがその矛盾に戸惑う。

「シスター。あなたの存在はとても危険です。あなたと"石"を狙う者は、これから次々と現れるでしょう。よって我々エベネゼルは、あなたに一度死んだ事になって貰おうと考えた。それがあの襲撃です」

ガードに警戒するそぶりすら見せず、スーツの男は歩きながら淡々と話し始めた。垂らした前髪に隠れた丸眼鏡のツルを持ち上げ、話を続ける。

「事実、あなたに同行した護衛隊には他国のスパイも居ました。まあ、素性も知れぬ日雇いの傭兵を募ったのですから、スパイに来て下さいと言ってるようなものだったのですがね。

護衛隊に紛れずとも、遠くから貴女を監視していた者達も居たのですよ？

あれは、その全ての視線からあなたを隠すための作戦でした」

「エベネゼルがレナと"石"を失ってしまったかのように見せるための自作自演だったってのか・・・。

で、その目論見は上手く行ったのか？」

男は大袈裟に両手を広げ、眉を傾ける。

「台無しですよ。彼女がせっかく仕立て上げた襲撃現場をご丁寧にお墓に変えてしまいましたからね」

男の言葉にガードは笑った。

「そしてエルカカ族と"月の光を纏う者"の介入・・・予想外もいいところです。

という訳でどうでしょう？ ガードさん。レナさんやゴードンさんと一緒にエベネゼルへ来て貰えないでしょうか？

歓迎致しますよ？」

「クソ喰らえだ」

そう即答したのは、ガードではなかった。

ゲイルが船から身を乗り出し、初めてこの場に姿を見せた。

「・・・っ！！

おまえ・・・は！」

スーツの男が、驚愕の表情を浮かべる。



「ザード。そのスーツの男はエベネゼルの人間じゃないぞ。

帝国の・・・ベクタの諜報員だ」

「何だって？」

脈絡も無く出た世界最大の軍事大国、ベクタの名を出され、ザードは思わず訊き返した。

ザードだけではない。その場に居る全員がゲイルの言葉を信用できず、戸惑いを見せる。ゲイルは仕方無い、といった様子で溜息を吐いて、

「だから、まあ・・・知り合いだよ。っつーか、俺の元同僚。

久しぶりだな、オルレイ。

そんな驚いた顔をするな。お前の得意技は笑顔とポーカーフェイスだろう？」

ゲイルの言う通り、オルレイと呼ばれたスーツ姿は幽霊にでも遭ったかのような、驚きと焦りの表情を見せている。ゲイルに指摘され、ハッと表情を引き締めるが、もう遅い。

「ゲイル・・・貴様、死んだんじゃないのか・・・？」

「そうだよ。そういう事にしておいてくれ。内緒だぞ、俺が生きてるって事は。

それより、これはどういう事だ。ベクタがエベネゼル軍を利用してるのか？

それとも、ベクタとエベネゼルのグルって事か？」

軍服の男はビクリと跳ね上がり、うろたえる様な目でゲイルを見た。取り巻きの兵士達に動揺の気配が走る。その反応を見ていたゲイルは、

「その軍人さんの反応からして・・・グルってセンか。

そっよとして部下の兵隊さん達は知らされてないのかな？」

軍人達の分かりやすいリアクションから関係を見抜かれてしまったオルレイは、呆れるように溜息をついた。

「どういう・・・事ですか？」

レナが誰ともなく尋ねた。オルレイが諦めにも似た色を含ませ、その疑問に答える。

「分かりませんか？」

貴女の護衛隊を襲ったのは我々ベクタの手の者です。エベネゼルの情報は我々に流し、自分達

の護衛隊を襲わせたんですよ。貴方の存在を公に消す為の事件を演出する必要があったからです。

いえ、もちろん本当に貴方を死なせてしまうつもりはありませんでした。暫くは石の話を色々とか聞かせて貰う必要もありますからね。あくまで、演出です」

レナは自分に殺意が向けられているという訳では無い事理解し、ある程度の安心感を得た。同時に、多くの人達を傷付け迷惑をかけている自分が、そのような事で胸を撫で下している事を心の奥底で恥じた。

オルレイの言葉は続く。

「エベネゼルには"石"の力の運用にもご協力を頂く予定です。我々の国は科学技術では抜きん出た力を持っていますが、魔導技術には疎い所がありますからね。

そうして"石"の力をベクタとエベネゼルで独占する・・・それが我々の描いていたシナリオだったのですが・・・さて、どうシナリオ修正をするかな」

そこまで話すと、オルレイは片手を頭に当てて俯きながら溜息を吐いた。

「何でそんな回りくどい事を？」

首を傾げて聞くゲイル。しかし口調はどうでも良いといった様子だ。

「回りくどいのは認めるよ。

しかし、ベクタは我々と協力関係にある事を世間に知られたく無かったらしい。だからシスターを連れ出す時の口実は、我々に"売る"というのではなく、"さらわれてしまった"という事にしたかったそうだ。護衛隊も襲撃も、その為のお芝居だ。

下らない話だろう？」

ザードもゲイルも、レナも。そしてゴードンも、呆れて言葉を失った。

「前々から保身ばかりを考える気に入らない国だと思っていたが・・・そこまで下衆だったか。

そんなに世間体が気になるか、エベネゼルは」

見下した目で、エベネゼルの兵士達を睨め付けるザード。オルレイは肩を竦める。

「らしいな。

何せ、世界で最も平和主義を掲げている大国だ。

世界で最も忌み嫌われる国と協力関係を結ぶなど、とても公に出来ないんだろう。

俺には理解出来ない考えだがな。下衆は下衆らしくしていればいい。我々のようにな」

呆れるように手の平を向けて、"やれやれ"のポーズを見せる。少し離れた場所で棒立ちになっていた太った軍人の顔が怒りに染まっていた。

「極力穏便に事を進める事がエベネゼルの意向だったが・・・君達が登場してくれたお陰で、もう実力行使しか手段は無くなってしまったよ」

「それは悪かったな」

「いや、感謝しているよ。私としても、こちらの方が手早く済みそうだからね」

剣を構えて一步踏み出すザードに、オルレイは強気な口を叩きつつも、一步後ずさる。

そして少しだけ空の彼方へ視線を向けて、こう呟いた。

「来い、デミル」

オルレイのその声が戦いの合図となった。

突如虚空に現れた黒い渦より、闇を纏ったかのような死神、デミルが姿を現す。その姿を認め、ザードの顔には思わず獰猛な笑みが浮かぶ。剣を構え、駆け出した。

「会いたかったぞ人間！！」

デミルもザードと同じ表情を浮かべて、右手の大鎌を振り抜いた。間合いのはるか外の斬撃だが、ザードはその場に身を伏せる。

一瞬の後、ザードの背後でエベネゼル兵数人の上半身が見えない刃に斬り飛ばされ、あたりに血飛沫を撒き散らした。

「ひゃあああああーっ！！！」

それを目前で見てしまった軍服の男は裏返った悲鳴を上げ、森の奥へと逃げ出してしまった。残った兵士達も指揮官を追う様に、慌てて森の奥へと姿を消してしまう。

そしてこの場には、ザードとゲイル、レナとゴードン。そしてオルレイとデミルの6人だけとなった。

「邪魔者が消えて助かる！」

船から飛び降りたゲイルはレナとゴードンに駆け寄り、ナイフでレナを縛る縄を切った。ゲイルはその横に佇むゴードンに目を向け、

「アンタはどうするんだ。返事によっては、ここで撃ち殺させてもらう」

そう言いながらゲイルは意外な手早さで銃を抜き、ゴードンの胸元に銃口を突きつける。しかし、ゲイルが引き金を引くより前に、ゴードンの首元が血霧と共に爆ぜた。

オルレイがゴードンの背後、ゲイルの正面から銃を撃ったのだ。ゴードンの首を貫いた銃弾はゲイルの頭上を行き過ぎる。ごぼりと血を吐いて、ゴードンは崩れ落ちた。

「ゴードンさんっ！！」

レナが叫ぶように名を呼ぶ。仰向けに倒れた彼は、懸命にレイチェルに何かを言おうとしていたようだが、喉を破られている為それは言葉にはならなかった。

白煙をたなびかせる銃口を向け、オルレイが歩み寄る。

「ゴードンさん、聞こえますか？」

最期に一つお教えしましょう。

お預かりしていたあなたの家族の事ですが・・・

実は、もうとっくにこの世には居ないのですよ」

ゴードンとレナの表情が凍りつく。事情を知らないゲイルは今にも飛び出して行きそうなレナの腕を掴み、オルレイの言葉に耳を傾ける。

「だから、安心して逝って下さい。ご家族も向こうで貴方を待っている筈ですから」

オルレイは目の前で自分に睨みつけるレナに視線を向ける。

「確か、貴女の蘇生術は相手の肉体の損傷が大きいと使えないのでしたよね？」

確認するように言うと、オルレイは倒れたゴードンに次々と銃弾を打ち込んだ。

「いやあああーっ！！！」

悲痛なレナの悲鳴。驚いたゲイルは、レナに掴んだ腕を振りほどかれてしまう。ゴードンに駆け寄るレナの足を狙って、オルレイは銃口をゴードンから外した。

「おああああっ！！！」

レナの悲鳴に反応したザードが、オルレイに向い斬りかかる。戦っていたデミルに背を向けての行動だった。

「ッ！！？」

ザードの声でレナへの射撃を中断したオルレイはザードの斬撃を紙一重、ほぼ偶然とも言えるタイミングでかわした。

「ぐ・・・！」

身を掠めた濃厚な"死の匂い"。オルレイの全身から冷や汗が吹き出る。オルレイの崩れた体勢に、ザードは追撃の刃を振り下ろす。

しかし、オルレイを切り伏せる前にザードの身体は前方へと弾き飛ばされた。デミルに背中を斬り付けられたのだ。しかし大鎌が浅く当たった事と、ローブの下の防刃服のお陰で大きなダメージは無かった。すぐに立ち上がり、レナを守るように傍らに立つ。

ザード達と、オルレイ、デミルは、大きく間合いを空けて対峙した。

レナは膝を地に突き、動かなくなったゴードンの体に手を当て声も無く泣いていた。口径の大きな銃で全身を撃たれていた。レナの経験上、"石"の力を使っても救える状態では無かった。

「レナちゃん・・・大丈夫か・・・？」

ゲイルが優しく聞くが、レナは無反応だった。その表情はザードとゲイルからは見えない。

「ゲイル、レナを頼めるか？」

正直、あのバケモノを抑えるだけで手一杯だ」

「・・・まかせろ。

オルレイの奴はなんとかしてみせる。

・・・とは言っても、喧嘩は専門じゃないんだけどなあ」

ゲイルは、人を殺した事はあるが、"殺し合い"をした事は無かった。

「俺が足止めをするから、レナを連れて森へ逃げ込め。森の中なら銃弾もかわし易い。

あのバケモノを片付けたら、俺もすぐ行く」

「分かった。・・・死ぬなよ」

「死ぬかよ。

レナ、そういう事だ。とりあえず、ゲイルと一緒に逃げてくれ」

ゲイルはレナの手を引き、やや強引に彼女を立ち上がらせた。涙で濡れたレナに表情は無く、まるで抜け殻のようであった。その姿に、ザードとゲイルの胸は締め付けられる。

「じゃあ、続けるか・・・」

剣を肩にかけて、体操するように腰を曲げるザード。その表情が消えると同時に、ザードはデミルへ向い駆け出した。ザードを迎え撃つ為に飛び出すデミル。その隣のオルレイは、ゲイルに向い銃口を向ける。

その時、ガードが無造作にオブスキュアを投げつけた。デミルに向かってではなく、オルレイに向かって。

「な・・・ッ！？ぐっ！」

ざこん！！

横に回転するように飛来した"オブスキュア"は、飛び退がったオルレイの足を浅く斬り裂き、その足元の地面に突き立った。

「今だ、走れ！！」

ガードがゲイルとレナに向って叫ぶ。ガードの稼いだ時間は、二人が森の中へ駆け込むのに十分だった。

「馬鹿が！！」

デミルは丸腰のガードに向い、大鎌を振り下ろす。

「うおらああああっ！！」

気合いの声と共に、デミルの視界からガードが消えた。デミルの刃は虚しく空を斬る。ガードはただデミルの足身元へスライディングをして背後に抜けただけだった。まさか武器を構えた相手の懐へと飛び込んで来るとは思わず、デミルはガードの姿を一瞬見失う。草の上を滑りながら立ち上がったガードは、姿勢を低くしてオルレイに向い走り出す。オルレイとの直線状に突き立った"オブスキュア"をすれ違いざまに引き抜き、そのまま斬りかかろうとするも、

ガギン！！

「馬鹿にするなよ、オマエの相手はこの俺だろうが！！」

背後から迫る焼け付く殺気に耐え切れず、振り返ってデミルの大鎌を受け止めていた。

「デミル！！」

その人間を始末しておけ。私は女を連れ戻しに行く！」

冷や汗を拭い、オルレイはデミルに命令を下す。

「ああ、コッチはこの人間と楽しくやらせて貰うよ！！」

狂気的笑みを浮かべるデミルに力負けし、ガードは背中から地面に叩きつけられる。痛みで息が詰まったガードの顔に、大鎌が振り下ろされた。

オルレイは狂ったように暴れる魔族を見て、呆れるように息を吐く。

そして、ゲイルとレナを追い足を引きずりながら森の奥へ駆け出した。

第44話 世界の門を開く者

細身の赤い長剣と、巨大な黒い大鎌がぶつかり合う。

両者は互いの力に押されず、刃を弾かれた勢いを利用し、次の斬撃を繰り出す。

再び二人の刃がぶつかった時、突然デミルの姿がかき消えザードは姿勢を崩す。ザードの頭上へ瞬間移動したデミルは、ザードの延髄めがけ大鎌を振り下ろした。

ザードはデミルに視線もくれず、腰に下げたライフルをベルトに繋げたまま自分の背後へ撃ち込んだ。大きな銃弾はデミルの大鎌に当たり、空中でデミルの体ごと弾き飛ばした。

「があっ！！」

ザードはデミルが地面に落ちる前に、剣をデミルの体に叩きつける。首元から右肺を切り裂いたつもりだが、ザードの手元にはパンを切る程度の僅かな手応えを残し、剣はデミルの体を素通りした。デミルの体から血の代わりに黒いザラザラした霧が吹き出す。

「手応えが無いってのはやり辛いな。幽霊と斬り合ってる気分だ」

傷口から黒い霧をくすぶらせ、デミルは立ち上がる。見た目では分かりにくいだが、デミルには確実にダメージが蓄積されていた。対してザードは、かすり傷程度の怪我しか負っていない。

「くそっ、人間如きに・・・何故俺の動きについてこれる・・・？」

「さて、どうしてかな？」

笑って答えるザード。

巨大な大鎌を果物ナイフのように軽々と振り回したり、突然の瞬間移動をしたり。最初は物理法則を無視したデミルの戦い方に戸惑ったが、徐々にデミルの太刀筋が、癖が、そして性格が分ってきた。

動きを目で追っているようでは敵わないであろうが、ザードが持つ相手の"殺意"を明確に感じ取る能力によって、デミルは特別な敵でもなくなっていた。むしろ、殺意剥き出しで攻めて来るデミルはザードにとって戦いやすい相手とも言える。

ザードがそう考えていた、まさにその時。

不意に、デミルから向けられる"殺意"が消えた。

これはデミルに自分を傷つける意思が無くなった事を示しているが、デミルはザードに大鎌を向けたままで居る。ザードの命を奪うつもりは無いが、戦いは続けようという事なのか。

ザードはほぞを噛む。殺気が無くなってしまった以上、デミルの動きをザードの能力で先読みする事が出来なくなってしまったのだ。

(どういうつもりだ・・・何を企んでる・・・？)

まさか、俺の"能力"の事を知っているのか？)

様々な可能性を考えながら、ザードは"オブスキュア"を握り直し、デミルを迎え撃つ姿勢を取る

。



一方、ゲイルとレナは森の木々を押し分け、道無き道を走っていた。追ってくる筈のオルレイの姿は無い。走り続けている為、ゲイルもそうであるがレナの息は上がり苦しそうにしている。それを見てゲイルは足を止める。

「レナちゃん、ちょっとここで隠れてて。すぐに戻るから」

腰のハンドガンを抜きながらそう言った。

「・・・どう、・・・するんですか？」

分かりきっている事を聞いた。

「もちろん、オルレイを迎え撃つ。逃げていったエベネゼル兵が戻って来るかもしれないから、茂みに隠れてじっとしてて」

「・・・気をつけて下さい。もし万一の事があっても、今の私では」

心配そうな顔で、レナはゲイルの身を案じる。

今のレナでは、死者の魂を呼び戻す術が使えない。

レナは今、"石"を持っていないのだ。

「分かってるって。でも、もし俺が殺られても、生き返らせなくていいから」

「え・・・？」

当然の事のように断りを入れたゲイルに、レナは驚いた。

「何度も人生再チャレンジしようと思うほど、人生に未練は無いしね。

それに、君にこんな事を言うのは失礼なんだろうけど・・・命の価値は死の瞬間に決まると思うんだ。だから、俺は何度も死んで自分の命の価値を薄めるような真似はしたくないんだ」

ゲイルはレナの力を拒み、そして否定した。

全く迷いの無い笑顔を見せながら。

「別にレナちゃんの命を呼び戻す術を悪く言ってる訳じゃないよ。君の力を必要としている人もいるけど、必要としていない人も居るって言う、ただ当たり前の話さ。

ザードもそう思ってる筈だけど・・・でも案外、今回の件であいつの意見は変わったかもしれないな。

ま、あいつはとにかく俺はそーゆ事だから、頼むね」

そう言って、ゲイルは元来た道を走り出す。思いもよらぬ事を言われ、レナは身を隠す事も忘れて暫く立ち尽くしていた。



「何故お前らは"石"を、レナを狙う！？」

ザードの"オブスキュア"が、激しくデミルの大鎌とぶつかる。どう言う理由かは分からなかったが、攻撃の手を緩め出したデミルに向かい、ザードはここぞとばかりに攻めに出た。

「分りきった事を。当然、ベクタが魔力増幅機としてあの石を利用する為だろう。

あの石の力だけで一つの国が養われていたという話もあるんだ。同じように人間達への恵みの力としても、更なる領土拡大の為に軍事転用しても、絶大な力になると思わんか？」

「人間達・・・ベクタにとってはな。

だが、お前には何のメリットがある。人の幸せや、ベクタの軍事力に魔族のお前が関心を持つとは思えない。お前達は、俺達とまるで価値観が違うんだろ？

それと、レナも一緒に狙っている質問にも答えろ！！」

裂帛の声と共に、ザードは"オブスキュア"の力を解放し、真空と魔力で作られた不可視の刃をデミルに叩きつける。触れたものを引き裂く一陣の突風は、デミルの振るった大鎌に吹き散らされたが、砕け散った幾つもの魔力片がまるで散弾のようにデミルの体を突き抜けた。風が吹き去った後に、デミルは表情を歪め片膝を突いた。

「・・・良く分かっているじゃないか。俺達の事を・・・。

確かに、俺には魔力増幅器として"石"の価値は無い。あれは、俺にとって"鍵"さ」

「"鍵"、だと？」

これまで、ヘヴンガレッドの事は誰もが"石"と呼んでいた。それを"鍵"と呼ばれた事にザードは眉を寄せる。

ゆらり、と立ち上がり、デミルは視線を空へと向ける。

遠い、別の世界を望むように。

「ヘヴンガレッドは、レッドエデンへの扉を開く"鍵"だ。

そして、あの女は"鍵"の使い方を知る、唯一の存在だ」

ガキンッ！！

ザードは再びデミルとの距離を詰めて大鎌に刃を叩きつける。

「お前の言っている意味が分からない」

分からない。そう言いながらも、ザードの胸には嫌な予感が湧き出していた。

「分からないか？」

250年前、お前らが"レッドエデン"と呼ぶ異世界に、我々魔族を追いやった事は知っているな？

あの石があれば、この世界からレッドエデンへ繋がる扉を開く事が出来るのさ」

ギンッ！！

ザードに押されながらも、デミルは自分の真の目的について語る。

「それは・・・途方も無い話だな。簡単には信じられないし、信じたくも無いがな」

信じられない話ではあるが、魔族が人間と協力して行動している理由としては、納得の行くものではあった。

ザードの全身に、何とも言えぬ不安が染みるように広がってゆく。

「あの女が使う、死者の魂を呼び戻す術さ！」

「何がだ！？」

刃を滑らせ、ザードはデミルの大鎌を受け流しながら問う。

「つまり、あれは別の世界への扉を開く術だ。

この世界と死者の世界を繋いで死者の魂を呼び戻したように、この世界とレッドエデンを繋ぐ

事も出来るという訳だ！」

ザードの頭の中で、これまでの出来事が全て繋がった。

石を欲しがる人間達の行動と、魔族の繋がり。世界の成り立ちに、シャノンから聞かされた御伽噺。

そして、石の魔力増幅によって初めて発動する、レナのみが知る死者を呼び戻す術。

有り得る話だと思った。

その可能性に気付き、ザードは戦いのさなか背筋を凍らせた。

ガシャッ！

ザードの手元にデミルの大鎌がぶつかり、鈍く硬い衝撃が走る。

我に返ったザードが手元を見ると、デミルの大鎌は"オブスキュア"の柄を直撃していた。そして、ザードの手元から血の色にも似た赤い煌めきが舞った。

「な・・・！？」

自分の手が斬られたのではない。それは、"オブスキュア"の柄に嵌め込まれた、飾り石の破片だった。大鎌の先端が柄に嵌った石を砕いてしまったのだ。

ザードの剣は、魔導の仕掛けが施された剣である。剣は"時"の魔導で時間が止められており、刀身の刃こぼれや腐食といった事は起きない筈である。実際ザードは、今まで自分の剣が破損したという経験が無かった。

「てめえっ！！」

ザードにとって長年愛用している剣である。何故、壊れない筈の剣が傷付けられたのかという疑問が浮かぶよりも早く、ザードは密着したデミルを脳天から両断するように切り付ける。

ザードの剣が、デミルの体を素通りした。

今までのように僅かな手応えを感じる事も無く、デミルの体から黒い霧の血が吹き出る事も無い。空を斬る様に、ザードの刃はデミルの体をすり抜けた。

次の瞬間、それまでなりを潜めていたデミルの殺意が、再びザードに向かって吹きつける。

デミルの口元に歪んだ会心の笑みが張り付いているのを見て、ザードの胸に嫌な予感が走り抜けた。

「ッ！！」

声も無くザードはデミルから逃げるように飛び退いた。どちらかというとな攻撃を避ける、というより、その場から逃げる、といった動きだった。しかし、デミルはザードに追いつき、大鎌を横薙ぎに振るう。ザードは首をはねられる前に、長い髪と共にしゃがんでそれをやり過ごす。これ以上は逃げられる状態では無い。ザードは牽制の為デミルに向かい"オブスキュア"を突き出す。

しかし、切っ先は再びデミルの体を素通りする。先の一撃と同じ手応えの無さにザードが呆けていると、彼の牽制を無視したデミルは更に一步踏み込み大鎌を薙いだ。

その刃が、ザードの脇腹に食い込んだ。

「！！！」

大鎌はザードの脇腹に食い込み、そのまま振り抜かれるようにザードの身体は地面へと投げ出された。

二度、三度と地面を跳ねたザードが急いで体を起こそうとすると、体の下になった右腕がぬめった。

力が入らない。

うつ伏せになったザードの目の前に、自分の血溜まりが広がってゆく。

喉の奥が熱い塊に押し上げられ、呼吸が止まる。反射的に咳き込むと、喉からは血が溢れ出た。

自分が吐き出したものが何か分らないと言った様子で、ザードは目の前の赤い血溜まりを見る。

脇腹が引き攣れ、熱い液体が身体の内側と外側に溢れ出す。

自分の身体が水風船にでもなったような感覚だった。

そんな的外れな感想が、ザードが味わう初めての死の感覚だった。

「ご・・・ぐ・・・」

悪態をつこうと思ったが、ザードの口からは呻きと血溜まりしか出ない。大きくえぐられた右脇腹を抑え、ザードは身を起す。

「脆いもんだな、人間の身体は」

まるで失望したかのような沈んだ声で、デミルは空を仰ぎ言った。

「不思議そうだな、何で俺の体が斬れなくなったのか」

そう言って、デミルは足元に散らばる赤い石の破片を拾った。デミルが砕いた、"オブスキュア"の飾り石だ。

「お前、自分の剣の正体を知らないな？」

それは、ただの魔法剣じゃない。

この世界を構築する"物質"以外にも、俺達魔族の存在を構築する"思念"をも破壊する事が出来る、いわば魔族殺しの剣だ。

大昔、魔族と戦争をしていた時代に人間が作ったモノだろうな」

沈みかけた意識の中で、ザードはデミルの声に耳を傾ける。

「"物質"は刀身の時間を凍結した超硬刃で破壊し、"思念"は使い手の魔力を剣に組み込まれた魔導石で増幅、刃を介して思念体にぶつける・・・

つまり、どれだけ凄腕の剣士でも、そういった思念へ対する攻撃性を持つ剣が無ければ、我々魔族を傷付ける事は出来ないのさ。

そして、魔導石を失ったお前の剣も、これで魔族の俺にとってはガラクタ同然という訳だ」

そう言い捨て、つまみ上げていた赤い石の欠片を放り投げた。

薄れゆく意識の中でザードはようやく悟る。

デミルの殺気が突然消え失せたのは、彼の狙いがザードの命ではなく、ザードの剣に移っていたからだったのだ。

脇腹を押さえ、剣を支えにしてザードは立ち上がる。出血は止まっておらず、地面の血溜まりを更に広げて行く。

全身の感覚を失い、意識までも失いかげながら、ザードは地面から剣を引き抜き、口元の血を拭いた。

「俺の話は聞こえていないか？」

諦める。もうお前に俺を傷付ける術は無いんだよ」

ザードは全てを聞いて、理解していた。そして、それを信じるならば、ザードに残されたすべは、一つだけ残っている。

沈みかける意識を必死で維持しながら、ザードは懐に手を伸ばし、赤黒い石の収まった首飾りを取り出した。

それは、レナから預かっていた、ヘヴンガレットだった。



「お前・・・それ、は・・・！！」

デミルがそれに気付き目を剥く。ザードは残りの力を振り絞り、剣の柄で首飾りに収まった石を叩き割った。途端に、むせかえる程の濃い魔力が大気に充満する。

砕けた魔封じの石から現れたヘヴンガレットを、ザードは"オブスキュア"の柄に押し当てた。

ずるり、と、鉱石である筈のヴンガレットが、まるで生き物のように剣の柄に空いた穴へ流れ込んだ。歪だった石の欠片はオブスキュアの柄の中で綺麗にカットされた五面体に形を変える。ヘヴンガレットがザードのイメージをトレースしかのか、それはデミルに砕かれた飾り石と全く同じ形だった。

ドクン、と、オブスキュアに収まったヘヴンガレットは脈打つように蠢く。

そしてザードの意識は吸い込まれるように闇に落ちた。

紅く、黒々とした闇の中へ。

第45話 傷付け合う者達

かつて、ベクタの諜報員として暗躍していたゲイルは、戦場で戦った事が無かった。

人を殺す為の作戦に携わった事は幾度もあったが、直接手を下す事は無かった。いつも安全な場所から事の流れを把握し、人を操る事がゲイルの仕事であった。

つまり、ゲイルは自らの命を危険に晒した戦いをした事が無く、こうしてオルレイを迎え撃つ為、銃を手に木立に隠れている間も震えが止まる事は無かった。

(落ち着け。木立から姿を現しざまに一発、狙いは、コンマ5秒で付けられる。簡単な事だ)

訓練での射撃の腕には自信がある。しかし、頭は冷静でいられたが、体の震えは言う事を聞いてくれなかった。

ざさっ、ざさっ。

草木を掻き分ける音が近づく。ゲイルは懐の手鏡を木立から覗かせ、相手の姿を確かめた。

周りを警戒する様子も見せず、オルレイがやって来た。手には連射式のハンドガンが握られている。

オルレイが、かつての同僚であるという事に覚悟を鈍らせるが、だからと言ってゲイルには手加減をするだけの力量的な余裕は無い。オルレイを殺さなくては自分が殺され、レナはエベネゼルの、いや、ベクタの手に落ちる。

呼吸を息を静め、高鳴る心拍と同調させるように、タイミングを計る。

素早く半歩を踏み出し、隠れていた木立から身を乗り出すゲイル。タイミングは完璧で、二人を遮る樹木もなく、オルレイはゲイルの存在に気付いていない。

ぱむっ

軽い破裂音と共に発射された銃弾は、狙い違わずオルレイの側頭部に飛び込み、頭蓋の中で跳ね回った。オルレイは横に突き飛ばされるような形で倒れた。

「・・・・・・・・」

狙い通りとはいえ、あまりの呆気なさに罪悪感しか感じられなかった。

諜報員だった頃の自分にとって人を殺すという事は、書類にサインや指示を書く事によって行われた。そうやって何人もの人間の殺害を指示してきたというのに、大した罪の意識を感じた事は無かった。

だから、こうして直接手を下した時だけ罪悪感を感じる身勝手な自分に嫌悪を抱く。

書類にサインをする事も、銃の引き金を引く事も、同じ罪だというのに。

しかし、今はそんな事を考えている時では無かった。すぐにレナと別れた場所へ戻ろうと、後を振り向いたゲイルの背中に

オルレイの放った銃弾が打ち込まれた。

気を失っていたらしい。

うつ伏せで倒れたゲイルの横に、オルレイが立っていた。

頭から血を流しながら。

死んでいない事を示すように、オルレイが平然と言葉を発する。

「あの魔族との契約でな。少くくは死なない体にしてもらったのさ」

確かにゲイルの銃弾は、オルレイの頭部を打ち抜いていた。しかし、今は血の跡しか残っておらず、どういう訳か傷口は完全に塞がっていた。

「痛かったぞ」

そう言うと、オルレイは倒れ伏すゲイルの足を打ち抜いた。

「ぎッ・・・あぁっ！！！」

脳髄まで突き抜けた痛みに思わず声を漏らすゲイル。やや遅れて足だけではなく腹部も撃たれている事に気付く。最初に背中から撃たれた時の傷だった。

「女はどこだ？」

「は・・・軽々しく、秘密を喋るワケないだろ・・・」

俺達は何の仕事をしてると思ってんだ？」

ゲイルは、自嘲気味の、弱々しい笑みで答える。

「だろうな」

そう答えると分かっていたように、オルレイの反応は淡々としたものだった。

ゲイルから情報を聞き出す事を早々に諦め、オルレイは銃口をゲイルの額に向ける。

ゴシャッ

鈍い音と共に、オルレイの体が揺れて、崩れ落ちた。

その後にあった姿を見て、ゲイルは目を疑った。オルレイの背後には、太い木の枝を手にしたレナが立っていた。それでオルレイの後頭部を殴りつけたのだ。

「ゲイルさんっ！！」

木の枝を放り投げるとレナはゲイルの傷口を押さえつけ、そのまま治療呪文の詠唱を始めた。

「ばかやろっ・・・隠れてろって言っただろう！」

「でも、銃声と一緒にゲイルさんの声が聞こえたから・・・」

崩れ落ちていたオルレイが、起き上がろうと身をよじった。

「早く、逃げろ、こいつも普通じゃねえ、ザードの所へ戻れ！！」

「でも・・・！！」

ゲイルは自分の血で染まったレナの両手を掴み、振りほどく。その後で、苦悶と怒りの表情を張り付けたオルレイがゆっくりと立ち上がった。

「この、女っ！！」

驚いて後を振り向くレナ。オルレイの手がレナの髪を掴んだ。

「いや、あぁっ！！」

ゲイルは地面に落ちた銃を拾い上げ、レナに掴みかかるオルレイの足を至近距離から撃ち抜く。連射された銃弾は彼の膝を砕き、再び背中から地面に倒れる。

「この野郎ォ！！」

ゲイルは仰向けに倒れたオルレイに馬乗りになると、叫びながら急所という急所に銃弾を打ち

込み始めた。弾丸が打ち込まれる度、オルレイの体はビクンと跳ね、ゲイルの顔に返り血が吹き付ける。

その凄惨な光景をレナは声も出せずに見つめていたが、震える足に鞭打ち立ち上がる。
「ゲイルさん！！もうやめて！！」

レナはゲイルの背中から、その手に握られていた銃を押さえつける。



「もう、この人は……」

レナの泣き声で我に返り、パニックで過呼吸に陥りかけていたゲイルは、自分が跨っている死体に目を落とす。

流石に、ここまでやれば。

そう思うと、ゲイルの銃を持から腕の力が抜けた。同時にレナの手も、ゲイルの身体から離れる。

ビクンとオルレイの体が痙攣し、真っ赤に染まった手がレナの腕を掴んだ。

「！！！」

驚き以上に、恐怖が勝った。レナは竦みあがり、動く事が出来ない。

ゲイルは反射的にオルレイの口へ銃口を押し込んだ。

ばじゃあっ！！

一際大きな血潮が木々に飛び散った。

しかし、上顎から上を失ったオルレイは動き続けていた。見れば、飛び散った血や肉片がミミズのようにのたうち、次々とオルレイの体に寄り集まり、傷口を埋めてゆく。生理的な嫌悪を感じ、レナは目をそむける

「本気で・・・化け物になっちゃったか・・・」

散らばる頭蓋骨を肉のミミズ達が頭部へ運び、筋肉が絡み合うように再生してゆく。皮の剥がれたオルレイの表情が笑って見えたのは、気のせいではなかったであろう。

「レナちゃん、早く逃げて。何とか時間稼ぐから・・・」

木に身を預けながら起き上がるゲイル。レナの治療の術で、痛みだけは一時的に消えていた。

「でも・・・ゲイルさんは・・・！」

「大丈夫、きっと、ザードが助けに来てくれるから。」

悪いけど、俺じゃレナちゃんを守れそうにないから、一人で行って欲しい」

「でも、その怪我じゃ、・・・嫌です、私一人だけでにげるなんて！」

頑として譲らないレナに、ゲイルは嬉しそうに笑いかける。

「俺はね、レナちゃん。」

別に目的も無くブラブラ旅してるワケじゃないんだ」

唐突に、ゲイルがそんな事を話し始めた。

「俺は戦争で、家族も恋人も、何もかもを亡くしてるんだ。遠の昔に生きる意味も、目的も無くなっちゃってな。だからもう、生きてる意味ねーな、って思ってる」

ゲイルが話している間にも、頭を半分ほどまで再生させたオルレイが立ち上がろうとしていた。しかし、まだ身体が自由が利かないのかその仕草はままたらない。

「惰性で生きてるんだ。俺は。だから早く終わらねえかなっていつも思いながら、ザードと危ない橋ばかり渡ってるんだけど・・・

まあ、ココなら悪くないかなって・・・」

「悪くないって・・・何が・・・？」

ゲイルの言っている意味が分からない、分りたくないと思いつつも思いながら、彼女はその言葉の意味を問いかける。

「俺の旅は・・・そうだな、スカした言い方をすれば死に場所探しなんだ。

だから、レナちゃんを助ける為なら・・・この死に場所はそんなに悪くないんだ」

レナに向けたゲイルの笑みは、その場にあまりにも場違いなほど、優しい笑みだった。

それは自分を犠牲に守る者へ向けた最後の笑顔。

「・・・ッ！」

レナは息が詰まった感覚に襲われながら数歩あとずさり、後を振り向き全力で走り出した。もう、自分が何をすべきか分からなかったが、ゲイルの思いをふいには出来なかった。あんな顔をされては、彼の"邪魔"なんて出来る筈が無かった。

走りながら、レナは声を殺して泣いた。

カチン。

ゲイルは、再びオルレイの頭蓋を吹き飛ばそうと引き金を引いたが、銃は軽く揺れただけで弾丸は出なかった。

無然とした表情で銃を投げ捨て、ゲイルはポケットに仕舞った小さなナイフを取り出した。

「カッコつけちまったなあ。悪いけど最低限俺と相打ちにはなってもらうぜ」

歩み寄る血まみれの死体に、ゲイルは苦笑混じりにそう言った。



ザードの耳には何も聞こえず、全身には何の感覚も無く、五感の殆どを失ったかのような虚ろな感覚だった。

(なんだ、これは・・・)

唯一残された五感、視覚に映るのは、必死の形相で大鎌を振り上げ、ザードに飛びかかる魔族の姿。その映像には色が無く、スローモーションのようにゆっくりに見えた。

ザードの右手は、振り下ろされた大鎌を素手で掴んだ。手の平が深く裂けたが、ザードは痛みを感じない。驚いた表情を浮かべる魔族はザードに大鎌を引かれ、姿勢を崩す。引き寄せられた魔族の腕が、"オブスキュア"によって斬り飛ばされた。

魔族が上げる絶叫は、ザードの耳には届かない。

(夢か、これは？)

魔族がザードの目の前から飛び退いた。

(こいつは・・・魔族のデミルだ・・・。確か、まだ倒して無かったよな・・・)

ザードは飛び退くデミルへ追いつくように追撃をかける。

(何でこいつとやり合ってるんだっけ・・・？)

逃げ切れないと悟ったデミルは身をひるがえし、ザードを迎かえ撃つ。

(確か、護衛の仕事を引き受けて、それで・・・)

不意に脳裏で、ザードが唯一信頼を置き一緒に旅をしている男と、ザードが心を揺さぶられた優しすぎる少女の顔がフラッシュバックした。

「！！」

ザードの世界に色が戻る。

「おあああああああ！！！」

「！！？」

狂ったような叫び声に視線を上げると、片腕を失ったデミルが、残った腕で大鎌を担ぎ、飛びかかって来た。それはザードにとって夢の続きを見ているような感覚だった。

痺れるような感覚を感じ、手のひらに視線を落とすと、大鎌を掴んだ時の傷が口を開けていた。

違う、夢じゃない！

思うよりも早く、体が動いていた。

デミルの大鎌を受け止めるつもりで、ザードは"オブスキュア"を振るった。その時、ザードの左手に異様な違和感が生まれた。

ザードの手に宿る違和感は加速的に膨大な力へと膨らみ、"オブスキュア"を介してデミルの刃とぶつかった。その力は巨大で肉厚な大鎌を砕き、デミルの右肩から脇腹までを深く切り裂いた。

再び上がるデミルの叫びは、既に人間の声では無く、金属が擦れ合う様なキィキィとした雑音となってザードの耳を打った。

異様な力の正体はすぐに分った。"オブスキュア"に、見覚えのある色をした石が収まっている。ザードに気を失う直前の記憶が戻った。

"ヘヴンガレット"で、"オブスキュア"の力を増幅させているのだ。ザードがそれに気付いた途端、剣に宿った膨大な力が暴れ出した。

「ぐっ！？」

剣を握る左手から、"何か"がザードの中へ這入り込んで来た。その"何か"は、ザードの頭の中へ滑り込み、言葉という手段を使わず彼の脳へ何者かの意思を送り込む。

それは、この世における、あらゆる種の破壊衝動。力を持つ者が得られる快感。

それを、ザードの頭の中に幾度も刻み付けた。

「ああああっ！」

再び意識が闇に落ちかけ、ザードは血まみれの右手で自分の額を掴んだ。誰かに頭の中をグチャグチャに掻き回されているようだった。自分以外の意思がザードの中に入り込もうとしている。

動きを鈍らせたザードに、デミルが襲い掛かる。

片腕を無くし、体を深く切り裂かれ、血の代わりに黒い霧を噴き出しながら、怒り狂ったように叫ぶ。

「致命傷の筈だ！、

はらわたを抉った筈だ！！

人間の分際で、

どうして生きてられる！！？」

頭を抱えうずくまるザードは、デミルの人外の力を宿した拳によって地面に叩きつけられた。低い地響きと共に砂煙が舞い上がる。頭が破裂しても不思議ではない、高い建物から頭から飛び降りたかのような衝撃だった。

「ああぐ・・・」

デミルは弱々しく呻くザードの首を掴むと、その体を吊るし上げ、首を握り潰すかのような力で締め付けた。

それは、あまりにも軽率な行動だった。

ぞんっ

デミルの右脇腹を"オブスキュア"が貫いた。吊るし上げられたザードが、もとい、ザードに宿った"オブスキュア"の意志が、そうさせた。突き立てた刃を左に振り抜き、デミルの体は上下に両断される。驚愕の表情が張り付いたデミルの上半身は、ごろり、と地面を転がった。

「・・・余計な・・・」

デミルの腕から開放され、地面に這いつくばったザードが呻くように言う。

「余計な事をするなぁっ！！！」

ガヒインッ、と、ザードは"オブスキュア"の刀身を地面に叩き付けた。

「これはっ、俺の、体だっ！！ どんな時でも、オマエに貸してやるつもりは無いッ！！」

ザードは混乱した頭で、そう叫んだ。意識を取り戻してから、理解の範疇を超えた事ばかりが起きている。しかし、左手からザードの中に滑り込んできた"何か"の正体は、分かったような気がした。

それは、"ヘヴンガレット"の力で意志を持った自分の愛剣。それが、ザードの体を支配しようとしている。恐らく、彼が気を失っていた間にデミルと戦っていたのは、ザードの体を支配した"オブスキュア"だったのだ。ザードには、それが分かった。

"オブスキュア"の支配を否定した途端、頭に入り込んでいた異質の存在が消え失せた。左手の"オブスキュア"には、膨大な力が安定して宿っている。

体の自由を取り戻したザードがデミルの姿を探すと、うつ伏せに倒れていた上半身だけのデミルが、ふわり、と宙に浮かび上がる所だった。全身の輪郭を幻のように霞ませ、激しく息をしていた。魔族としての力を激しく消耗し、"こちら側"の世界で人間の姿を保つ事が困難になっているのだ。

「許さんぞ、・・・ザード=ウォルサム・・・」

憎悪のこもった言葉を投げかけるデミルに、

「ああ・・・？」

ザードは、益々光を増した獰猛な視線を向ける。デミルは悔しそうに唸ると、突然身をひるがえす。

「今度会った時は、必ず殺す！！！」

そう宣言すると、上半身だけの体は森の中へと飛び去った。

「逃がす、かッ！！」

オブスキュアを腰だめに構え、魔力を込める。魔導を扱えないザードの唯一の遠距離攻撃。魔法剣"オブスキュア"を振るう事によって生まれる、すべてを引き裂く一陣の紅い突風。

いつものように目分量の魔力をオブスキュアに叩き込み、剣を振るった。

しかしその力は、"ヘヴンガレット"によってザードの想像をはるかに上回る力に増幅され、開放された。

ザードの前方数十メートルの空間が、真横に両断されていた。全て同時に、森の中の木々は大人の頭ほどの高さで切断され、一斉に同じ方向へ倒れ込む。一瞬にしてザードの目の前から森が消えた。残るのは、切り株と呼ぶには長過ぎる、人の背丈ほどの無数の幹。

ザードの斬撃は森の木々だけでなく、逃走するデミルの背を捉えていた。木々と共に両断され、デミルの体は黒く染まり、灰になって四散した。ザードの瞳がそれを見届けた途端、デミルだったモノは、倒れた木々の下敷きになり、風に舞って消えた。

「う・・・」

左手に握られた"オブスキュア"を見て、ザードは絶句する。

とんでもない力を手にしてしまった。

自分でやった事とはいえ、ザードはそのでたらめな力に戦慄を覚える。そして、その力を制御出来ている自分に驚き、思わず口元が笑みに歪む。

はっ、と気づき、ザードは慌てて自分の怪我の確認をする。大量の血で汚れていたが、何処も怪我をしていなかった。デミルに殴り飛ばされた時は、地面に叩きつけられ、全身がバラバラになったかのような衝撃を受けた。デミルの大鎌を素手で止めた時、確かに右の手のひらは大きく裂けた。

気を失う前の事を思い出す。ザードはデミルに脇腹を斬り裂かれていた。自分でも死を覚悟した致命傷だった筈だ。しかし、服が破れ血で汚れてはいたが、脇腹に傷口は無かった。

「まさか、これもコイツのお陰か・・・？」

ザードは、今も次々と体に増幅した魔力を送り込んでくる"オブスキュア"を、その柄に収まる"ヘヴンガレット"を見つめた。"ヘヴンガレット"は、ザードの体の魔力循環に取り込まれており、意識せずとも、消耗した魔力や体力、肉体の回復を急速に促していた。

「なんて力だ・・・無茶苦茶だ・・・」

暫くの間、ザードは自分と同化した異質な力の感覚を確かめる。

それは、とてつもなく強大な力だった。

「・・・」

この力があれば・・・」

一言だけ、感情の無い呟きを漏らす。

力に魅せられ、取り込まれそうになる。

しかし。

「！！」

そうだ、レナに、ゲイルは・・・！？」

先に逃がした二人の仲間の事を思い出す。

目を覚ましてから混乱していたとはいえ、ザードは大切な二人の仲間の事を忘れていた。

「クソッ！」

傷が跡形も無く消え失せた右の手のひらで自分の頬を叩いた。

ザードは切り開かれた森の中を駆け出す。

晴れ渡っていた空はいつの間にか灰色の重い雲に覆われ、今にも落ちて来そうだった。

第46話 全てを失う前に

薄暗い森の中。

ザードの目の前に、二人の男が横たわっていた。

一人は人の形を何とか留めた死体。顔の判別は出来なかったが、着ている服からレナとゲイルを追っていたオルレイだと判断出来る。

胸の真ん中に、銀色のナイフが突き立っている。魔導を扱えない者でも魔力を断ち切る事が出来る、特別製の銀ナイフだ。これでゾンビやゴーレムも倒せるぜ、とゲイルが魔導具屋で大枚を叩いていたのを覚えている。

そして少し離れた場所に、ゲイルが倒れていた。

体を何箇所も撃ち抜かれ、周りの土には大量の血が染みている。

「・・・ゲイル。

おい、起きろ」

乱暴にゲイルの肩を揺さぶる。返事は無く、体は冷え切っていた。

ザードは力無くゲイルの横に腰を落とし、呆然とうなだれる。時間が経つのも忘れ、暫くそうしていると

「・・・遅えよ・・・」

ゲイルが掠れた声で呟いた。ザードが飛び上がり、ゲイルに呼び掛ける。

「ゲイル！！

良かった、大丈夫か！！？」

「大丈夫なワケねーだろ・・・」

苦笑いでそう返した。

「お前が遅いから、俺一人で片付けちまったぞ・・・」

「ああ、すまない。そんな事より、今すぐレナを連れて来るから・・・！」

駆け出そうとしたザードの袖を、ゲイルが掴んだ。

「待て・・・念の為だ・・・

お前に渡す物がある・・・」

そう言って、ゲイルは腰に下げた小さなバックから一冊の手帳を取り出し、ザードに手渡した

。

それは、ミルフィストという国の市民証書だった。

[エアニス = ブルーゲイル]

そこには、ゲイルのフルネームが記されていた。

しかし、その名の隣に貼り付けられた写真はゲイルの顔ではなく、長い銀髪の男。ザードの物だった。

「な、何だよ、コレ・・・？」

「お前、国籍も市民権も何も持ってないんだろ？」

戦争が終わったら、どうするつもりだ？

お前の分の市民証書を偽造して、くれてやるつもりだったんだよ」

驚いて顔を上げるザード。まさかゲイルがこのような物を用意してくれているとは思ってもみなかった。

「まだ偽造情報が揃って無くてな・・・。

今は俺の名前で登録してるが、もう2、3手間かければ、ちゃんとお前の名前で証書が偽造できる。

でも、ひょっとしたら・・・俺にはもう、それが出来ないかもしれない。

ま、俺の名前が気に入らないかもしれないが、コレが使えないという訳じゃない。

くれてやるから、一応持っとけ・・・」

そこまで喋ると、ゲイルは苦しそうに咳き込み、血を吐いた。

「喋るな！！

待ってろ！！レナを連れて来る！！

コイツは預かっておくが、お前の名前なんて要らないからな！！」

そう言って、ザードは駆け出した。

「もう一つ！」

ゲイルが喉を絞るようにして、叫んだ。

「レナちゃんに・・・俺のエゴで辛い思いをさせてゴメンって、伝えてくれ・・・」

力なく笑い、ゲイルは言った。

ザードにはゲイルの言葉の意図が分らなかったが、今は詮索している時ではない。

何度か頷き、森の奥へ駆け出した。

ゲイルは胸元から潰れてしまった煙草の箱を取り出し、唯一折れていなかった一本に震える手で火を付けた。

紫煙を胸いっぱい吸い込み、ゆっくりと吐き出す。

それは、これまで吸った煙草の中で一番美味しい味がした。

「・・・ふう

まあ、悪くない。悪くない、最期だ・・・」

満足気にそう呟き、ゲイルは眠るように目を閉じた。



「レナ！！！」

ザードはレナの名を呼びながら、森の中を走る。

太陽は厚い雲に隠され、ただでさえ暗い森は一層視界が悪くなっていた。木の根に足を取られ

ながらも、ガードは必死に走りレナを探した。

「ガードさん！！」

ガードの名を呼び、レナが茂みの間から姿を見せた。足を止めて振り向いたガードに、レナは駆け寄りその胸に顔を埋めた。

「良かった・・・本当に良かった、無事で・・・」

消え入りそうな泣き声で、レナはガードの服を掴み額を彼の胸へ押し当てる。その手と肩は小さく震えていた。

ガードは震えるレナの肩に両手を回し、安心させるように言う。

「ああ、俺は平気だ。

全部終わったから・・・」

「ごめんなさい・・・また、私のせいで、こんなに・・・」

ガードは首を横に振る。

「レナが謝る事じゃ無い。

・・・いや、むしろ俺は感謝している。

今回の事で、ハッキリと分かったから・・・」

ガードは今回の件を通じ、自分の変化に驚いていた。

自分以外の人間など、どうなるかが知った事ではない。そう思い続けてきたガードが、それこそ自分の命すら顧みず、必死で他人の為に剣を振るったのだ。

レナとゲイルが、それだけ自分にとって大切な人間、仲間であるのだと、気付かされた。

いつの間にかガードの心に居場所を作ってしまったレナとゲイルを若干疎ましく思うも、不思議と悪い気にはならなかった。二人の為なら自分の心の幾ばかを裂いて提供するのでもいいだろう。それと同じ様に、自分が二人の心の何処かに居られるのであれば。

レナはガードの言葉意の味が分からず、小首を傾げていたが、

「いや、何でも無い。

ほら。ゲイルを引っ張り起して、村に帰ろう」

ガードの優しい笑顔を見て、彼女は今、泣くべき時では無いと感じた。

こぼれていた涙を拭い、ガードの顔を見上げる。

「はい！」

まだ少し涙で濡れた顔で、レナは本当に嬉しそうに微笑んだ。

その直後

森の中に銃声が響いた。

ガードの胸元に硬い衝撃が走り、息が詰まる。痛みの元へ手を伸ばすと、ローブの下に着ていた防弾服に、焼けた銃弾が食い込んでいた。

銃弾は前方から飛来し、ガードの胸を打った。しかし目の前にはガードに肩を抱かれたレナが居る。

何が起きたのかガードが理解したのは、

背中を撃たれたレナが、自分の足元へ崩れ落ちた後の事だった。
銃弾はレナの体を貫き、ザードの防弾服で止まったのだ。



ザードは何の表情も浮かべず、足元でうつ伏せに倒れたレナを見下ろす。
レナの背中に空いた小さな穴から、赤い染みが広がり始めた。
突然思考が絡まり、ビクンとザードの体が震えた。
肺が壊れたかのように息が吸えなくなり、全身の筋肉が収縮しながら震え始める。
感情が、赤い闇に飲み込まれてゆく。

「馬鹿者が！！女は殺すなと言っただろうが！！！」

耳障りな怒号が聞こえた。

森の中で、気配が一つ、また一つと現れた。デミルの出現と共に逃げ出し、姿を消していたエベネゼルの兵隊達。レナを撃った狙撃兵を怒鳴りつけたのは、オルレイと一緒に居た太った軍人だ。男は露骨にイラついた様子で、被っていた制帽を握り潰す。

「ああ、もういい！！

女はこれ以上傷つけるな！！

男の方を早く蜂の巣にして 」

軍服の男は、言葉を最後まで放つ事無く、上半身を破裂させて肉片と血霧を撒き散らした。銃を構えた周りの兵士達は、何が起きたのか分からずに凍りつく。

彼らの囲みの中心には、銃弾に倒れた少女と、その傍らに細身の紅い剣を抜いた剣士が居た。その剣士の切っ先は、震えながら破裂した男の方を向いていた。

「 おあ あっ ああああああああッッッ ！！！！ 」

喉が張り裂けんばかりの叫びを上げ、長い銀髪を掻き耨る。

視界が真っ赤に染まり、全身の筋肉が縮みあがり、耳には何の音も届かなくなる。

ザードの気は振れていた。

"オブスキュア"の意識を受け入れたザードは、感情が磨耗し、無くなるまで破壊の限りを尽くした。周囲の木々は殆ど薙ぎ倒され、木屑となって転がっている。

数十人居たエベネゼル兵達は、数分と持たずたった一人の相手に全滅させられた。しかしザードの気は収まらず、彼らの身体を何度も何度も斬り付け、叩き潰した。周囲の土や木屑に飛び散った赤い染みだけが、彼らが居た唯一の痕跡だった。

森が無くなり、開けた空からひとつ、またひとつと雨粒が落ちてきた。雨粒は赤い染みと混ざり合い、土に沈んで消える。



「レナ、今度こそ、終わったよ。

全部、終わらせてやったから・・・今度こそ、帰ろ」

横たわるレナを抱きかかえ、ザードはそう呼びかけた。

泥で汚れた彼女の頬を血で汚れた手で拭うと、レナの瞼が僅かに震えた。

ゆっくりと彼女の手が伸び、ザードの頬を撫ぜた。

「 ない で 」

「・・・え？」

今にも消え入りそうな声に、ザードは耳を寄せる。

「 もう誰も、 傷つけないで・・・ 」

ザードの頬に触れていたレナの手が離れる。

その手は、ザードが浴びた兵士達の返り血で赤く濡れていた。

「それはきっと、ザードさん、あなた自身も傷つく事だから・・・」

ザードは首を横に振る。

「構わないよ、お前の為だったら、俺はいくらでも剣を振るう・・・」

いくら傷ついても、俺は倒れないから・・・」

ザードは初めて人の為に剣を振るえる気がした。彼女の為なら、剣を捧げても構わないと思った。

どうしようもなく、優しすぎる。

そんな彼女なら、自分の力を正しく使ってくれる。

そう思った。

しかし

「あなたの剣は、きっと私を傷つけるわ」

レナの言葉に、ザードは凍りついたように息が止まる。

「ザードさんが私の為に戦ってくれても・・・」

それは私にとって辛い事でしかないの」

レナの言葉に愕然とするザード。

これは、ザードのエゴだった。ザードはそのエゴを、全てをレナに背負わせようとしているだけなのだ。

「そうか・・・お前は、そんな事を望んだりはしないよな・・・」

現に、俺のせいでレナは・・・

ごめん・・・

ごめん」

ザードは血で汚れたレナの手を握り、頭を垂らし謝った。

レナはゆっくりと首を振る。

「ううん。これは、ザードさんのせいじゃないわ・・・」

これは、私の罪。

人の命を操るなんて事をしたから、神様が、怒った のね・・・」

レナが浮かべる表情は自嘲の笑み。

ザードは、命を操る事の倫理についてレナが悩んでいた事を思い出した。

レナの表情から、一瞬力が抜けた。ザードはレナを揺り起こし、意識が朦朧としている彼女に向かい叫んだ。

「神様なんて居やしない！！

それに、レナは沢山の人に望まれた存在だ！！

この戦争から、理不尽な死から沢山の人を救い出したんだろう！

レナは何一つ間違えた事はしていない！！！」

必死に呼びかけるザード。

瞼を閉じ、レナはザードへ微笑んだ。

「だから……！」

ザードの言葉はそこで途絶える。続きは声にならなかった。

ありがとう

レナの唇がその言葉を形作ると、彼女の体は小さく息をついたように、ザードの腕の中へ沈み込んだ。

雨に濡れ、冷えてゆくレナの肩を抱き、ザードは空を仰いだ。

灰色の空から落ちる雫は、二人の身体へ降り注ぐ。

雫はザードの長い髪を濡らし、額を流れ、目尻から流れ落ちる。

泣いているようにも見えたが、ザードは涙を流してはいなかった。

その胸に宿っていたのは、この世界に対する憎悪。

瞳に確固とした意思を宿してザードは空を睨み続けた。

シャノン達がザードとレナを見つけたのは、それからもう暫く後の事だった。



「ゲイル君の遺体は、我々の村の墓地へ丁重に埋葬させて貰った。

……出来る事なら、彼の帰るべき場所で吊ってあげたいけど……彼の素性が分からない以上、これで勘弁してほしい」

翌日の昼過ぎ。

ザードの泊まる屋敷へ、シャノンと3人の魔導師が彼の様子を見に訪れていた。

ザードの血と泥にまみれていた肌と髪は綺麗に洗われ、ボロボロだったローブも村で貰った新品に着替えられている。いつも通りの無表情でベッドに腰かけ、疲れた様子は見受けられない。

普段通りの、ザードだった。

「ありがとう。

奴も、それで十分だと言ってくれるさ。

それと、レナの事は」

「分かってる。レナちゃんは、我々が責任を持って、彼女の村まで送り届ける」

「ああ、頼む」

そこで、ザードとシャノンの会話は途切れた。

シャノンは、ザードにどのような言葉をかければ良いのか分からなかった。ザードの表情から

、彼が何を思っているのか読み取る事が出来なかったのだ。何か言わなければ、という思いから、シャノンには重い口を開く。

「その・・・こうなってしまったのも、我々の力不足が原因だ・・・」

正直、君に、どう謝ればいいのか・・・分からない・・・」

「あんたは悪くない。謝る必要も無い。

悪いのは、ベクタとエベネゼル・・・いや、この戦争、この世界そのものだ」

普段と同じ様に振舞うザードだったが、その目は暗く淀んでいた。

ザードの変化にシャノンは目を伏せると、ふと思い出したかのように言った。

「そうだ・・・まだこれを渡していなかったね。報酬の"ノア"だ」

シャノンが鞘に納まる一振りの剣を差し出した。

そう、ザードは元々この剣が欲しくて、シャノンからの依頼を受けたのだ。人の精神のみを切り裂く、決して人の身体を傷つけないという魔法剣。これがあれば、無闇に人を殺す事無く戦えるかもしれないと思った。

しかし、既にザードの考え方は変わっていた。

ザードは傍らに立て掛けた"オブスキュア"を抜くと、シャノンの持った"ノア"の刀身を横に屈いだ。

パキン、と。あまりにも軽い音を立てて、"ノア"は鞘ごと断ち切られた。その断面を呆れた顔で見ているシャノンに向かって、言う。

「もう、そんな物は要らない。剣を向ける相手は全て殺す」

「・・・そうかい」

シャノンは肩を竦めて、魔法剣の残骸をテーブルに置いた。

剣を収めると、ザードは自分の荷物を肩に掛けて立ち上がった。そしてシャノン達の間を横切り、部屋の戸口に立つ。

「世話になった」

「・・・これからどうするつもりだい？」

一瞬の間を置いて、ザードはシャノンに背を向けて言った。

「俺が、この腐った世界を変えてやる。

・・・この力があれば、世迷言でもないだろう」

ザードは腰に吊った"オブスキュア"を握り、断言した。柄には今も、"ヘヴンガレット"が収まっている。

「・・・いくら強大な力があっても、1人じゃ何も変えられないよ」

「やってみなくちゃ分からない」

ザードの決意は固い。シャノンは大きく溜息をついた。

そして、これまでの諭すような口調が、厳しい口調へと変わった。

「残念だけど、我々は"石"を守る義務がある。

その"ヘヴンガレット"は、置いて行って貰うよ」

「用が済んだらちゃんと返すさ」

「そういう訳にはいかないよ」

シャノンと共にやって来た3人の魔導師が、ガードをゆっくりと取り囲んだ。

「だったら、止めてみればいい。

この力を使ってお前達を斬り殺す事に、俺は躊躇しない」

暫しの間、部屋に緊張が張り詰める。

シャノンは両手を上げて、大きく溜息をついた。

「分かったよ・・・」

「族長！！」

ガードの脅しにあっさりと屈した村の長に、村人達は非難の声を上げた。シャノンは諦めきった口調で、しかし、何かに期待するかのような眼差しで、ガードを見る。

「実力でも説得でも・・・もう君を止められるとは思えないからね。

好きなようにすればいい。君にはその儀がある筈だから・・・」

「・・・すまない」

最後にその一言を残し、ガードは静かに扉を閉めて屋敷の外へ出た。

雨が強くなっていた。

昨日から降り続く雨は、止む気配は無い。

ガードは雨除けのマントを羽織り、深々とフードを被る。

— もう誰も傷つけないで —

ガードの頭の中で、レナの言葉が反芻していた。

ガードがこれからしようとしている事は、彼女の言葉に反する事である。

「でも、こうでもしないと、もう収まらないんだよ・・・！」

目深に被ったフードの下で、ガードは声を震わせた。

ガードがこれから成すべき事。

それは、復讐と力による世界の調律。

「まずは

エベネゼルだ」

空を睨み、ガードは歩き出した。



その後

ベクタを始めとする大国の有権者達が次々と不測の死を遂げるようになった。主に軍関係の権力者達を次々と襲った不幸は、様々な形に偽られ彼等の死と共に世間へと公表され、あるいは何事も無かったかのように歴史の闇へと葬られた。

同じ頃、各地の戦場では不自然なまでの戦力の拮抗が続き、各国の疲弊は急速に増大し、極限に達した。指導者と戦う力を失った国々は、いつしか戦う目的すらも失っていた。

20年以上続く戦争が突然の終結を迎えたのは、
あの日の出来事から丁度一年後の事であった。

第47話 十字路

エアニス達がオーランドシティを立って1週間。

あれだけ暑かったというのに、砂漠の南に横たわる山脈を越えた途端、辺りの空気はとても過ぎやすい涼しげなものへと変わった。

「ここから標高の高い土地が続きますから、どんどん寒くなってゆきますよ。

季節も秋の終わりですし、目的地のバイアルスへ着く頃には、真冬並みの寒さになるでしょうね」

「うへえ・・・」

トキの解説に、チャイムは両肩を抱えて身震いする。

オーランドシティで修理を終えた車は、快調な排気音と共に寒々とした草原を横切る一本の街道を走っていた。

この1週間は車でひたすら走っているだけだった。ぽつり、ぽつりと会話はあるものの、4人は基本的に黙って窓の外の風景を眺めている。

旅を始めた最初の頃は、沈黙に耐えられないタイプのチャイムが色々と話題を作り、会話が絶えなかったが、それが何週間も続いていると流石に話す事も無くなってしまふ。

しかし、今では4人の間に沈黙が落ちていても苦にはならない。いつの間にか、会話を続けないと気まずい、と感じるような間柄でもなくなっていた。

「あ、飛行機雲・・・」

「・・・ほんとだー。珍しいわね」

「何処の国の船でしょうね？」

「・・・・・・・・」

そうしてまた暫く、4人は黙って外の景色を眺め続ける。

「エアニス、止まって！」

「あ？」

突然後を振り向き、チャイムが声を上げる。

ハンドルを握るエアニスは車を街道の端に寄せて、ゆっくりと車を止めた。

そこはエアニス達が走ってきた街道と、別の街道が交差する十字路だった。大きな街道の交わる場所は宿場町となっている事が多いが、この場所には二本足の大きな立て札が立っているのみで他には何も無く、何処までも草原が広がっているのみだ。もう半日も歩けば大きな街があるので、ここで留まる者は居ないのだろう。

車を降りたチャイムは、小走りで街道の交わる場所まで戻り、その傍らに佇む立て札を見上げた。そこには交差する二本の街道の名前が記されていた。一本はチャイム達が走ってきた"オーランド51号線"。大戦中に軍が命名し、そのまま定着してしまったような情緒の欠ける名前だ。そしてもう一本の街道は、チャイムに馴染みのあるものだった。

「リーネ街道・・・こんな所まで続いているんだ・・・」

チャイムが何とも言えない不思議そうな表情で、そう呟いた。

「この道がどうかしたのか？」

エアニスが煙草に火を点けながら問いかける。

「ああ。確か、エベネゼルまで続いている街道ですね？」

「うん、そう」

気付いたトキがそう尋ね、チャイムは頷いた。

立て札には、街道の名前と、その先に続く街までへの距離が刻まれている。ここからエベネゼルまでは、歩いて行けば3ヶ月以上かかる距離だった。

「エベネゼルのあたしの家はね、このリーネ街道沿いにあるんだ」

「へー。じゃあこの道ずーっと歩いて行けばお前ん家まで行けるのか」

「そーゆーコトね。遊びに来る？」

「あ、ああ？ ああ、また今度な・・・」

チャイムは笑って、草原の丘に消える街道を眺める。随分と長く旅をしてきたというのに、この道を真っ直ぐ進めば家に帰れてしまうというのが不思議な感じだった。最も、徒歩では3ヶ月もかかってしまうが。

「何か、遠くまで来たんだなー・・・」

チャイムは感慨深くつぶやいた。

エアニスは、チャイムの横顔を見る。

それは気のせいだったかもしれない。

エアニスには、チャイムが寂しげな表情を浮かべているように見えた。



ザード=ウォルサムがエルカカの村を後にして最初に行った事は、エベネゼルへの報復だった。ヘヴンガレッドの力を得たザードは、単身エベネゼルの宮殿へ乗り込み、国王をはじめとする国の高官達を殺害した。

オーランドシティで出会ったチャイムの師、クラインは、その時ザードに斬られたのだ。

そしてエベネゼルと協力関係にあった世界一の軍事大国、ベクタの中枢にも単身乗り込み、これも壊滅へと追いやった。

彼等の前に現れたザードには、どんな斬撃も、どんな砲撃も意味が無かった。斬撃は赤い長剣により斬り伏せられ、砲撃は剣の切っ先から現れた魔力障壁により全て防がれる。不意を突きようやく彼等の攻撃がザードに届いたとしても、どんな傷もまるで時計を巻き戻すかのように塞がってしまう。

それは、悪夢が具現化したような存在だった。

目的を果たしたザードは、各地で惰性的のように続けられる戦争に介入し、優勢である勢力を襲い、意図的に国同士の戦力を均等に保つよう仕向けた。

結果、何処の国もいつまで経っても戦いに決着が付かず疲弊して行き、同時に戦争の火種となる人物、資源、思想までもをザードはこの世から排除していった。

やがて多くの指導者と争いの意味を失った国々は、ようやく世界は戦争の目的を失っている事に気付き、20年続いた戦争は終焉を迎えた。

世界は、たった一人の男の歩みを、最後まで止める事ができなかったのだ。

それが約1年前の事である。



強い風が吹き抜け、エアニスの髪が舞った。

風になびいた琥珀の髪が、日の光を浴びて刹那銀色に光った。エアニスは自分の髪のひとつさを掴み、確かめるように見つめる。

今のエアニスの髪は、魔導で琥珀色に染められている。

全ての戦いを終え、再び生きる目的を失ったザードは、ゲイルに渡された一冊の手帳を持ってミルフィストへ向った。

その手帳、ミルフィストの市民証書を使い、ゲイルの名を騙り生きて行く事を決めた時、ザードは自分の名と、自分の姿の象徴でもある銀の髪を捨てた。

エアニス=ブルーゲイル。

それは、ザードが心を許した最初の仲間の名であり、今ではザードの名前でもあった。

「・・・すまなかったな」

昔の事を思い出していたエアニスは、そう呟いていた。

むすっと怒ったような顔で自分を見上げるチャイムに気付き、エアニスは思わず自分の口元を押さえた。

それは彼女に対して何度繰り返した言葉か。こうも同じ言葉を繰り返されれば、その意味も思いも薄っぺらなモノと捉えられてしまう。

エアニスはチャイムと目を合わせるが、すぐに気まずそうに視線を落とした。

戦時中、エアニスがチャイムの師や仲間を傷付けてしまった事については、チャイムなりにエアニスの事情を理解し、彼女の中では折り合いを付けて貰っている。しかしエアニスはまだ自分を許す事が出来ず、思わずそのような言葉が口を突いてしまうのだ。

ばつの悪そうな表情で視線を逸らせたエアニスに、チャイムは腰に手を当て、呆れたように溜息をついた。チャイムは故郷に続く街道の先に視線を戻し、

「でも・・・正直、アンタの話聞いても、何処か実感湧かないのよねー・・・」

「・・・どんな所が？」

「んー・・・なんと言うか、スケール大きすぎ」

エアニスの話だと、彼はたった一人で20年以上続いていた戦争を終わらせたという事になる

。たった一人で幾千もの兵士を斬り捨てた"月の光を纏う者"の伝説。

あれは、嘘偽りの無い真実だというのだ。

「全部、"石"の力のお陰だ。あれが無ければ、俺は何も出来なかった」

エアニスは腰に下げた剣、"オブスキュア"に手をかける。

戦いの後、ザードは再びエルカカの村へ訪れ、シャノンへ"ヘヴンガレット"を返した。だから今の"オブスキュア"の柄には、街の魔導具屋で買った赤色をした魔導鉱石が収まっていた。お金で買える最も強力な魔力増幅器だが、その力はヘヴンガレットに比べたら、まじない程度の効果しかない。かつては一振りでも何十人も人間を斬り飛ばしたエアニスの紅い風の斬撃も、今ではやや離れた相手に、小さなかまいたち状の魔力をぶつける程度の事しか出来なかった。

ヘヴンガレットの力と繋がっている間なら、どんな大怪我でも治癒能力を増幅する事でたちどころに治ってしまうという常識を逸した能力も、今は無い。

それでも、ザードの"オブスキュア"は吊るし売りされている魔法剣に比べれば桁外れの力をもっているのだが。

「俺は、"石"の力の恐ろしさを知っているからな。

だから、レイチェルの話を信じて、こうしてお前たちに付き合っているんだ」

エアニスはオブスキュアを握り締め、かつてそこにあった強大な力の感触を思い出す。

エアニスは、石の力を操りながらも、その力に溺れる事を恐れていた。事実、エアニスはこの世界を憎み、"石"の力を使い、世界を壊してしまおうと考えた事もあった。

しかし、レナやゲイルのような人間も居るという事を知ってしまったエアニスには、世界を憎み切れなかった。

「この旅は、俺が話した戦いと同等の重みを持っているんだぞ。

実感が湧かない・・・なんて言っていないで、心構えくらいはしといてくれよ」

「う・・・そうよね・・・わかった」

緊張感を帯びた声色でチャイムは頷く。彼女は改めて自分の関わっている事の重大さを認識しようとしたが、やはり今ひとつ実感は湧かなかった。

「まあ、旅も終わりに近づけば、実感も湧いてくるんじゃないか？」

「・・・出来れば誰とも争う事無く、平穏無事に旅が終わって欲しいわ・・・」

「無理だろ。お前トラブル体質みたいだし」

「アンタに言われたくないわよ！！」

チャイムが声を荒らげ抗議する。

それを見ていたトキは、立て札に寄りかかりながらくく、と笑いを噛み殺していた。

『何がおかしい！？』

トキの態度が癪に障ったエアニスとチャイムが、声をハモらせトキに突っかかると

「いや、すみません。

オーランドでの一件以来、お二人の関係が気まづくなっているように感じていましたが・・・

「どうも、僕の取り越し苦労だったようですね」

そう言って、安心したようにニコリと微笑んだ。

「う・・・」

「む・・・」

エアニスとチャイムはお互いの顔を見合わせ、毒気を抜かれたように振り上げた拳を下ろした。

「それにしても、不思議なものですね。

「"石"を持って旅をしていた私とチャイムが、別の"石"を持っていたエアニスさんに偶然助けられるなんて・・・」

レイチェルは風に流される髪を押さえ、そう呟いた。

それに関しては、ここにいる4人全員が同感だった。

エアニスはレイチェルの言葉に、少しだけ躊躇った後こう言った。

「・・・ひょっとしたら、俺達を引き合わせてくれたのかもしれないな」

「それは・・・」

「レイチェルの親父が・・・シャノンがさ」

それは、彼がレイチェルと出会った時から思っていた事。

その言葉にレイチェルは驚きの表情を見せてから、寂しそうに微笑んだ。

エアニスは柄にも無い事を言ったな、と後悔し、そっぽを向いた。

地面に座り込み、地図で道を確認していたトキが、

「よくよく考えたら・・・この街道はエベネゼルにも、ミルフィストにも、エルカカの近くにも続いていますね。

ひょっとしたら・・・レイチェルさんとミルフィストで出会っていなかったとしても、僕達はシャノンさんに導かれ、ココで別の出会い方をしていたかもしれませんか」

トキの適当な言葉を鼻で笑いつつも、そういう現在もあつたのかもしれないな、と思った。誰かの意思がないと、このような偶然で"石"に関わった人間が出会う事など無いような気がした。

「・・・そうだとしたら、シャノンに礼を言わなきゃな」

「そうですね・・・」

レイチェルの帽子をぼん、と叩き、エアニスは煙草の煙を吐き出した。



人の出逢いとは、何とも不思議なものだとエアニスを感じた。

全ては"偶然"から始まり、その積み重なりが"必然"を産み、いつの間にかそれは"運命"へと名を変える。

何で俺は、今ここにいるのだろう。

ミルフィストで、チャムとレイチェルをごろつきから助けたからか。

それとも、ゲイルの集めてきた沢山の依頼書から、シャノンの送りつけたそれを見つけてしまったからか。

レナと出会ったからか。

エアニスは首を振った。

馬鹿馬鹿しい。

考えた所で分かる筈も無いし、そのような事はどうでも良い。

今こうしている間にも運命は紡がれているのだ。

これ以上自分の辿った運命を振り返って、後悔はしたくない。

その為に、今は一日でも早くレイチェルの・・・

いや、シャノンやエルカカの村人達の望みを叶えてやらなければならない。

それは2年半前、ザード=ウォルサムがエルカカに作った大きな借りを返す為でもある。

「・・・行こうか。

あんまり油売ってると、シャノン達に怒られそうだ」

「はいっ」

レイチェルに続き、チャムとトキも車に向かい歩き出した。

エアニスは歩き出す前に街道の先、エルカカの村がある方角を向いて、そっと目を閉じた。

思い浮かべたのは、ゲイルとレナの3人で過ごした、ほんの1週間だけの平穏な生活。

全てを失ってしまった訳ではない。

悲しい結末だったが、それから始まった未来が、戦争の終わった今の世界なのだから。

目を開けたエアニスは、惜しむように視線を戻す。

「何やってんのよー！

置いて行くわよーっ！！」

チャイムが腰に手を当ててエアニスと呼んだ。トキとレイチェルも、車に乗り込まずにエアニスを待っている。

「・・・ああ、すまん」

琥珀の髪を掻き、エアニスは仲間の元へ駆け出す。

そして4人は車に乗り込み、その十字路を後にした。

- 第四部 おわり -

月の光を纏う者 -4-

<http://p.booklog.jp/book/29539>

著者：猫崎 歩

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/blah/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/29539>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/29539>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ